

SD120 (第110図)

SD120は、調査区西側を南北に貫く溝である。幅は5.0~5.6m、深さは2.2~2.4mで、断面は緩やかなV字状を呈している。出土遺物は膨大であり、今回の調査で出土した遺物の内、半数近くがSD120出土である。断面を4箇所で確認した(第3,111~113図)。いずれも、SD120の東側に平行するSD160を切っており、西側にある第2南北街路跡とはある時期同時存在を窺わせる。土層堆積を見ると、複数回(最低2回)の掘り直しが認められる。堆積土は第117図のように大きく5層に分けることができる。最下層のA層は当初に掘削された溝の埋土で、黒色の有機質土が堆積する。B層は、A層の溝を切って掘削された溝で、最下層には黒色の有機質土が堆積する。C層はAとB層を切って新たに掘削された最大幅となる(この段階で最終的な規模となる)溝で、最下層には黒色の有機質土が、上層には砂質の強い黄灰色シルト層(以下「中層」)が堆積するが、この層は道路面に敷かれた砂やシルトが流入したものである。D層はC層とは逆に、東側から流入したシルト層で、南側に行くと遺物が多く含まれる。E層は、最終的に溝が埋まった土層で、黄褐色の砂質がやや強いシルト層で、焼土の微粒子を多く含む。これらの5層の内、AからC層は溝として掘削されたものであり、一定期間滞水していたことを窺わせる有機物を大量に含む、有機臭のする黒色の有機質土が底に溜まっている。D層は道路面を形成する土層と連続していることから、道路整備の際に同時に埋められた土層であり、E層の焼土は、島津氏軍侵攻の際の天正14年の火災に伴うものと考えられる。つまり、この溝が機能していたのがAからC層の時期で、天正14年段階では道路整備と、東側(施設内側)からの土砂流入により半ば埋まっていた(埋められていた)ことが想定できる。

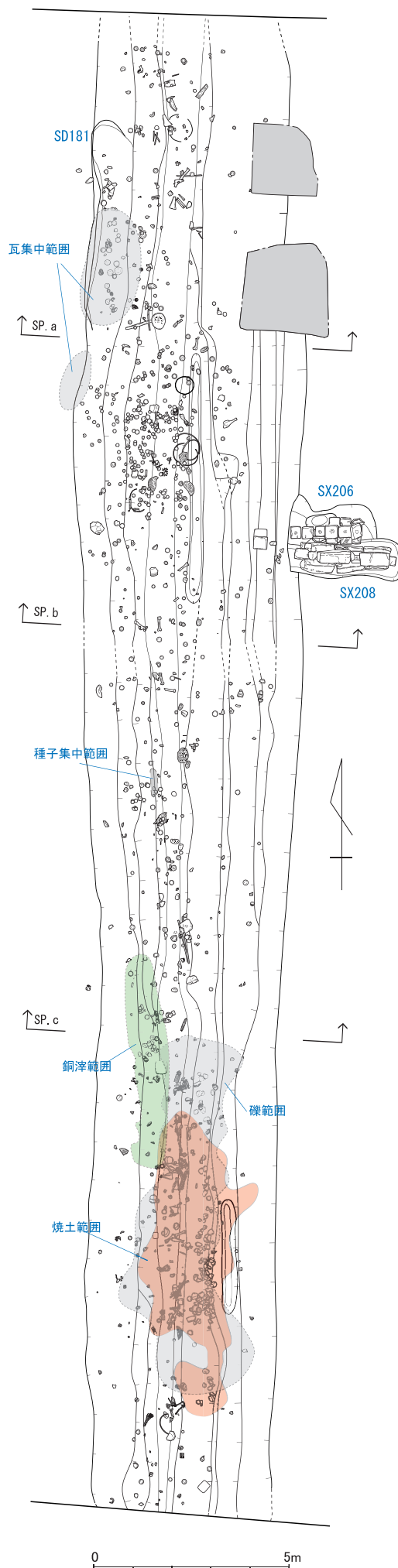
SD-160との
関係

掘り直し

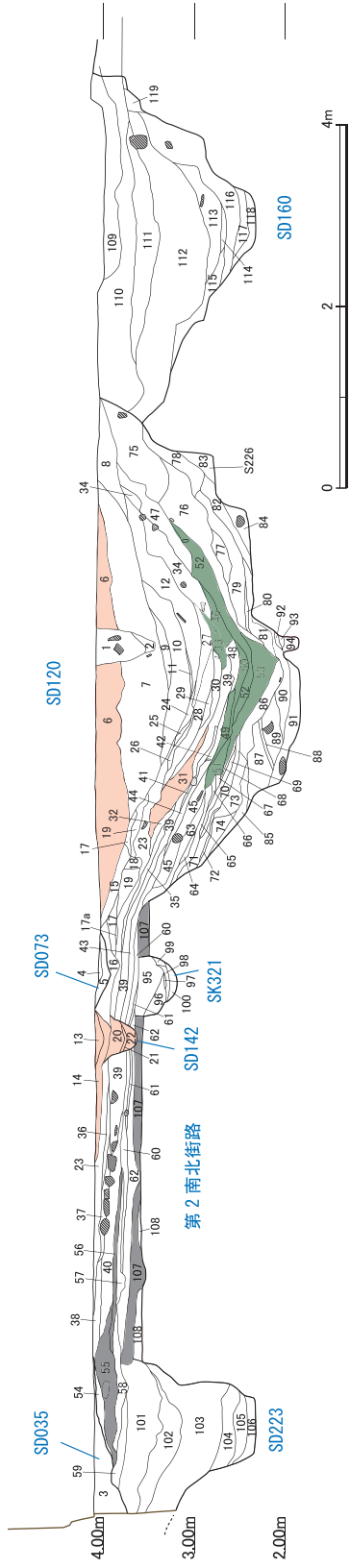
滞水

天正14年の火
災

道路整備



第110図 SD120(1/150)

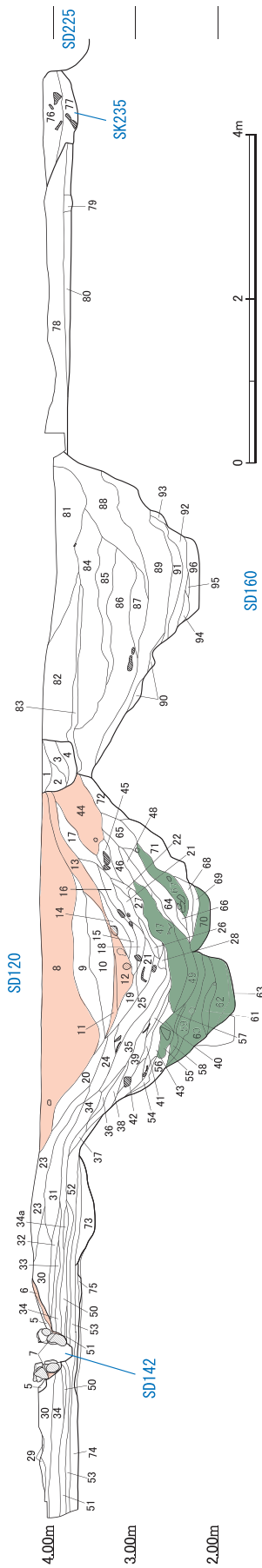


- | | | |
|------------------------------|--------------------------|---------------------------------|
| 1.暗褐色砂質シルト 焼土粒少量含む | 66.黒褐色シルト 黄褐色鉄分帯あり | 95.灰色シルト SK321埋土、鉄分少量含む |
| 2.暗褐色砂質シルト | 67.黒褐色シルト 黄褐色鉄分帯あり、粗砂粒含む | 96.暗褐色砂質シルト SK321埋土、灰色粘質土ブロック含む |
| 3.褐色砂質シルト SD035埋土 | 68.黄褐色シルト 黄褐色鉄分多量含む | 97.灰色シルト SK321埋土 |
| 4.暗褐色砂質シルト SD073埋土 | 69.黒褐色砂質シルト 黄褐色鉄分帯あり | 98.暗褐色砂質シルト SK321埋土 |
| 5.灰黄褐色砂層 SD073埋土、粗砂粒・小石多量含む | 70.黄灰色砂層 細砂粒含む | 99.灰色シルト SK321埋土 |
| 6.暗褐色砂質シルト 焼土粒少量含む | 71.黄灰色シルト | 100.灰色シルト SK321埋土、鉄分少量含む |
| 7.暗褐色砂質シルト | 72.暗灰黄色シルト | 101.暗褐色砂質シルト SD223埋土 |
| 8.黒褐色砂質シルト 粗砂粒含む | 73.黒褐色シルト 明褐色鉄分多量含む | 102.褐色シルト SK321埋土、黄褐色土ブロック多量含む |
| 9.にぶい黄褐色砂質シルト 粗砂粒多量含む | 74.黒褐色シルト 明褐色鉄分少量含む | 103.暗褐色シルト SD223埋土 |
| 10.にぶい黄褐色砂質シルト 粗砂粒多量含む | 75.暗褐色砂質シルト | 104.暗褐色粘質土 SD223埋土 |
| 11.黒褐色シルト | 76.灰黄褐色砂質シルト | 105.暗褐色粘質土 SD223埋土 |
| 12.にぶい黄褐色砂質シルト 粗砂粒・小石多量含む | 77.黒褐色シルト | 106.褐色粘質土 SD223埋土 |
| 13.暗褐色砂質シルト 焼土粒少量含む | 78.黒褐色シルト 鉄分少量含む | 107.褐灰色砂礫層 小石非常に多く含む |
| 14.暗褐色砂質シルト 焼土粒少量含む | 79.黒褐色シルト 鉄分・黄褐色ブロック少量含む | 108.黒褐色シルト |
| 15.灰黄褐色砂層 粗砂粒・小石多量含む | 80.暗灰黄色シルト | 109.褐色砂質シルト |
| 16.褐色砂質シルト 粗砂粒少量含む | 81.黒褐色泥層 鉄分少量含む | 110.にぶい黄褐色砂質シルト 黄褐色土ブロック少量含む |
| 17.灰黄褐色砂層 粗砂粒・小石多量含む | 82.黒褐色泥層 鉄分少量含む | 111.にぶい黄褐色砂質シルト |
| 18.暗褐色砂質シルト | 83.黒褐色シルト 鉄分少量含む | 112.暗褐色砂質シルト 焼土粒少量含む |
| 19.暗褐色砂質シルト 焼土粒少量含む | 84.黒褐色シルト | 113.黄灰色砂質シルト 焼土粒少量含む |
| 20.黒褐色砂層 SD142埋土、焼土粒多く含む | 85.黒褐色シルト | 114.黄灰色砂質シルト 細砂粒多量含む |
| 21.にぶい黄褐色砂礫層 SD142埋土、炭化物多量含む | 86.黒褐色シルト | 115.黄灰色砂質シルト 細砂粒少量含む |
| 22.オリーブ黒色砂層 SD142埋土、炭化物多量含む | 87.オリーブ黒色シルト 微砂粒多量含む | 116.灰黄褐色粘質土 |
| 23.にぶい黄褐色砂礫層 粗砂粒含む | 88.オリーブ黒色粘質土 | 117.褐灰色粘質土 暗褐色土ブロック少量含む |
| 24.褐灰色砂層 粗砂粒含む | 89.オリーブ黒色粘性シルト | 118.褐灰色粘質土 |
| 25.暗褐色砂層 粗砂粒含む | 90.黒色粘性シルト | 119.褐色砂質シルト |
| 26.褐灰色砂層 粗砂粒含む | 91.黒色粘性シルト 微砂粒多量含む | |
| 27.黒褐色シルト | 92.暗オリーブ褐色粘性シルト | |
| 28.褐灰色砂礫層 粗砂粒～小石多量含む | 93.黒褐色粘性シルト | |
| 29.黒褐色砂礫層 粗砂粒～小石多量含む | 94.黒褐色砂層 | |
| 30.黒褐色砂質シルト 粗砂粒・貝殻含む | | |
| 31.暗褐色砂質シルト 焼土ブロック含む | | |
| 32.黒褐色砂質シルト | | |
| 33.黒褐色泥炭層 貝殻・木片含む | | |
| 34.黒褐色砂質シルト 礫少量含む | | |
| 35.灰黄褐色砂質シルト | | |
| 36.灰黄褐色シルト | | |
| 37.黒褐色シルト | | |
| 38.暗褐色砂質シルト 粗砂粒多く含む | | |
| 39.黒褐色シルト 炭化物・細砂粒含む | | |
| 40.暗褐色砂質土 焼土粒・小石多量含む | | |
| 41.褐灰色砂層 | | |
| 42.黒褐色シルト | | |
| 43.灰黄褐色シルト 粗砂粒含む | | |
| 44.灰黄褐色シルト 粗砂粒多量含む | | |
| 45.黄灰色シルト | | |
| 46.黒色泥炭層 木片含む | | |
| 47.黒褐色シルト | | |
| 48.オリーブ黒色泥炭層 木片含む | | |
| 49.黒色泥炭層 | | |
| 50.黒色泥炭層 | | |
| 51.黒色泥炭層 | | |
| 52.黒色泥炭層 | | |
| 53.黒色泥炭層 木片多量含む | | |
| 54.暗褐色砂質シルト | | |
| 55.暗褐色砂質シルト 焼土粒・小石微量含む | | |
| 56.褐灰色砂質土 粗砂粒多量含む | | |
| 57.褐灰色シルト | | |
| 58.褐色シルト | | |
| 59.褐色シルト 小石少量含む | | |
| 60.褐灰色シルト | | |
| 61.灰黄褐色砂質シルト | | |
| 62.暗褐色砂質シルト 砂礫少量含む | | |
| 63.オリーブ褐色砂礫層 粗砂粒～小石含む | | |
| 64.オリーブ褐色砂質シルト 粗砂粒～小石含む | | |
| 65.暗オリーブ褐色シルト | | |

第111図 SD120(a) 土層図 (1/80)

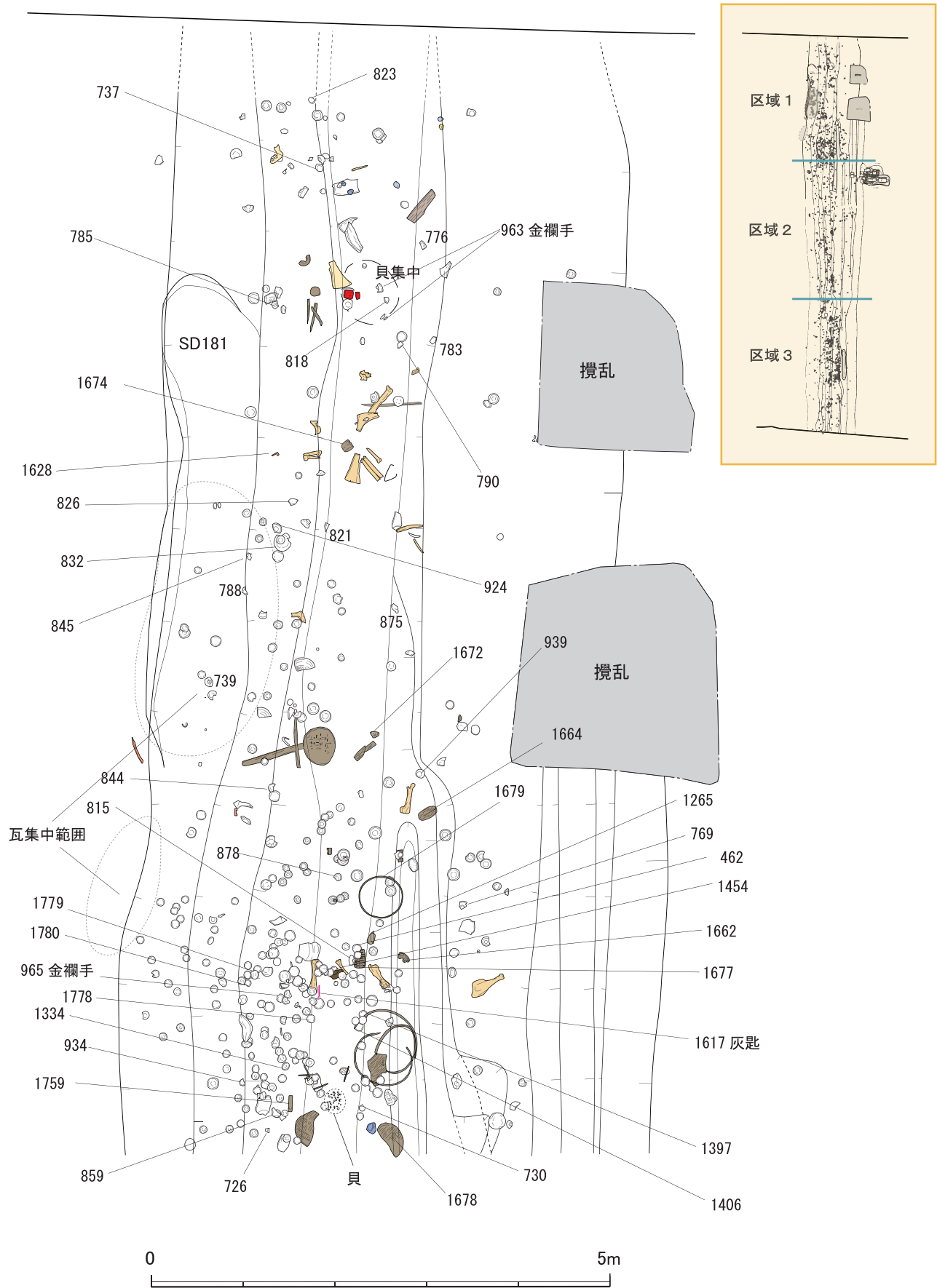


第112図 SD120(b)土層図(1/80)

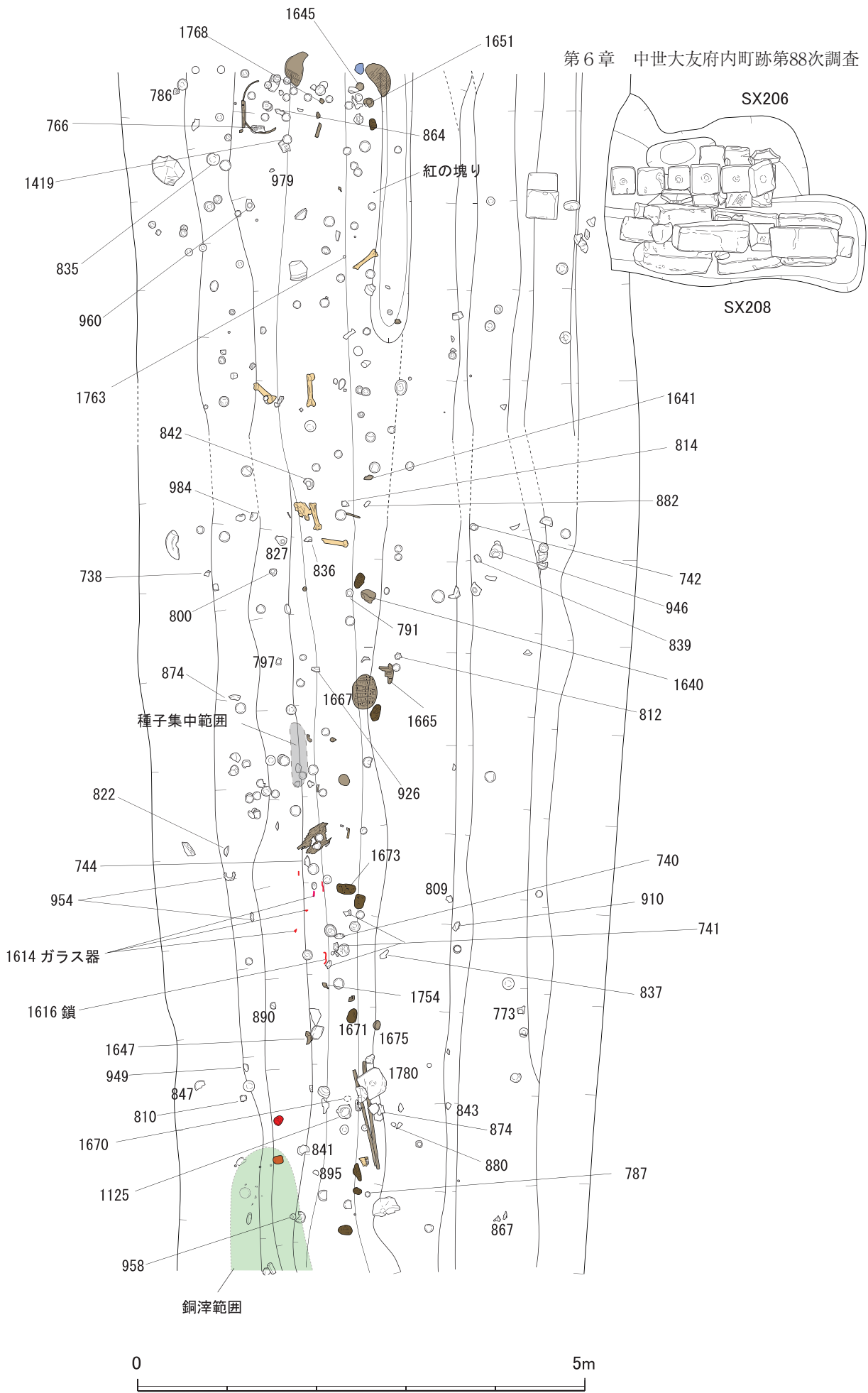


- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| 1.暗褐色砂質シルト 焼土粒微量含む | 69.黄灰色シルト 微砂粒含む |
| 2.にぶい黄褐色砂質シルト 焼土粒少量含む | 70.黒色泥炭層 黄褐色土ブロック少量含む |
| 3.暗褐色砂質シルト | 71.暗灰色シルト |
| 4.暗褐色砂質シルト 黄褐色土ブロック少量含む | 72.オリーブ褐色砂質シルト |
| 5.にぶい黄褐色砂質シルト SD142埋土、粗砂粒少量含む | 73.黒色砂質土 細砂粒含む |
| 6.褐灰色砂質シルト SD142埋土、焼土粒・粗砂粒少量含む | 74.褐灰色砂礫層 小石非常に多く含む |
| 7.黒褐色砂質シルト SD142埋土、焼土粒・粗砂粒少量含む | 75.灰黄褐色シルト |
| 8.にぶい黄褐色砂質シルト 黄褐色土ブロック少量含む、焼土粒少量含む | 76.灰褐色砂質シルト 焼土塊・礫多量含む SK235埋土 |
| 9.にぶい黄褐色砂質シルト | 77.暗褐色シルト SK235埋土 |
| 10.にぶい黄褐色砂質シルト 焼土粒少量含む | 78.にぶい黄褐色砂質シルト 包含層 |
| 11.灰褐色砂質シルト 焼土粒少量含む | 79.暗褐色砂質シルト |
| 12.灰黄褐色砂質シルト 焼土粒多量含む | 80.褐色シルト 包含層 |
| 13.褐灰色砂質土 焼土粒・小石多量含む | 81.にぶい黄褐色砂質シルト |
| 14.褐灰色砂質土 粗砂粒小石少量含む | 82.褐色砂質シルト 黄褐色土ブロック少量含む |
| 15.灰黄褐色砂質土 粗砂粒含む | 83.にぶい黄褐色砂質シルト |
| 16.褐灰色砂質土 小石少量含む | 84.暗褐色砂質シルト |
| 17.灰黄褐色砂質土 粗砂粒含む | 85.暗褐色砂質シルト |
| 18.黒褐色砂質シルト 粗砂粒少量含む | 86.暗褐色砂質シルト 褐色土ブロック少量含む |
| 19.黒褐色砂質土 粗砂粒含む | 87.灰黄褐色砂質シルト 炭化物少量含む |
| 20.灰黄褐色砂質シルト 粗砂粒少量含む | 88.黒褐色砂質シルト |
| 21.黒褐色砂質シルト 粗砂粒少量含む | 89.黒褐色砂質シルト 細砂粒少量混じる |
| 22.灰黄褐色砂質土 粗砂粒含む | 90.にぶい黄褐色シルト |
| 23.褐灰色砂質シルト 粗砂粒含む | 91.褐灰色砂質土 粗砂粒多量含む |
| 24.褐灰色砂質土 粗砂粒含む | 92.にぶい黄褐色粘質土 黄褐色土ブロック少量含む |
| 25.黒褐色砂質土 粗砂粒含む | 93.灰褐色シルト |
| 26.黒褐色粘質土 鉄分多量含む | 94.灰黄褐色粘質土 鉄少量含む |
| 27.黒褐色粘質土 | 95.灰黄褐色粘質土 |
| 28.黒褐色粘質土 鉄分多量含む | 96.黒褐色粘質土 |
| 29.暗褐色砂質シルト 細砂粒含む | |
| 30.暗褐色砂質シルト 鉄分少量、粗砂粒含む | |
| 31.黒褐色砂質土 鉄分少量、粗砂粒少量含む | |
| 32.褐灰色砂質土 粗砂粒少量含む | |
| 33.黄灰色シルト 粗砂粒少量含む | |
| 34.褐灰色シルト 鉄分帯入る | |
| 35.黒褐色砂質土 粗砂粒含む | |
| 36.黒褐色シルト | |
| 37.黒褐色砂質シルト | |
| 38.黒褐色砂質土 | |
| 39.黒褐色砂質土 小石多く含む | |
| 40.黒色泥炭層 土器片多く含む | |
| 41.黒褐色砂質土 | |
| 42.黒褐色砂質土 | |
| 43.黒褐色砂質土 土器片多く含む | |
| 44.暗褐色砂質シルト 焼土粒少量含む | |
| 45.暗褐色砂質シルト | |
| 46.暗褐色シルト | |
| 47.黒色泥炭層 土器片・貝殻片多量含む | |
| 48.灰オリーブ色砂層 微砂粒多量含む | |
| 49.オリーブ黒色泥炭層 貝殻片多量含む | |
| 50.灰黄褐色砂質土 微砂粒多量含む | |
| 51.灰色砂質土 | |
| 52.黄灰色シルト 鉄分少量混じる | |
| 53.黄灰色シルト | |
| 54.暗灰色シルト 粗砂粒少量含む | |
| 55.黒褐色泥炭層 粗砂粒少量含む | |
| 56.暗灰色シルト | |
| 57.黒色粘質土 | |
| 58.暗灰色シルト | |
| 59.黒色泥炭層 木片含む | |
| 60.黒色泥炭層 | |
| 61.黒色泥炭層 貝(ヤサリ)多量含む | |
| 62.オリーブ黒色泥炭層 | |
| 63.オリーブ黒色泥炭層 | |
| 64.暗灰色シルト 黄褐色土ブロック多量含む | |
| 65.暗灰色シルト 黄褐色土ブロック少量含む | |
| 66.黒褐色シルト | |
| 67.黒褐色粘質土 | |
| 68.黒色泥炭層 | |

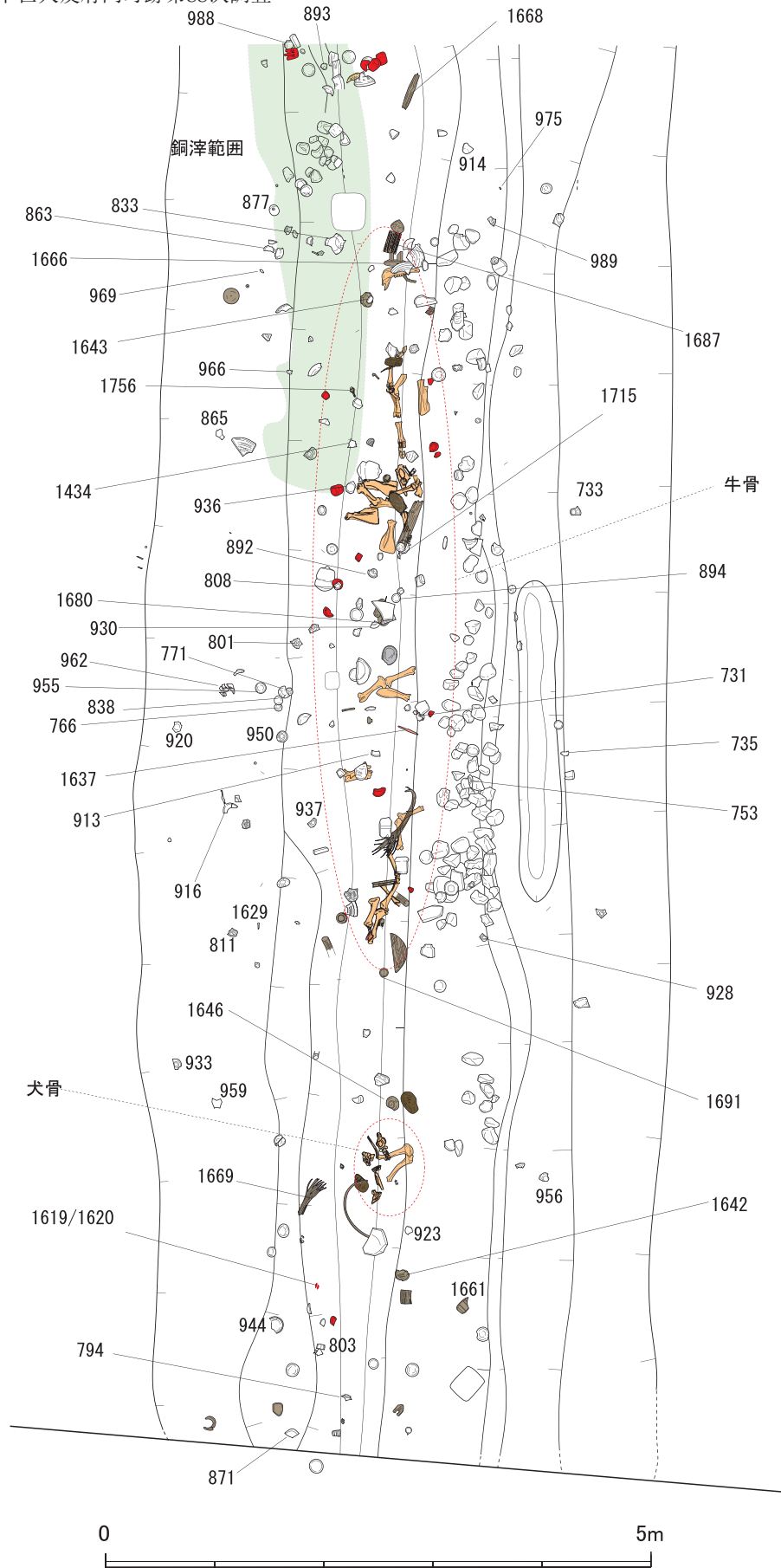
第113図 SD120(c)土層図(1/80)



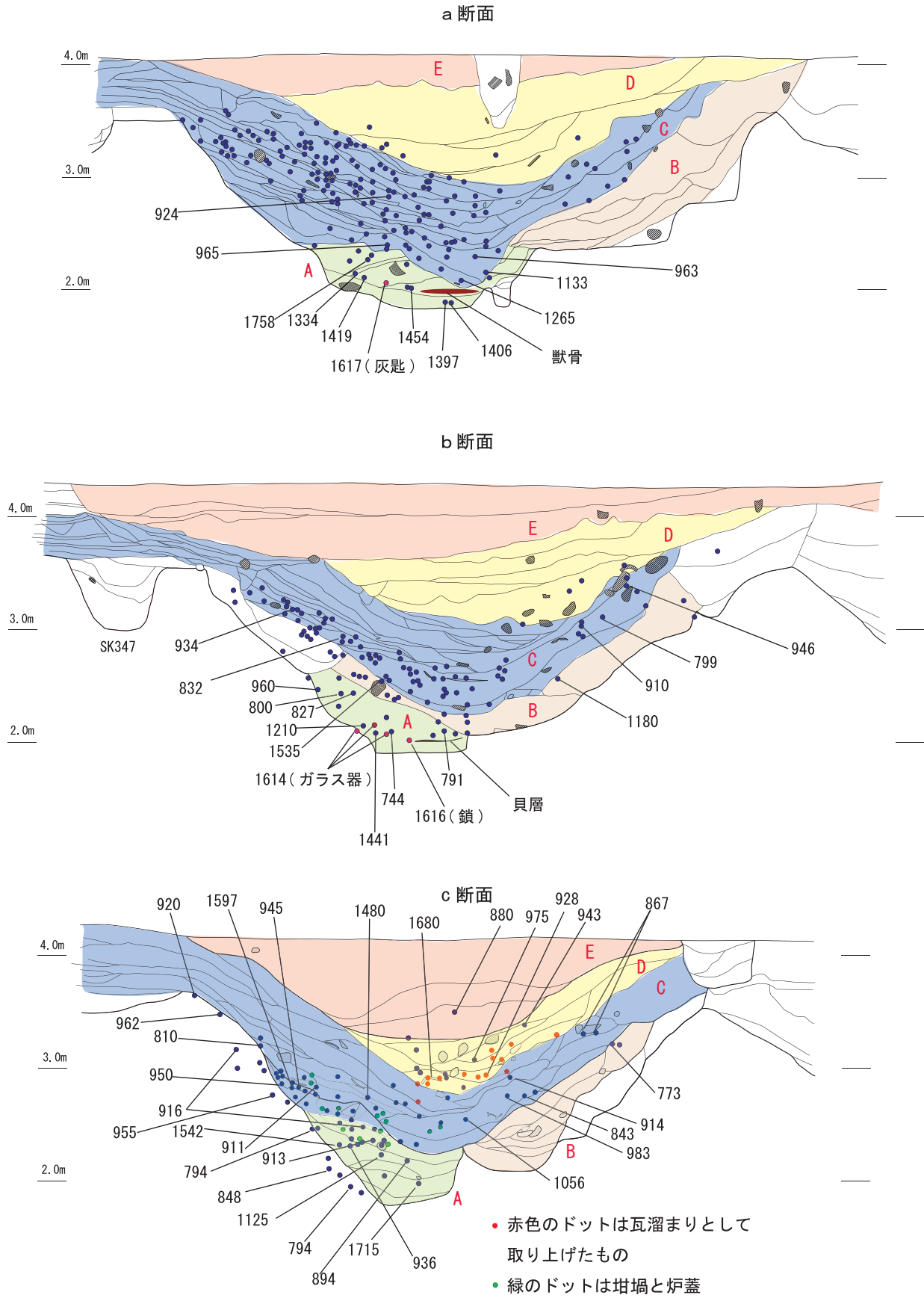
第114図 SD120遺物出土状態詳細図(1) (1/60)



第115図 SD120遺物出土状態詳細図(2) (1/60)



第116図 SD120遺物出土状態詳細図(3) (1/60)



第117図 SD120出土遺物土層断面投影図(1/50)

出土遺物は、場所によって出土する層位が異なるが、北側ではC層、中程ではAからC層、南側ではA、C、D層から多く出土している。南側のD層は多量に瓦を含む層で、東側（施設内側）から瓦を含む土が投入されたことが想定できる。AからC層の底に溜まる黒色土層は自然遺物や木製品、貝類、動物骨など有機物を良好な状態で含んでいる。SD120と平行する第2南北街路跡との関係 関係の詳細を見ると、4箇所ofセクションの内、3箇所は側溝などがあり関係を確かめられないが、セクションaでは第2南北街路跡を挟んで西側のSD223と同様、第2南北街路最下層の砂礫層を切っているのがわかる。このことにより、掘り直しによって切ったのでなければ、道路面の構築→SD120とSD223の掘削という順序がわかる。

出土遺物は第118図719から第203図1809である。遺物は、1点ずつ取り上げたもの、層位ごと（上層、中層、下層）に一括で取り上げたもの、そして層位を考えずに一括で取り上げたものが混在している。719から742は青磁。719と720には線描きの蓮弁文がある。721は無文の碗、722は高台から内側が露胎。中国南方のものか。723は盤の底部。724から726は腰折れの外反口縁皿。727は口縁部外面が面をなし、印花による唐草文を廻らせる。蓋になる可能性もある。器形不明。728から731は香炉。728は青白磁。729は外面緑色の釉、内面透明釉。730と731は聞香炉で、731は龍泉系青磁。731の内面には「長福寺」の墨書がある。732は花瓶。733から742はいずれも龍泉窯ではない青磁。特に733から735の皿は見込みと高台内露胎で、中国南方の窯か。736と737は八角形になる皿、738から741は菊花皿、742は瓜型の掛花入れで、いずれも景德鎮系青磁である。

743から781は白磁である。743は口縁部が小さく外反する森田E群の碗。744と745は口縁部が直口の小型の碗か。746から753は高台を持つ底部で、746と747は12世紀前後の碗。748から753には胎土目の目跡が残る。754は高台内露胎の碗。755は口禿げになる皿。14世紀。756は内面蛇の目釉剥ぎの小皿。757と758は高台に挟りが入る小杯で、15世紀代のもの。759は貼花による文様がある破片。器形不明。760は小型の碗か。761から781は皿で、761と762は小野分類染付（青花）皿F群と同じ形をしている皿。763と764は菊花皿。765から774は口縁端部が小さく外反する森田E-2形式の皿、779から781は口縁部が内湾しながら開く、同E-1形式の皿である。

782から905は景德鎮窯の青花である。782から815はいわゆる饅頭心タイプの碗である。その内782から798は見込みに折枝文を描くものである。いずれも花の頂のすぐ外側に月または太陽を表すと考えられる丸点を持つ。782は大振りの碗で外面には花文を描く。他も外面には花文が基本である。799から805は見込みに卍形の雲文を描くものである。外面には花文を描くものが多い。806から808は見込みに団龍を描くものである。見込みが団龍の場合は、外面にも団龍を描くようである。809は見込みに花文を描く。810と811は見込みに人物を描く。811は、松下に座って筆？を持つ姿を描く。頭上には月または太陽を表す丸点がある。810は長袍（チャンパオ）と思われる服を着た人物が踊っている。その他は、812には波間の岩に佇む鷺または鷹を描き、頭上には月または太陽の丸点がある。813には全身に鱗を持つ麒麟を描く。814は見込みに同心円で表現された陰陽文を描く。高台内の銘を見ると、「萬福攸同」が782と789と800、812など「富貴長命」が786、811、871、「大明年造」が784、801、863、「福」が790、815、844など「富貴佳器」が795、799、808などとなる。

815から831はその他の青花碗。この内、824と825は口縁部が外反する小野B群で、口縁部内面に四方禪文、外面には同じような花を付ける唐草文が端正な筆致で描かれる。15世紀代のものである。828は大振りな碗で、口縁端部が同じく外反する。見込みには菊唐草が描かれ、外面は暗花で唐草を描く。826は小型で口縁部が外反する。外面には菊花が描かれる。818は魚と水中植物、820は水鳥、819は団龍、829は811と同じく松下に佇む文人、817は飛ぶサギを、830は猫を描く。828は菊？唐草を描く。831は大型の坏に分類した方が良くかもしれないが、森田分類白磁E類に同形のものがある。外面と見込みに花文を描いている。

832から862は小野分類E群の皿。832から834は太陽を中心として鳳凰が3羽向かい合った団鳳文で、切れ長の目は時代を良く表している。この3枚は大型品である。835は見込みに三段重ねの石と蘭、その他不明の花を組み合わせた文様を描き、836は寿石を挟んで薔薇と菊が描かれる。いずれも外面は唐草が描かれる。837は蓮池で遊ぶ水鳥、838は見込みと内面体部に牡丹を、839は菊花見込みに描く。840と970は同一構図で、中央に寿石を配し両側から植物が生えている。841は見込み全面に菊が描かれる。842は折枝文か。843は見込みに菊?から発する雲を描き、878は桃と考えられる木の枝に鳥が止まっている。856と857には団龍、853から855は雲文に覆われた獅子が描かれる。846は松か。850から852は蟹。847は松下の水面に浮かぶ舟に乗る人物が描かれる。845は内面周囲に飛鳥が複数描かれ、見込みには鳳凰と思われる尻尾が見える。そうすれば「百鳥朝鳳」を描いたものか。861は唐草文が描かれる

864から869は小野分類B1群の皿である。864は石榴唐草か。865から867は同じモチーフで、柵の内側の石の所から植物が伸びる。いずれも外面は唐草である。868は端正な筆致で菊を描く。外面は雲文である。869と870は森田分類の白磁E群に同形のものがある皿である。869は見込みに唐草文?、870は圏線のみである。871は分類は不明であるが、蓮池を描く大皿である。

872から875は小野分類F群の皿である。872は内面に菊唐草、外面口縁部には双銭を描く。873は見込みに柵のような構造物が見える。外面は唐草文である。高台部に砂が多量に付着している。874は見込みに団龍を描く。875は口縁部内面に雑宝の一種である馨が見える。外面は花唐草文である。876は柵の中に、鹿が2頭以上いる。877は見込みを全面菊唐草で埋めている。879は獅子。高台外面には雲文が廻る。883と884は843と同じモチーフである。881と882は団龍。885は2頭の獅子が绣球と戯れる、いわゆる玉取獅子である。886は蘭が描かれる。

890から900は小杯である。897以外は口縁部が小さく外反する同形態のものである。890と891は同一筆跡で「壽」が書かれる。その他は基本的に折枝文が描かれ、外面は地面から生えた木を4ヶ所に描いている。底面に「大明年造」の銘を持つ896は、外面に菊をモチーフにした唐草を全面に描く。口縁部が直口する897は、内面に折枝文、外面に草文?を描く。

ラマ式蓮弁文 901は蓋で、唐草が描かれる。902は瓶か壺の底部で、幅の違う蓮弁を交互に描くラマ式蓮弁文である。903は上から見ると六角形の容器で、丁寧な唐草文を描く。904は口縁端部を小さく摘み上げる皿で、口縁部内側に稚拙な唐草文?を描き、外面はやや斜めにソギを入れている。905は、景德鎮の青花が釉着したものである。

漳州窯 906から962は漳州窯の青花である。906から943は碗である。形態上は、腰の折れが小さく口縁部が大きく直口するもの(906)、腰が折れ体部が長く伸びるもの(907から914)、腰が緩やかに曲りながら体部が高く伸びないもの(915から926)の3種類に分けられるが、文様構成は基本的に同一である。文様は外面口縁端部から半裁したように菊花を描き、大振りな唐草文で体部を埋める。915と916を除くと見込みや高台内には文様や文字は描かない。これらは、見込みを蛇の目に釉剥ぎし、高台部は施釉しない。一方、927から929と932は内面を釉剥ぎせず、高台内にも施釉する。文様の描き方から漳州窯系に入れたが、明らかに色調も異なる。それは931についても言える。930は釉着した破片である。933から943は漳州窯青花碗の底部である。基本的に見込みは蛇の目釉剥ぎであるが、中には丸く釉を剥いでいるものもある(936、937)。

944から961は漳州窯青花の皿である。形態上は、口縁部が内湾するものと小さく開くもの、そして輪花になるものの3種類あり、それに碁笥底のものが加わる。944と945は見込みに大きく花文を描き、口縁部内側には四方禪文を廻らせる。その他は、圏線のみか唐草文を描く。953と954は菊花皿で、953はソギを入れている。955から958は碁笥底の皿と小杯である。見込みは蛇の目釉剥ぎ、外面底部露胎、口縁部外面に圏線に挟まれた文様帯を持つモチーフは共通する。959と960は大皿。

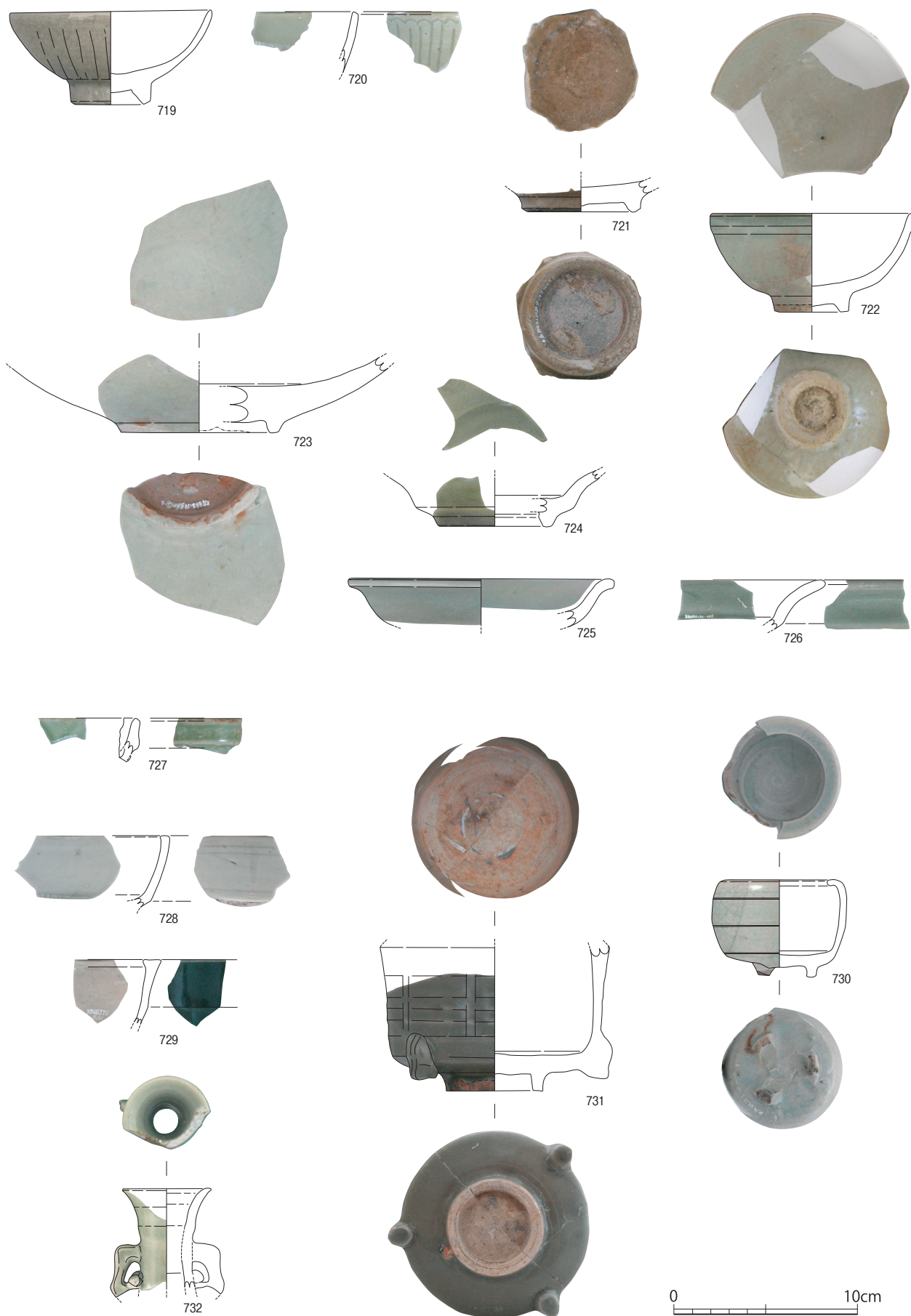
- 959は釉剥ぎをせずに花文?を大きく描く。962は、聞香炉で、外面に唐草文が描かれる。
- 金襴手 963から970は五彩で、その内963から965は金襴手である。963は大きな赤丸と上下から伸びる雲文を配し、口縁端部や赤丸部分に金彩が残る。964と965は同一個体の可能性があるが、緑色で地を埋める丸を配し、その残地を口縁部以外赤で塗るもので、金彩が僅かに残る。これらはいずれも口縁部内面に四方襷文を廻らせる。966は見込みに飛鳥を描く小杯で、外面に赤丸を3ヶ所に描き、その間に唐草文を描く。967と968は碗の破片、969と970は皿の破片である。971は褐彩の碗で、高台内側が白色の釉薬が掛かっている他はすべて褐彩である。972は磁器の壺底部である。
- 974から978は瑠璃釉の小皿。973は壺?の底部である。979と980は華南三彩で、980は容器の一部であるが、979は容器ではなく硯屏のような器物の一部である。
- 朝鮮王朝産 981から992は朝鮮王朝産の陶器である。981は内外面に印花文の施された粉青沙器の碗で、花文の間は平行線や斜線で埋めている。982から989は内面見込みに目跡を有する碗で、器形は直線的に開く体部が共通しているが、色調は各々異なっている。990から992は徳利の口縁部と底部である。
- タイ産 993から999はタイ産の四耳壺である。1000から1007はベトナム産の長胴瓶である。色調は異なるが、いずれも同形同大の瓶である。ただし、口縁端部はやや外側に突出するものと、突出しないものの2種類ある。
- 中国産 1008から1030は中国産の陶器である。1008は黒釉の皿で、内底面に「福」が朱書きされている。1009と1010は徳利の肩部と底部である。1011から1016は四耳壺である。黒色から飴色の釉が掛けられている。1016はやや黄土色を呈する。1017から1030も中国産と思われる陶器である。
- 1031から1050は天目茶碗である。すべて瀬戸美濃系のものである。いずれも削り出しの高台で、明確に輪高台になるものと、内反りの高台のものがある。1050は小型の天目茶碗である。
- 1051から1055は天目茶碗以外の瀬戸美濃系の陶器。1051は碗で、藤澤分類の丸碗A(付け高台)である。高台の幅が広く、大窯3段階後半のものとしてよく、そうすれば1570年代後半から1580年代という大窯3段階後半の年代観はSD120の年代を決める一つの材料となる。1052も丸碗であるが高台部は不明。1053は花入れである。竹の節を思わせる高台部の作りである。1055は小型の花瓶である。
- 唐津焼 1056と1057は唐津焼である。1057は島津氏侵攻後の埋め土の中から出土して。1056は道路面から流れ込んだ中層から出土している。
- 備前焼 1058から1109は備前焼である。1058は花入れ、1059は小型の壺、1060は無頸壺、1061は鉢、1062は小壺、1063と1064は徳利である。1065から1071も壺や鉢である。1072は水屋甕である。1074から1078は肩部に窯印がある甕、または壺。1080から1109は播鉢である。斜めに摺り目が入る交差摺り目のもの(1080から1091)がある。
- 瓦質土器 1110から1126は瓦質土器である。1110は甕、1111は鉢である。1112は口縁下に突帯と連続刺突文が廻る鉢。1113から1118は火鉢。1115には双頭蕨手文がスタンプされる。1119と1120は播鉢である。見込みには花文状の摺り目が入られる。宇佐を中心とした地域に多い播鉢である。1121から1125は香炉である。1125は出土した時には、使用時の状態で灰が充填されていた。扁平な胴部に直線的な首部がやや内傾して伸び、口縁部は一度開いて小さく立ち上がる。脚は、3箇所飾りの獅子頭が付くが、いずれも脚そのものは欠損している。欠けた脚に高さを合わせるために他も打ち欠いたものと思われる。首部の下端には長方形の窓が3箇所あり、その上部には幾何学文様のスタンプ文が廻る。口縁部には円形浮文が廻る。体部はよく磨かれている。1121から1124は小型の香炉である。脚が3ヶ所に付く。1126は瓦質の卸皿。
- 土師質土器 1127から1474は土師質土器である。1127から1177は底部糸切りのもので、1178から1474がいわゆる京都系土師器である。量的には圧倒的に京都系土師器が多いが、糸切り土師器も一定量占める。

これらは比較的まとまって出土しており、単なる混ざり込みではない。型的にも統一されており、内外面に轆轤目を装飾的に残す土師器以前の古い土師器（15世紀前半代）が一括で廃棄されたものか。1127や1136、1137などは14世紀代の混入品である。京都系土師器は、1180のように大型でやや薄い16世紀前半代のものも含まれるが、大部分はSD120が機能していた時期、あるいは直後の時期のものと考えて良い。1275から1288のような底部が平底になる深めの坏型のものが一定量伴うのは、この資料群の時期を示していると言える。

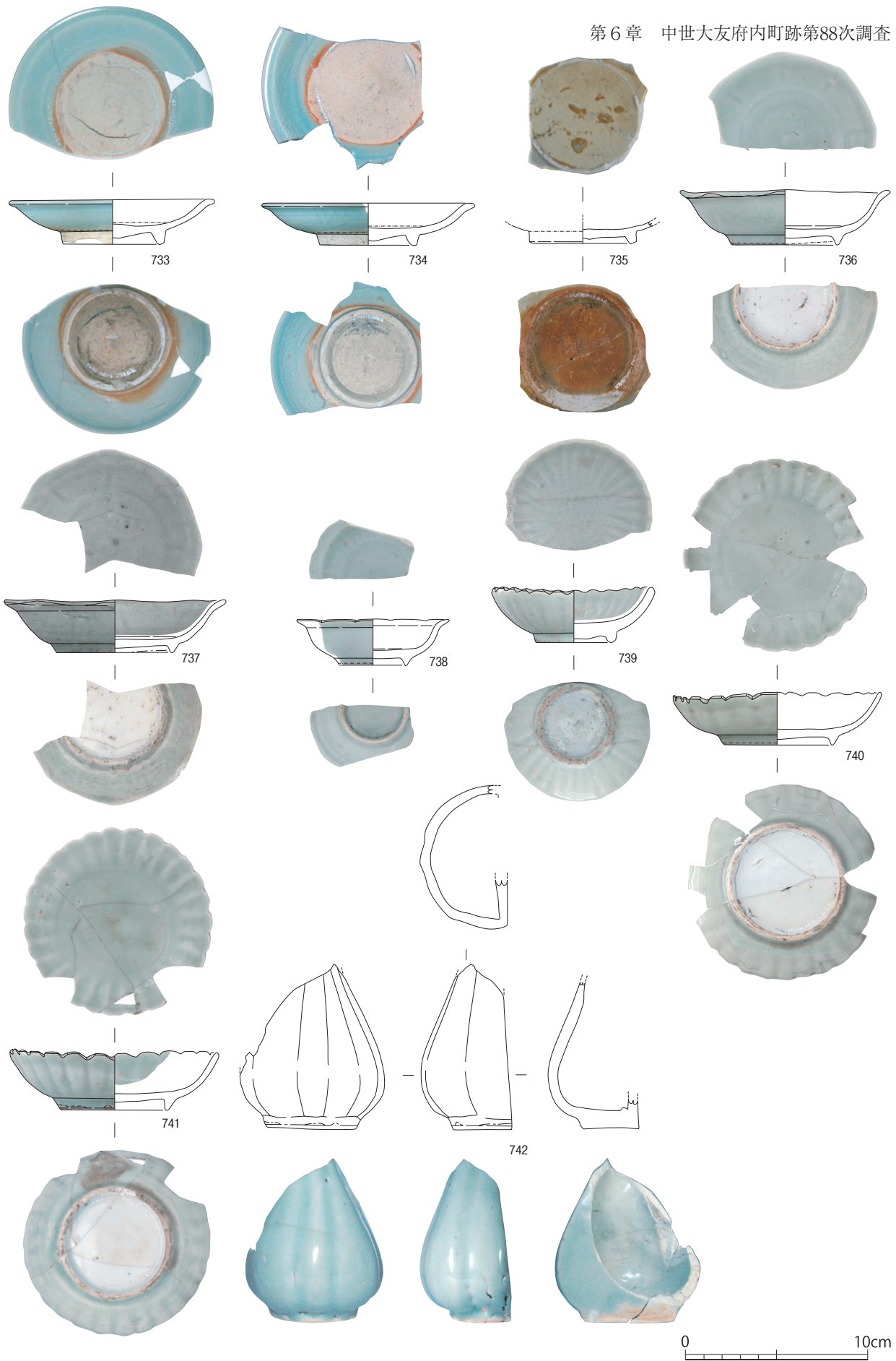
- 軒瓦 1475から1502は軒瓦である。1475から1482は軒丸瓦で、巴文が大きく珠文が38個廻るC類（1475から1479）と、巴文が小さく圏線に納まり珠文が17個廻るB類（1480から1482）がある。1481は鳥伏間である。1483から1502は軒平瓦で、中心飾りがやや硬直化した蓮華文のe類（1483から1492）が最も多い。次いで、中心飾りが退化した宝珠のc類（1496から1499）が多く、次いで中心飾りが端正な蓮華文のd類（1500から1502）があり、中心飾りが宝珠のb類（1493と1494）、中心飾りが四つ菱のa類（1495）と続く。
- 丸瓦 1503から1520は丸瓦である。形態的には凹面玉縁側に穴の開いた仕切り板が付くタイプが一定量ある。また、面取りの特徴は、玉縁端部の面取りは無いが、あっても小さな面取りである。また、凹面の痕跡を見ると吊紐は大きく2種類あり、一つは大きくU字形になるもの、もう一つは幅0.5～0.6cm程度の多条の吊紐で、いわゆる九州タイプとされるものに近い。前者には細長い叩きが伴うが、後者では見られない。凸面には縄目を残すものが多い。
- 平瓦 1521から1529は平瓦である。中央付近の幅が22cm前後と小型のものが多い。1529には焼成前に釘孔が穿たれている。
- 面戸瓦 1530と1531は伏間瓦である。1534は面戸瓦で、専用品として焼かれたものである。1532、1533は鬼瓦 塼である。1535と1536は鬼瓦である。
- 窯道具 1537と1538は窯道具のハマである。上面には制作時の布目痕が中央に残る。景德鎮窯のものと思われる。製品に付着したまま、府内に持ち込まれたものであろう。このSD120に続く第80次調査区のSD101からも1枚さらに、第11次でSD044から2枚出土している。府内では他に出土例はない。
- メンコ 1539から1542はメンコ。1542は素焼きであるが、他は瀬戸美濃系陶器の破片を加工したものである。1544から1546は燭台で、1544は15世紀代のもので、1545と1546が当該時期のものである。1543 燭台 1543は内面に布目が残る製塩土器、1547から1549は焼き塩壺とその蓋である。蓋は皿としても使用された。1550は土鈴。1551から1565は土錘。1567と1568はフィゴの羽口である。
- 製塩土器 1569から1596は埴塼である。高さは9.0cm前後、口径は8.5cm前後と企画性が高い。いずれも使用後に廃棄されたもので、歪みや滓の付着、金属の付着が認められる。蛍光X線分析の結果（第8章第3節）によると、いずれもいわゆる青銅製品を作った際の埴塼と判断されている。
- 土鈴 1597と1598は、孔が前後左右に4ヶ所空き、縦方向に取っ手がついた炉蓋と考えられるもので、被熱で脆くなっている。埴塼とこの炉蓋は鉍滓などとともに、SD120の西側、すなわち唐人町側から一括で廃棄されたものである。廃棄されたのは、断面図から見ると、2回目の大きな掘り直しの溝（堀として機能していた最後の段階）の最下層なので、SD120の機能停止前後のことになる。
- 埴塼 1599から1609は石臼である。1599から1604は目の細かい茶臼である。1599と1600は上臼、1601から1604は下臼である。1605から1608は挽き臼の上臼、1609は下臼である。
- 石臼 1610と1611は荒いノミでレンガ状に加工したもので、用途は不明である。府内では他にも出土例がある。あるいは未製品かもしれない。1612と1613は細い溝状の痕跡がある石製品である。砥石かもしれない。
- ガラス器 1614はガラス製の器の坏部破片である。口径は6.4cm、深さは残存高で3.3cm、厚さは1.3mmである。全体的にやや内湾しながら開く。ベースのガラス色は緑色で、その地に幅1.0～1.5mmの黄色のエナ

- メルの斜線（スレッド）を入れて装飾している（成分については蛍光X線分析を行っているので第8章第3節を参照）。1615はガラス製のボタン状製品である。
- 鎖 1616から1639は金属製品。1616は真鍮製の鎖である。大友府内町跡第43次調査で出土したものと基本的な作りは同じである。長さは19.2cmである。8字状にした金属棒を繋いでいて作っている。図の下側は、端の金具が付いているが、上側はまだ終結しないと思われる。
- 灰匙 1617は真鍮製の灰匙あるいは灰押さえである。完存しているが、匙部付け根あたりで反りが認められ、ヒビが入っている。全体の長さ16.0cm、匙部最大幅1.9cmで長さ3.9cm、柄部幅2～4mmで長さ11.9cmある。柄部の断面形状は方形である。匙部裏面には直線的な突起があるので、灰を押さえる時に「筋」ができる。1618と1619も匙の可能性のあるものである。
- 日貫金具 1620と1621は並んで出土した目貫である。中央に花があり、周囲に葉があしらわれている。1622は青銅製のメダル状のもの。1623は木製品の上に漆をのせ、その上面に金箔を貼ったもの。1624は銅製の皿。あるいは天秤秤の皿かもしれない。1625は白銅色を呈する何らかの容器の蓋。直径は5.3cmで、高さは1.0cmある。1626は団扇状になった真鍮（未分析）の製品で、折りたたまれた状態で出土した。取っ手の部分は両側から折り曲げられ、他のものに差し込まれるようになっている。何らかの飾り物であろうか。1627は青銅製である。鞘などの木製品の合わせを押さえる部品であろう。
- 銅製皿 1628と1629は錠前の牡金具と鍵である。1630から1634は棒状の金属製品。1635は刀装具の猿手金具。1636は何らかのものに被せて使うものか。1637と1638は小刀。1639は槍などの石突きか。
- 猿手金具 1640から1650は木地碗。いずれも漆が塗られ、文様のあるものがある。1640は高台の高いもので、押しつぶされてやや変形があるが、口径は14cm前後である。黒色漆の上に赤漆で橋文様を描く。1641は黒漆の上に赤漆で下がり藤を描く。1642は黒漆の上に赤漆で文様を描く。1643は黒漆の上に赤漆で文様を描く。1644は黒漆の上に赤漆で文様を描く。1645から1648は文様のない碗。1646の高台内には「王」と墨描きされている。1651は高台の付く漆器皿である。1652は鹿角製の筭。1653から1660は櫛である。2種類に分けられ、1653から1655は解ぎ櫛、1656から1660は梳ぎ櫛である。
- 漆器 「王」銘櫛 1661から1666は下駄である。歯をはめ込むタイプのものと削りだしたタイプのものがある。下駄は高下駄である。1662は子供用か。
- 下駄 ザル 1667はザルで、縦横に竹を編んだ状態が残る。1668は松明と考えられるもので、枝を束ねた状態が見受けられる。焼けた痕跡は残存部では確認できない。1669は1668より細い枝または竹を束ねており、箒と考えられる。1670から1673は草鞋である。発掘中は計20点近く確認できたが、取り上げてからすぐに腐食が進み、図化できたのは4点にとどまる。構造が判る状態で紐までが明瞭に残っていたものは無かった。1674と1675は曲げ物の柄杓。1676は紐が結ばれたもの。1677と1678はザル状のもの。1679と1681はタガである。タガも発掘中は計10点確認できたが、図化できたものは3点にとどまる。1680は箒状に細い枝を束ねている。1682から1686は細長い板状のもので、折敷などであろう。他は何の部位か特定出来ないが、小さな穴や釘が刺さったものもある。1687と1688は包丁の傷跡が残る組板、1690と1691は曲げ物容器の底板である。1692は碁笥の蓋。1693は半円状の板。1694から1709は箸。完存しているものの長さは18cmから25cmである。1710から1713は杭。1714から1749は様々な形態の木製品で、用途が特定出来ないものが多い。1715は模造の小刀。1716は糸巻きの部品。1717は折敷の足の部分か。
- 碁笥蓋 箸 1750から1757は独楽で、指で掴む部分があるものと無いものがある。先端部には鉄製の芯が埋め込まれている。1758は平太鼓の胴部で、鉄製の鉦が上下に6個ずつ残る破片である。鉦の外側には針を刺したような小さな孔が並ぶ。内面はノミで削られた跡が残る。1759は陽物状の木製品で、長さ17.9cm、直径は4.0～4.5cmである。完存。1760は何らかのものに被せる筒状の木製品。1761から1776はぎっちょうの球である。小さなものは直径2.9cm、大きなものは5.8cmある。1777はなすび形

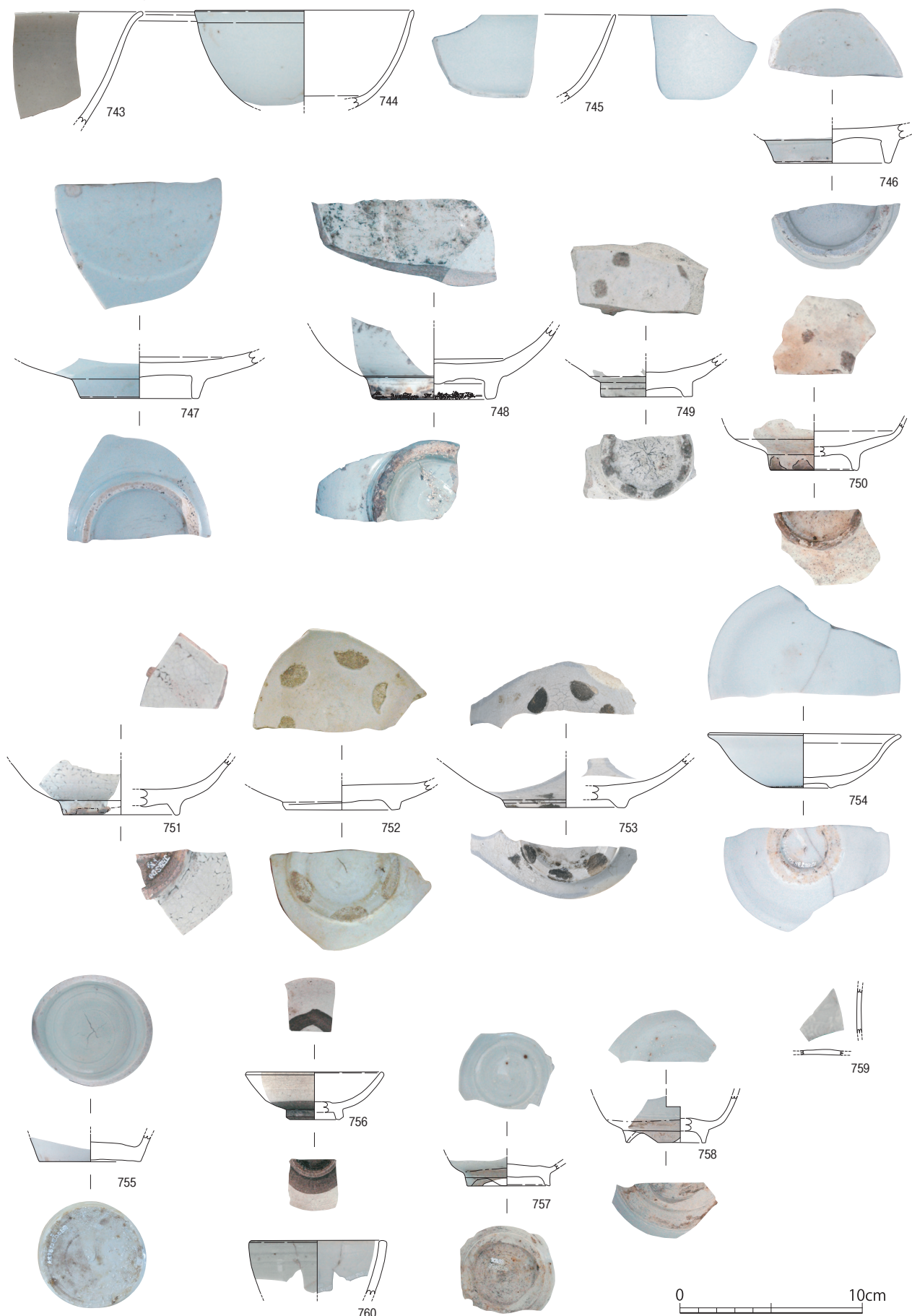
- を呈する革製品で、一方が切れた状態である。厚さは2mm程度で、周囲には糸で縫った跡がある。
- 石塔 1778から1783は石塔部材である。1778から1781は五輪塔空風輪、1781はSX206、SX208の暗渠排水の下で見つまっていることから、SD120に開いた排水口の転用石材として用いられていたものが転落したものと考えられる。
- 1782と1783は火輪である。
- 1787から1809は銅銭である。種別については第80図を参照。
- 獣骨 また、A層とした最下層からは獣骨や食物残渣の貝殻が多量に出土している。出土地点は第114図から116図に「貝集中」「牛骨」「犬骨」などと記している。それらの分析については第8章第1節を参照願いたい。分析資料中の第476、477図のウシは第116図の「牛骨」に、第478、479図のイヌは第116図の「犬骨」に該当する。
- 中世以前の 1784は弥生時代後期の甕、1785は8世紀の須恵器、1786は10世紀前後の土師器である。
- 遺物 以上、SD120出土遺物を説明したが、全出土量からすると半分程度と考えられる。土師器は完形品以外は載せていない。陶磁器は大きな破片は極力載せたが、口縁部や底部が無いものは載せていない。これらの遺物は、断面図（第117図）からわかるように、西側（唐人町側）から流れ込んだ、あるいは廃棄されたものと、東側（大規模施設側）から流れ込んだものがある。ガラス器やチェーンなども含んで大部分は前者と考えられるので、これらの使用者は唐人町居住者である可能性が高い。子どもの遊具（独楽やぎっちょう、さらにはタガもタガ回しで遊んだかもしれない）も、その使用者は町の居住者である。一方で、大規模施設内からは京都系土師器が中心として少量が流れ込んだ状態で出土している。おそらく、SD120がある程度埋まった段階でも、SD120の東側には暗渠排水施設が隠れる程度までは土塁、あるいは築地状の施設が残っていたのであろう。
- 唐人町
- SD120の廃絶時期については、先に述べたように天正14年段階で半ば埋まっていたと考えられ、その後の火災処理に伴い完全に埋められ、町屋化している。では、SD120の掘削時期は何時かという、最下層から漳州窯青花が出土することから1570年を遡ることは考えられないので、廃絶を遅くとも1586年だとすると、大きく2回の溝さらいが行われていることを考えても、1570年代の後半から末を想定できるのではなかろうか。
- 廃絶時期



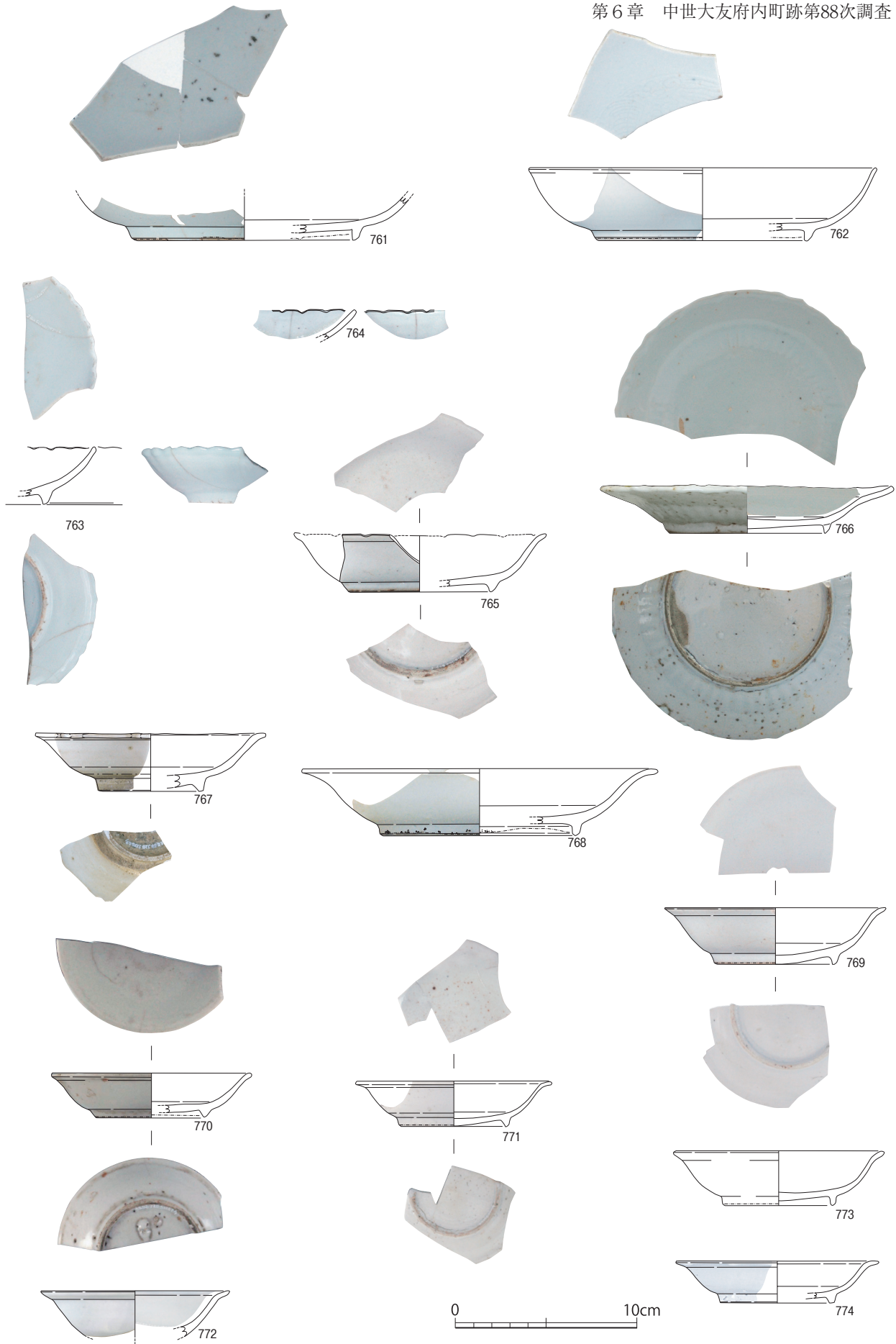
第118図 SD120出土遺物(1) (1/3)



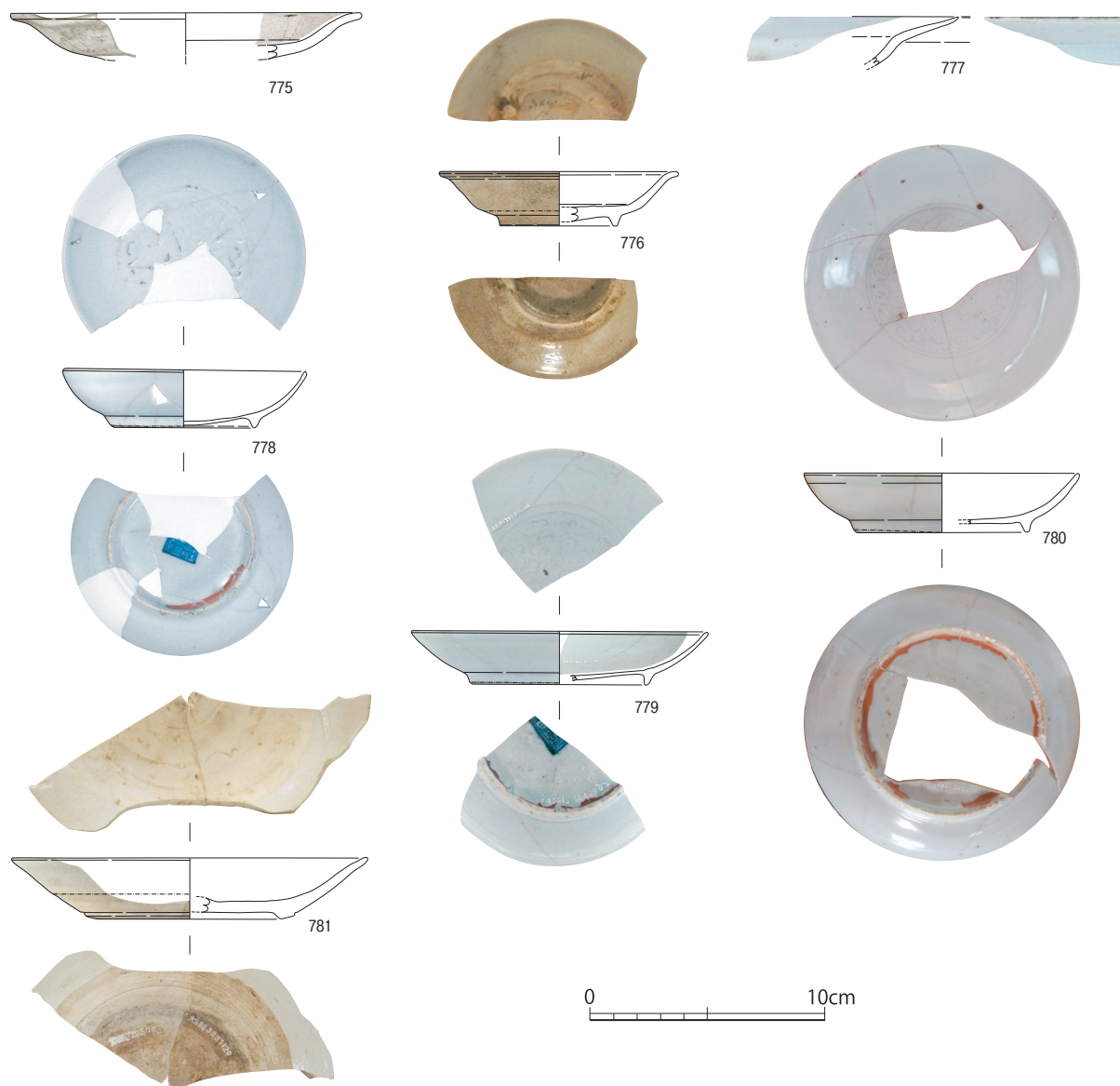
第119図 SD120出土遺物(2) (1/3)



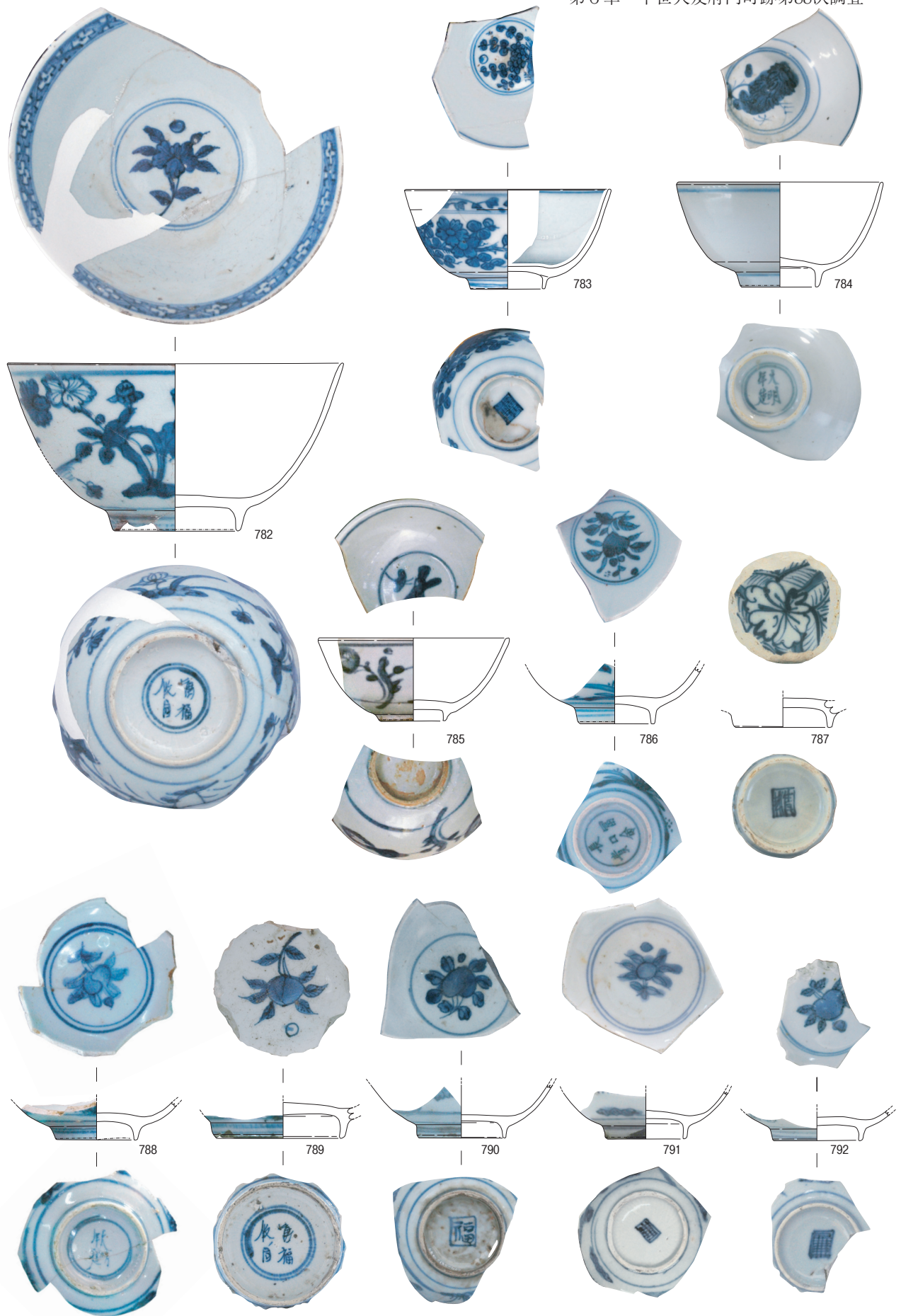
第120図 SD120出土遺物(3) (1/3)



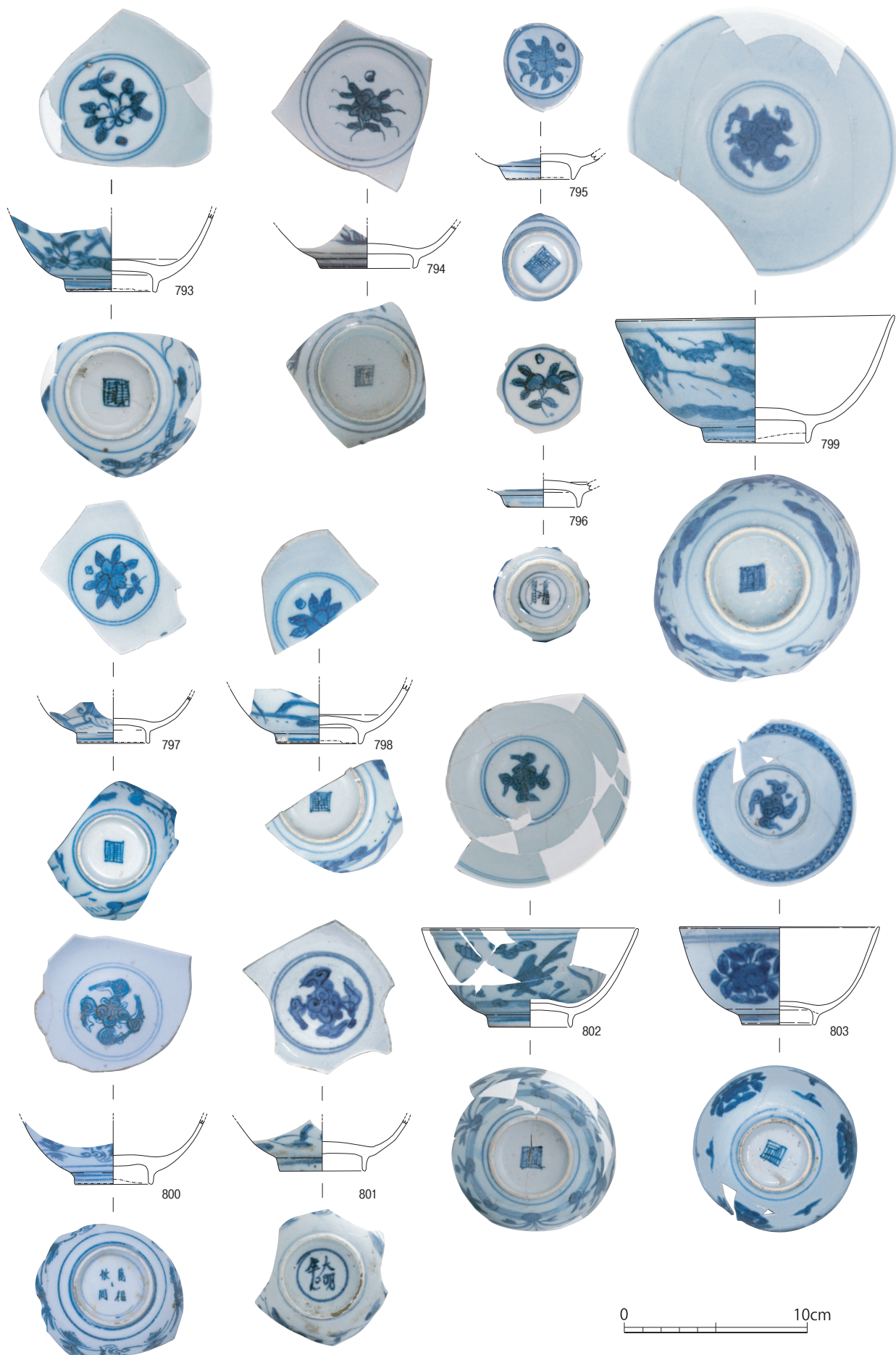
第121図 SD120出土遺物(4) (1/3)



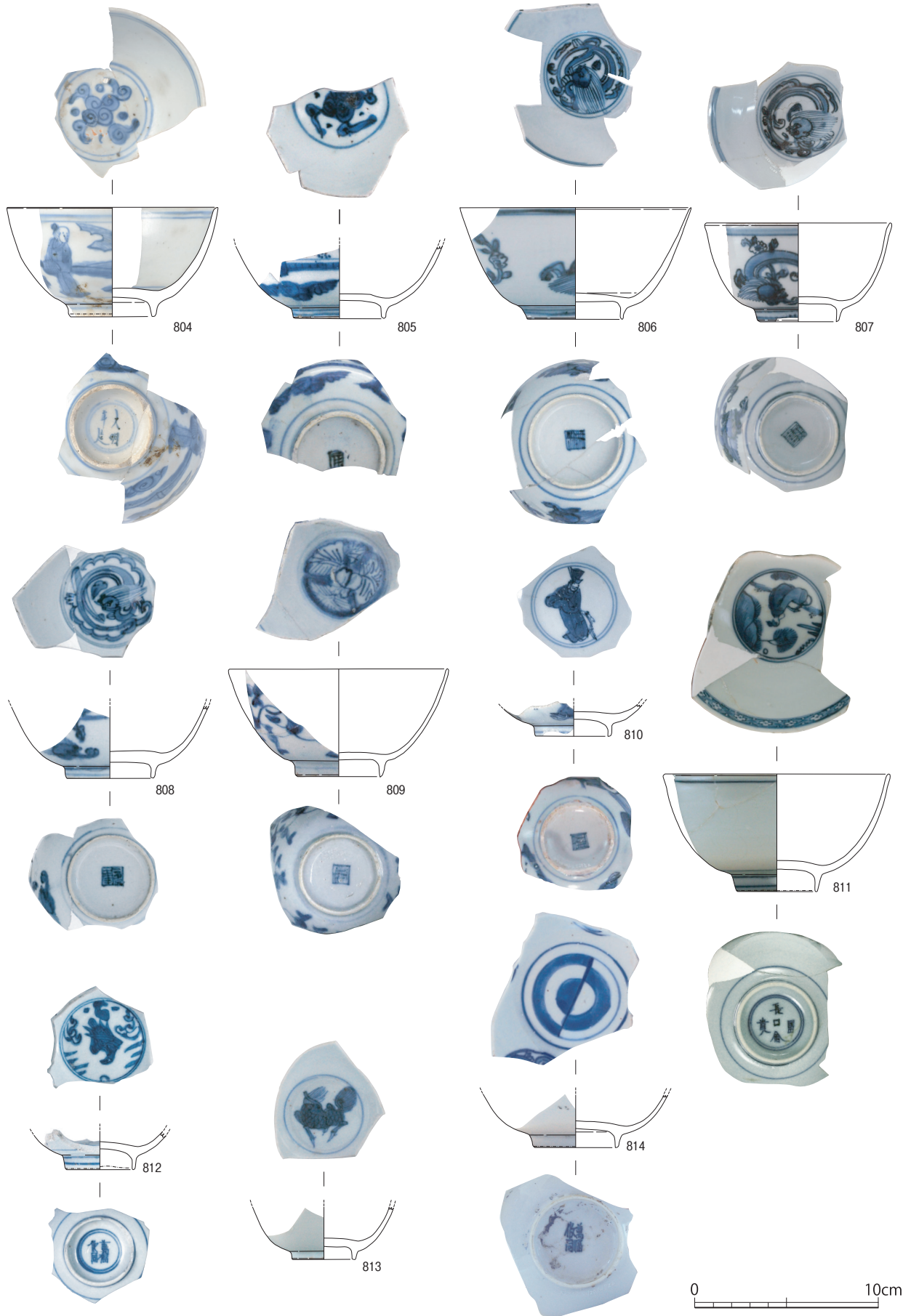
第122図 SD120出土遺物(5) (1/3)



第123図 SD120出土遺物(6) (1/3)



第124図 SD120出土遺物(7) (1/3)



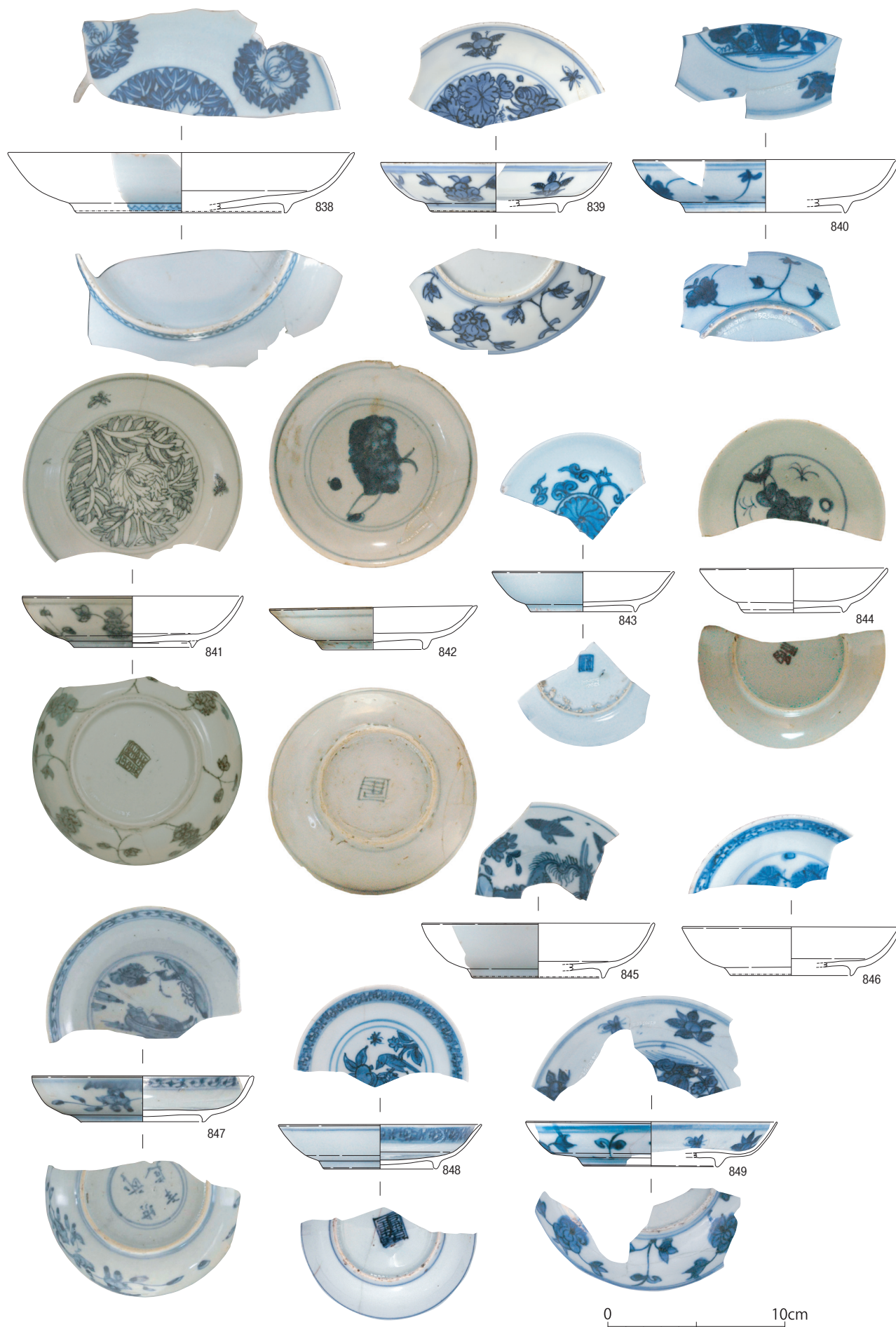
第125図 SD120出土遺物(8) (1/3)



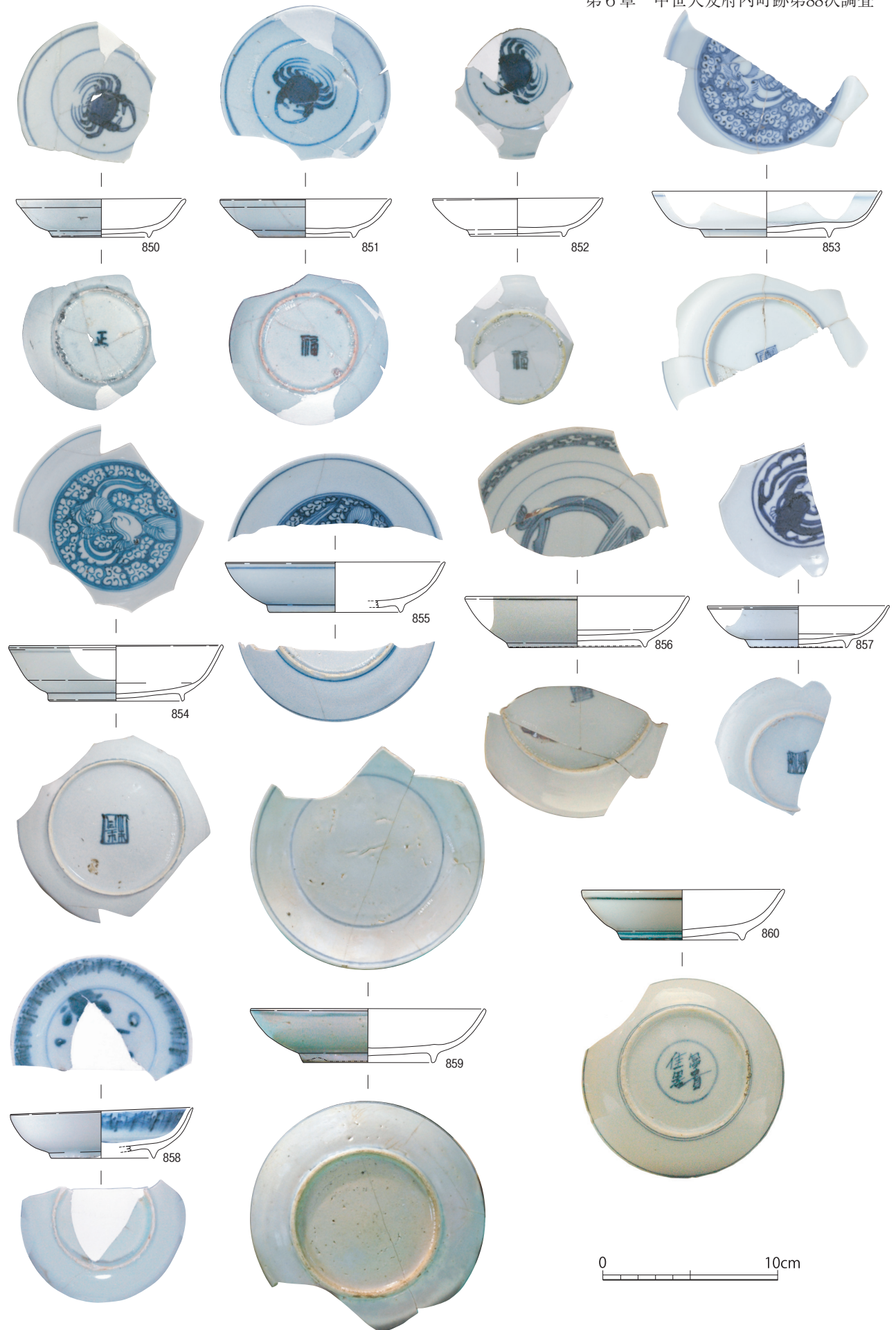
第126図 SD120出土遺物(9) (1/3)



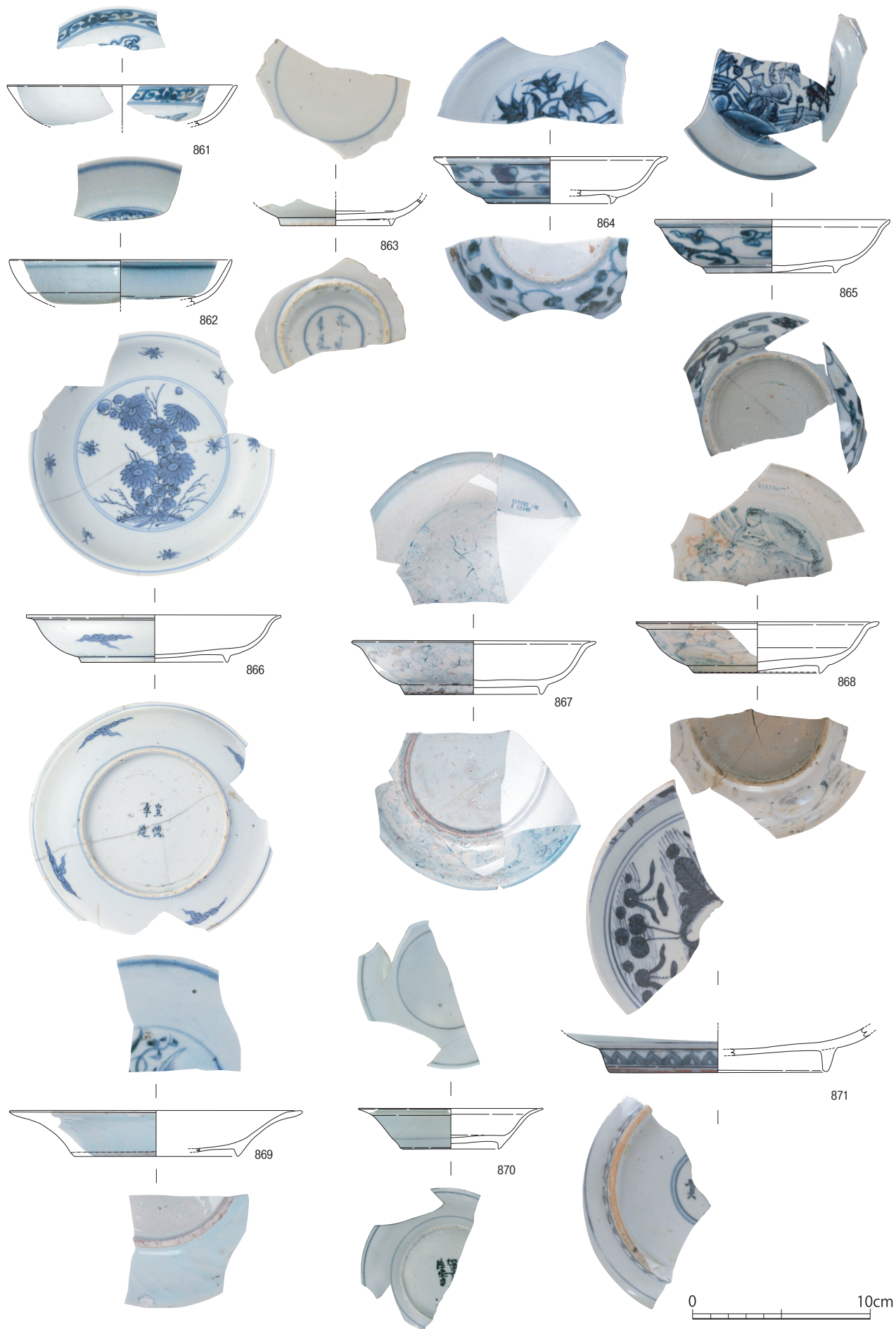
第127図 SD120出土遺物(10) (1/3)



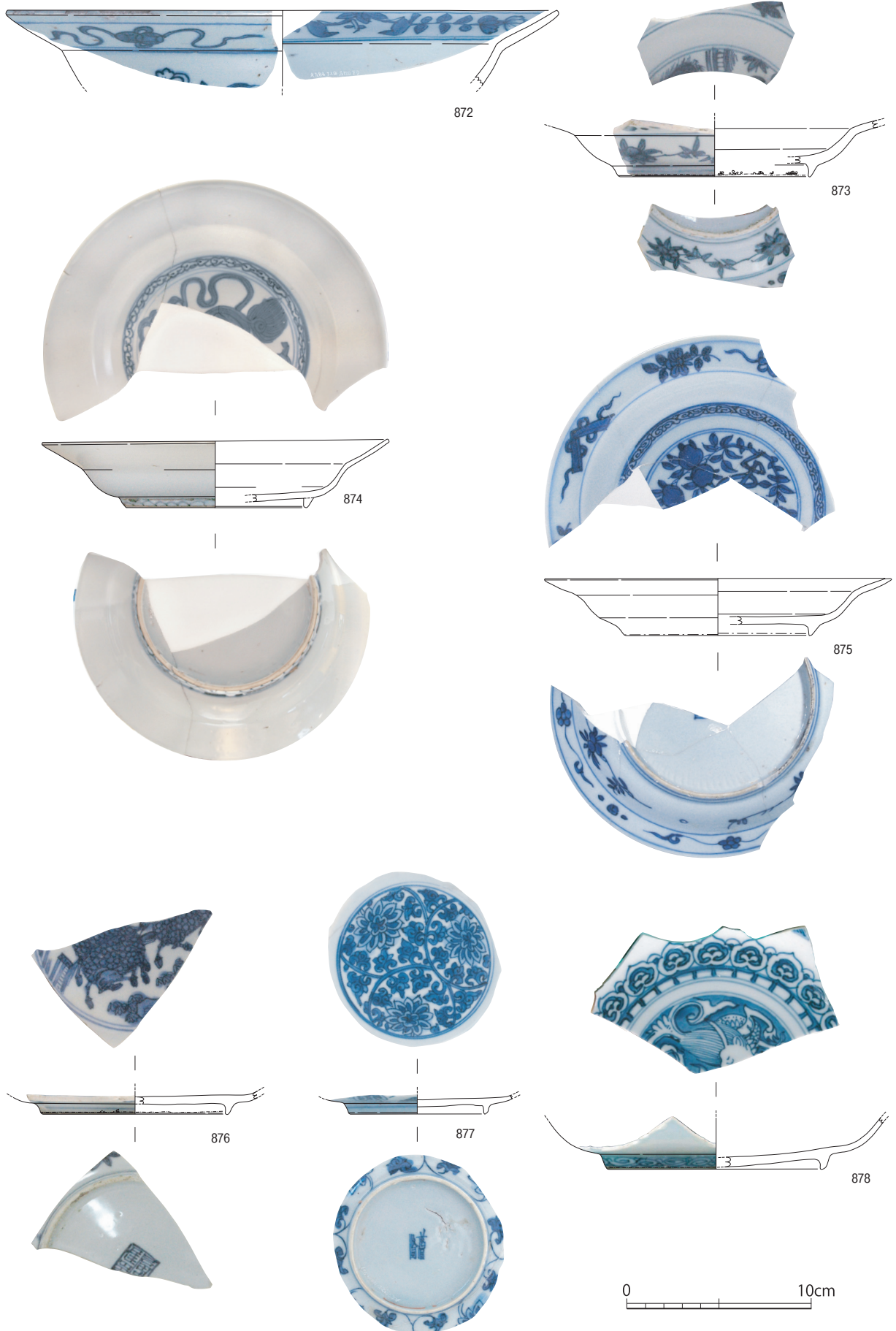
第128図 SD120出土遺物(11) (1/3)



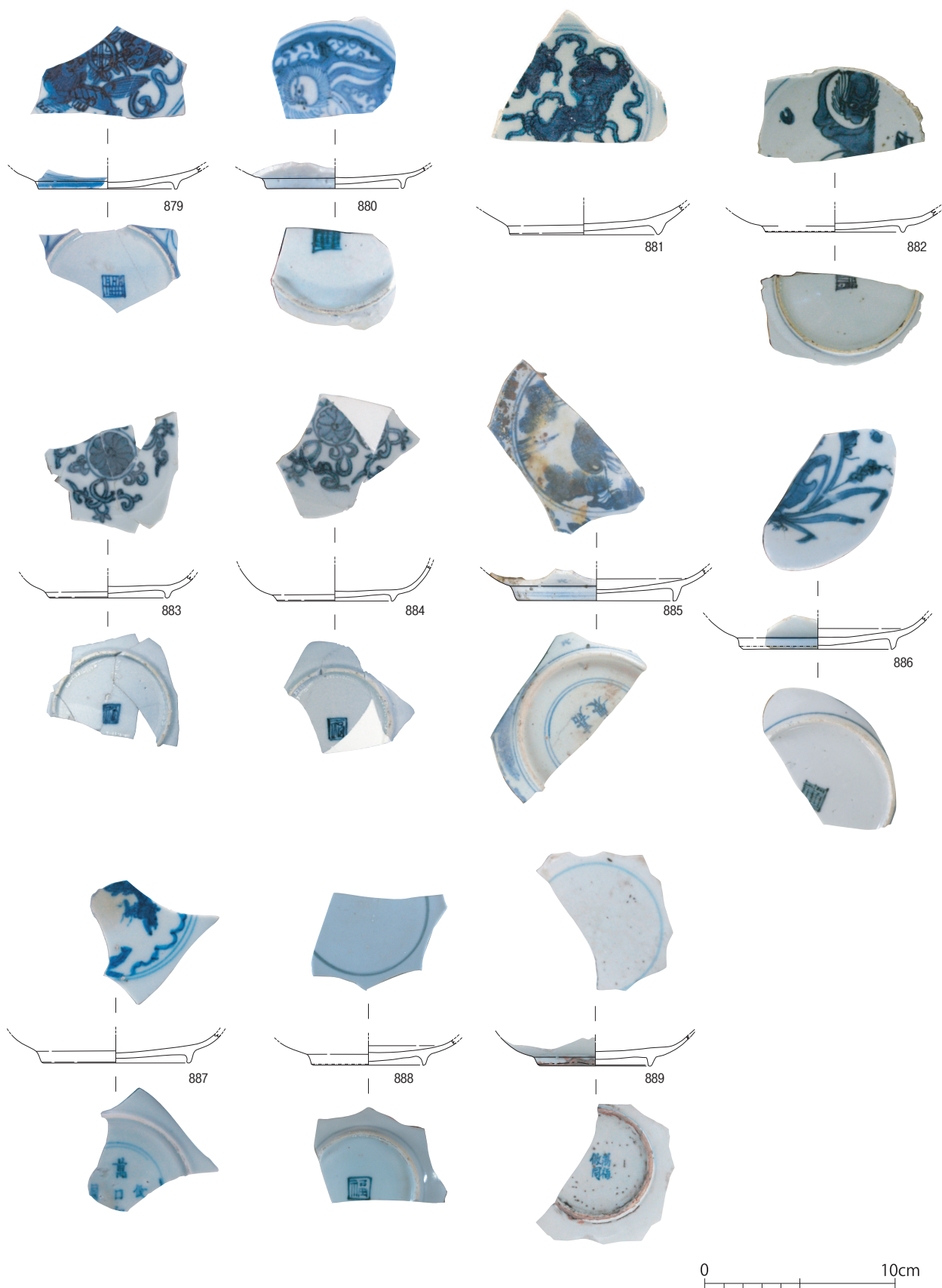
第129図 SD120出土遺物(12) (1/3)



第130図 SD120出土遺物(13) (1/3)



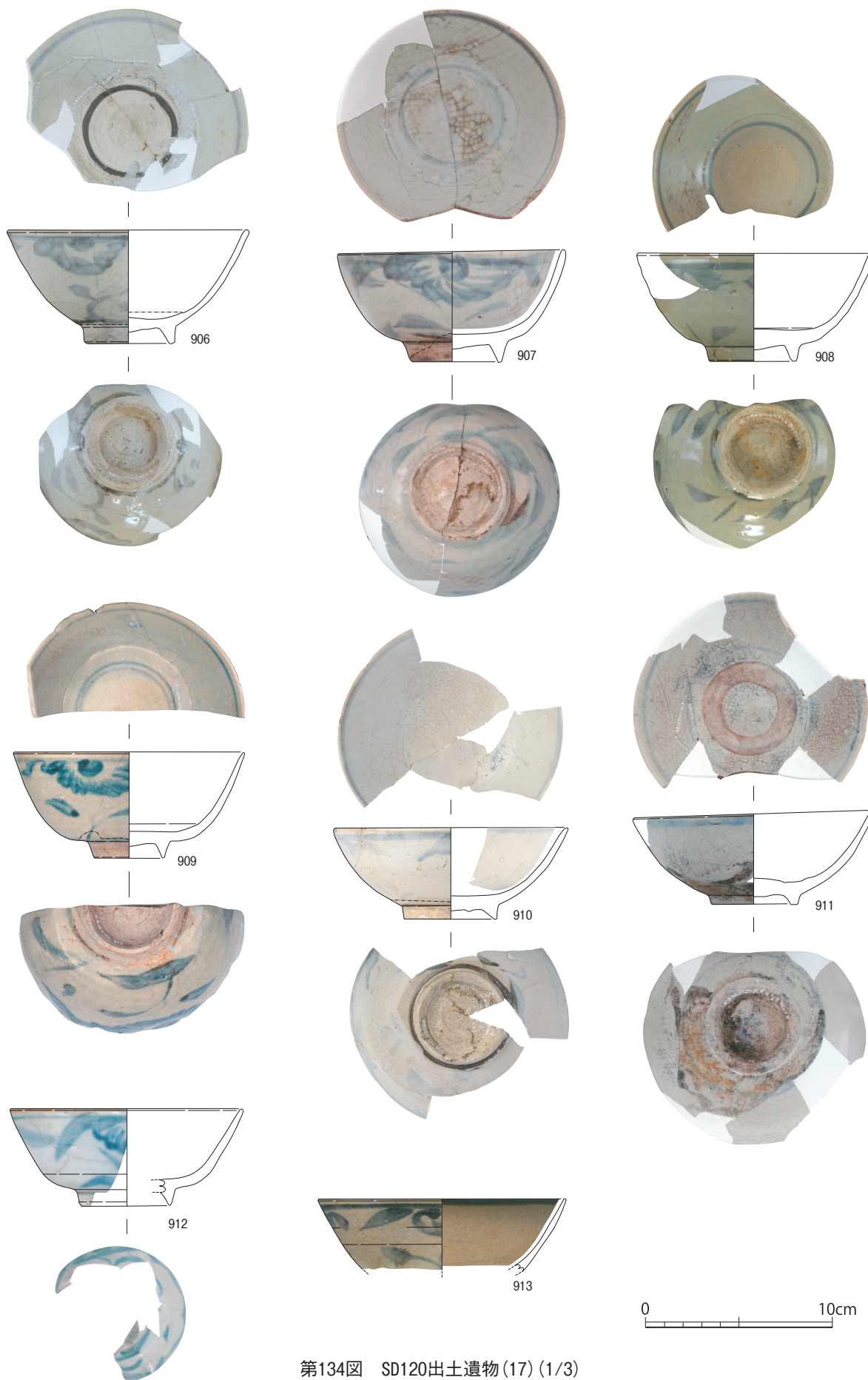
第131図 SD120出土遺物(14) (1/3)



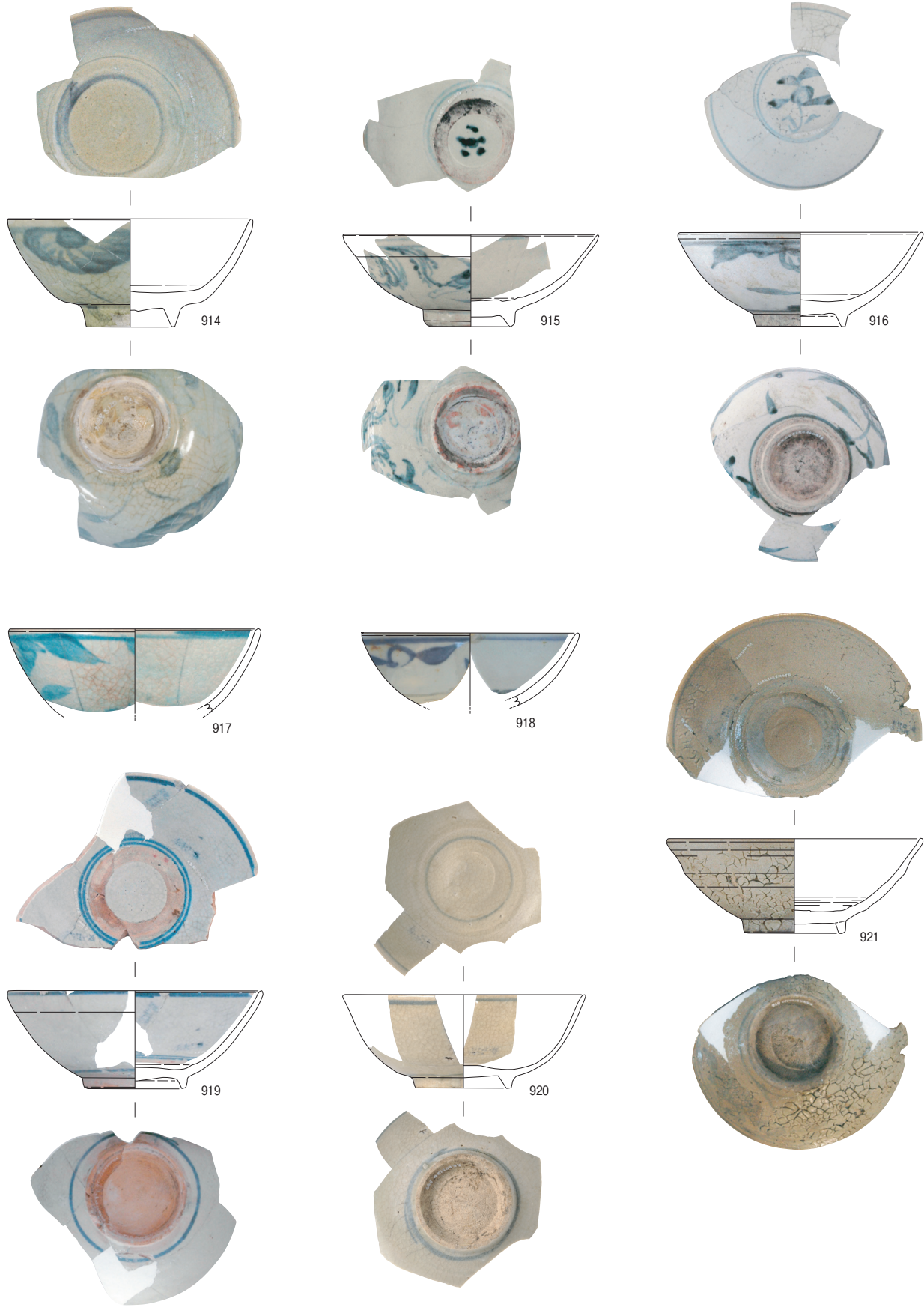
第132図 SD120出土遺物(15) (1/3)



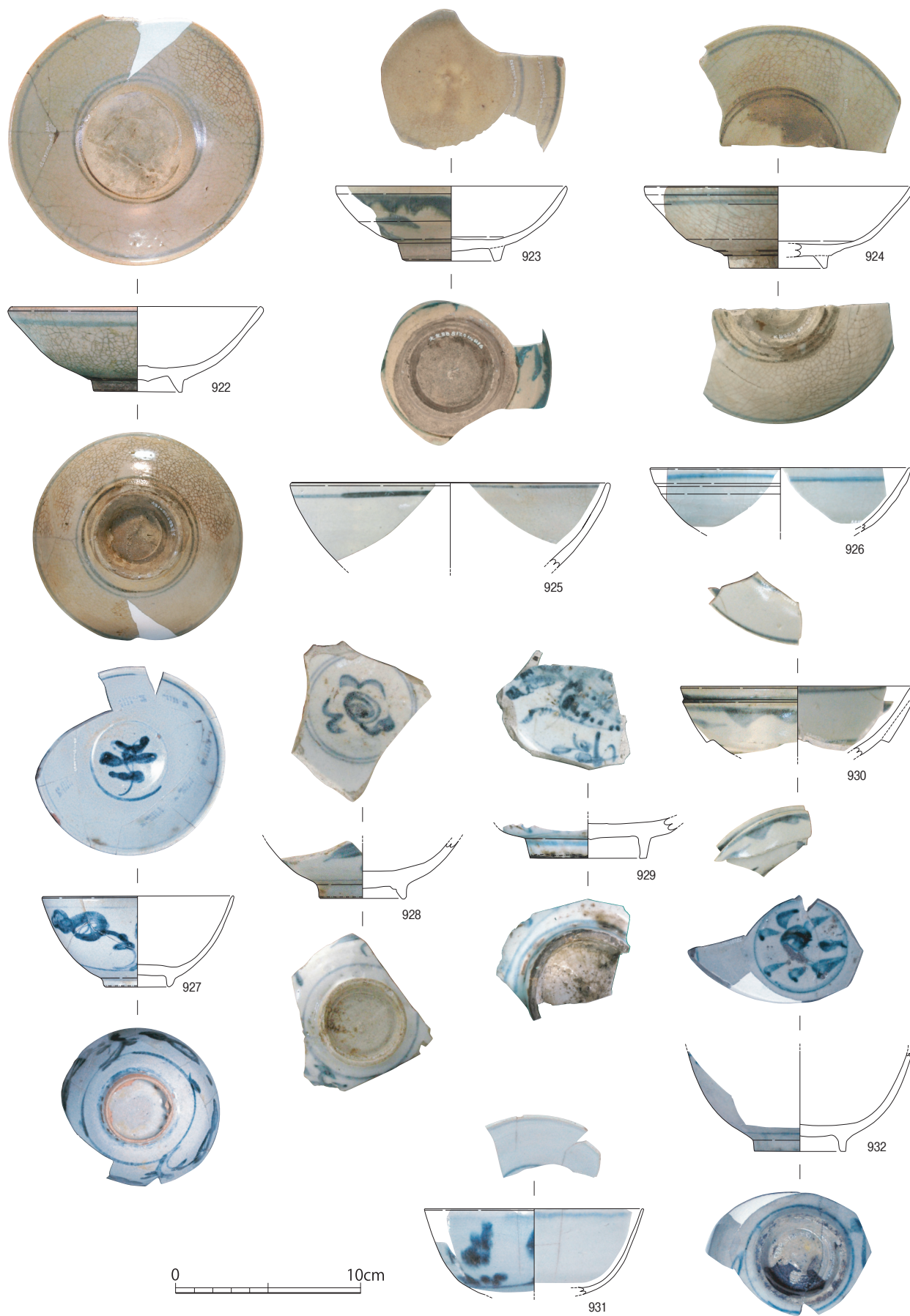
第133図 SD120出土遺物(16) (1/3)



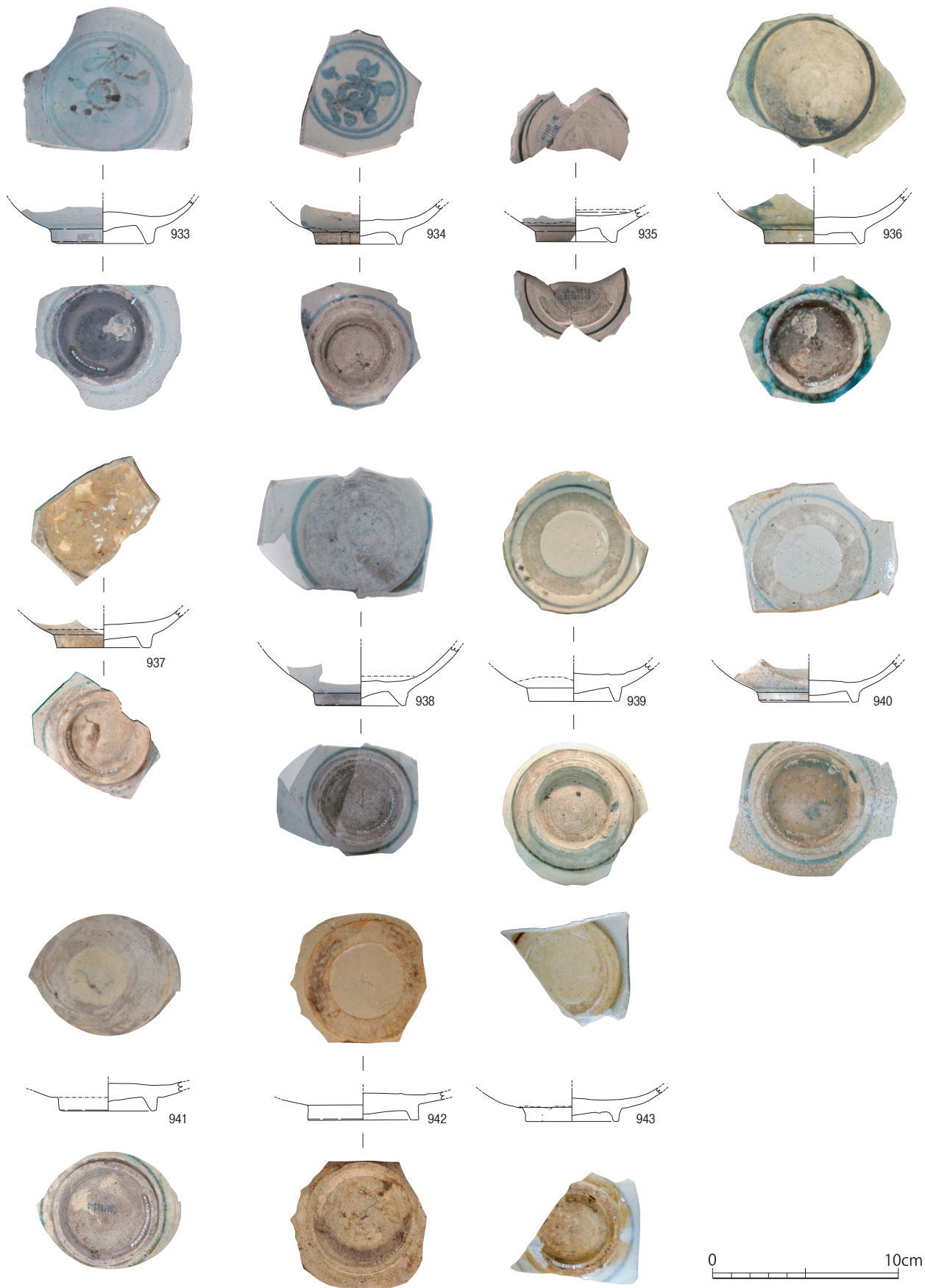
第134図 SD120出土遺物(17) (1/3)



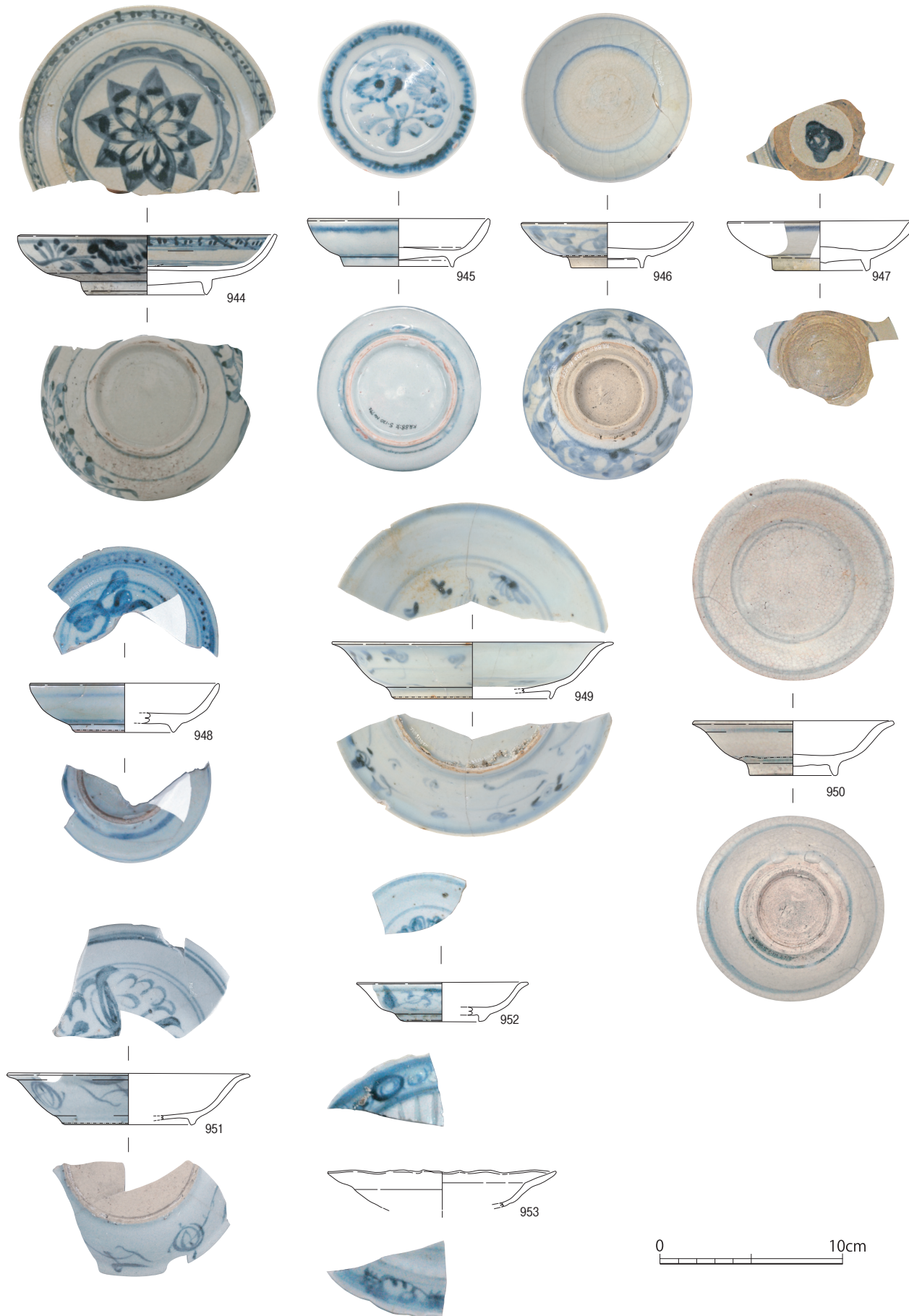
第135図 SD120出土遺物(18) (1/3)



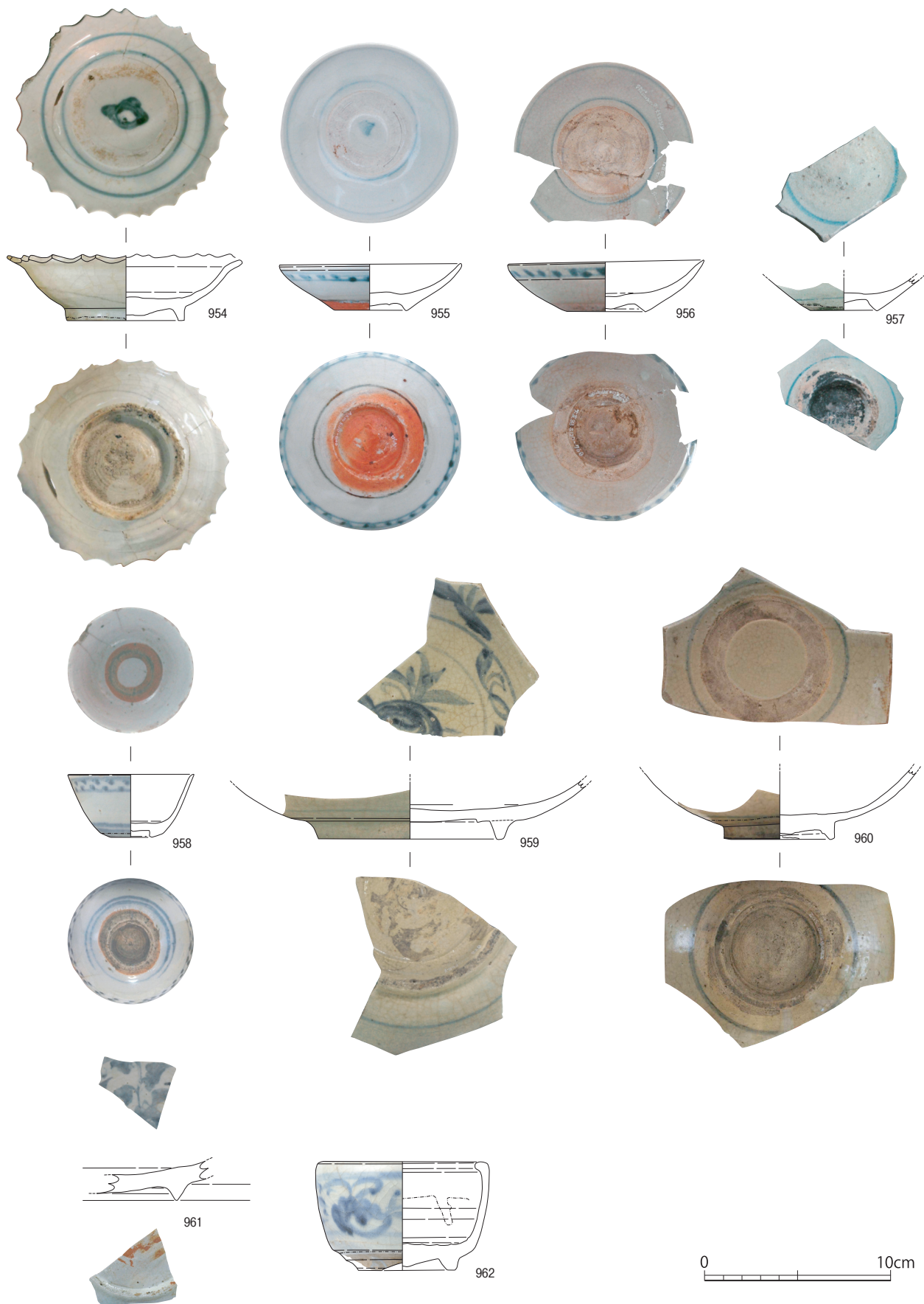
第136図 SD120出土遺物(19) (1/3)



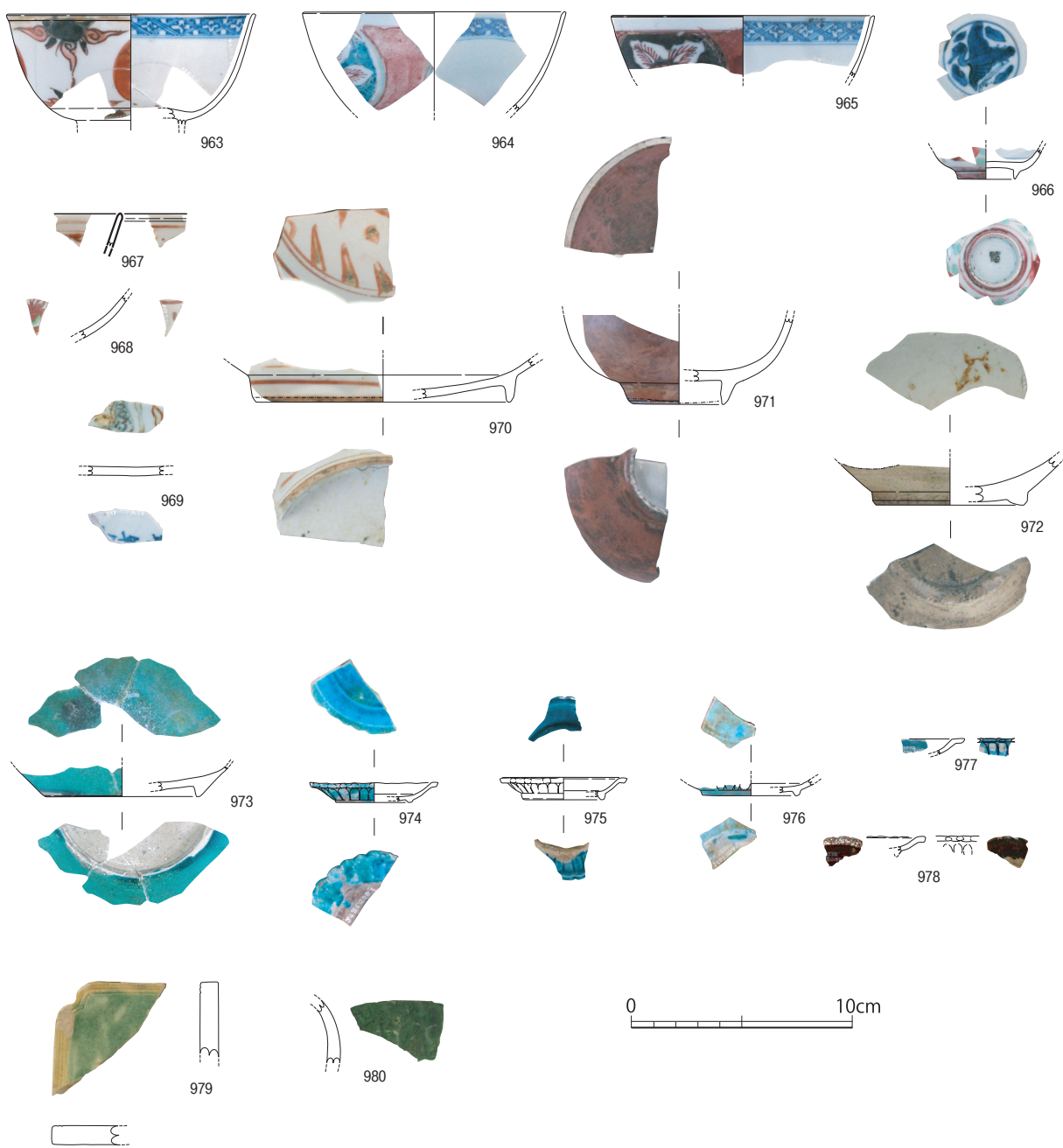
第137図 SD120出土遺物(20) (1/3)



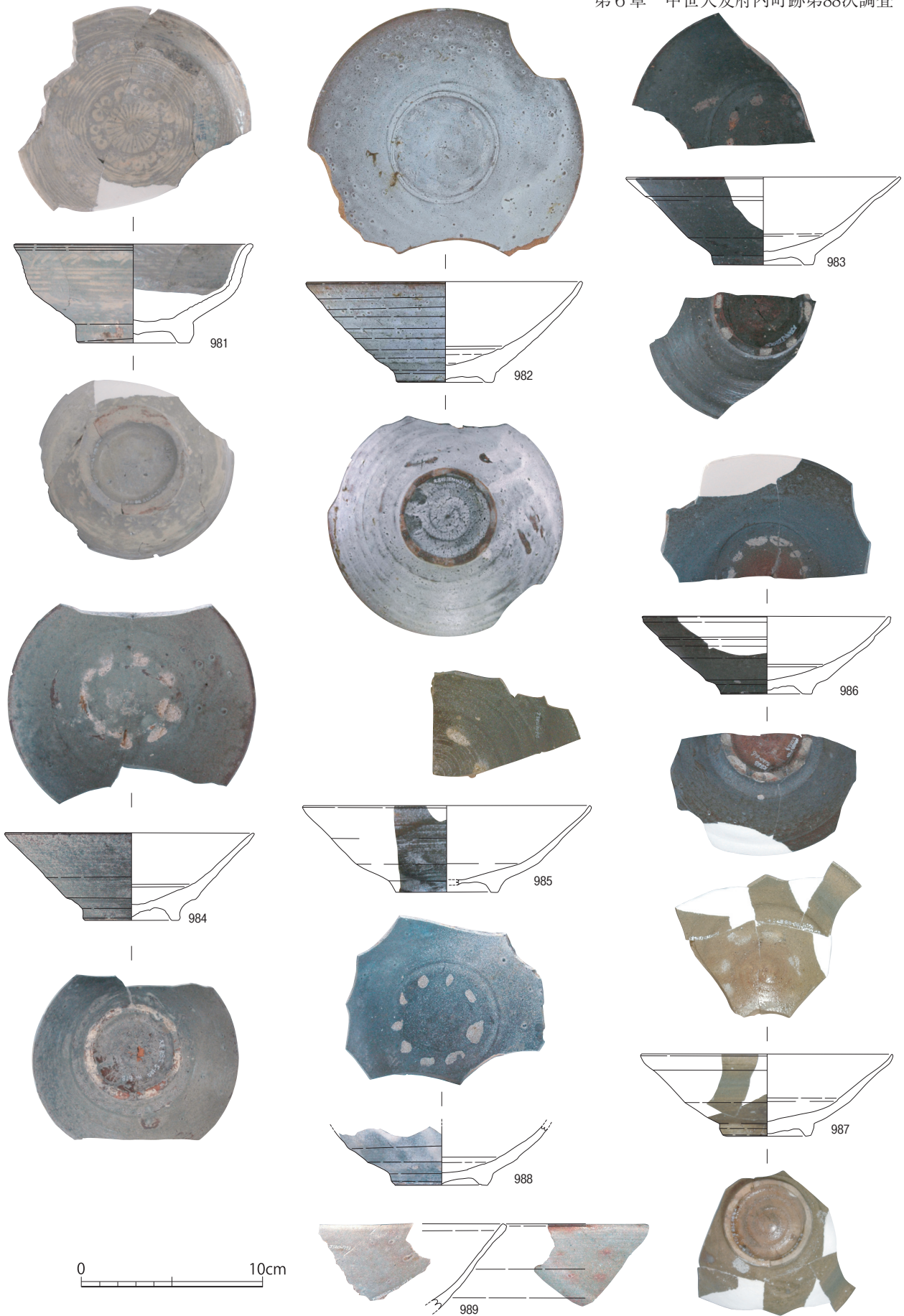
第138図 SD120出土遺物(21) (1/3)



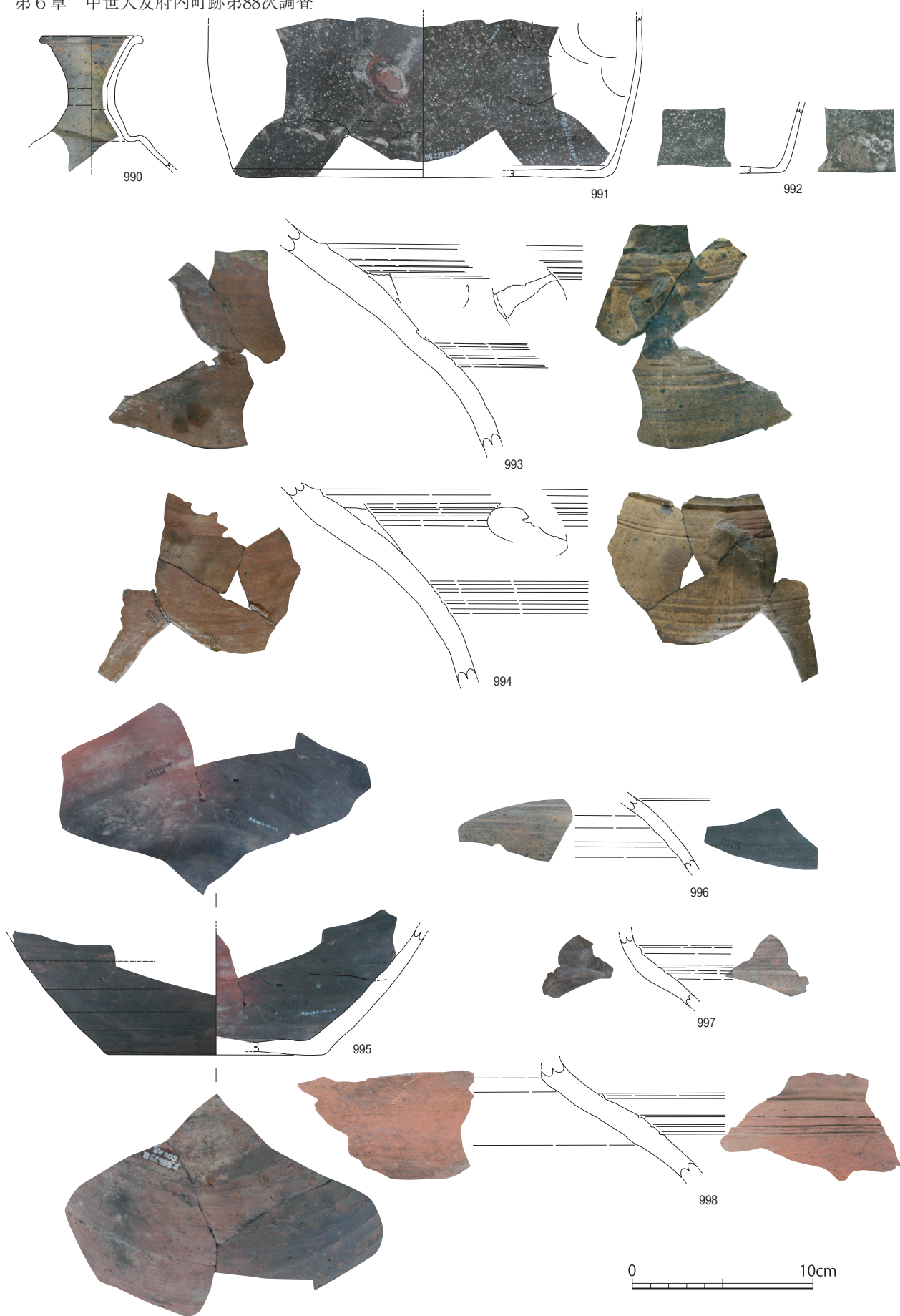
第139図 SD120出土遺物(22) (1/3)



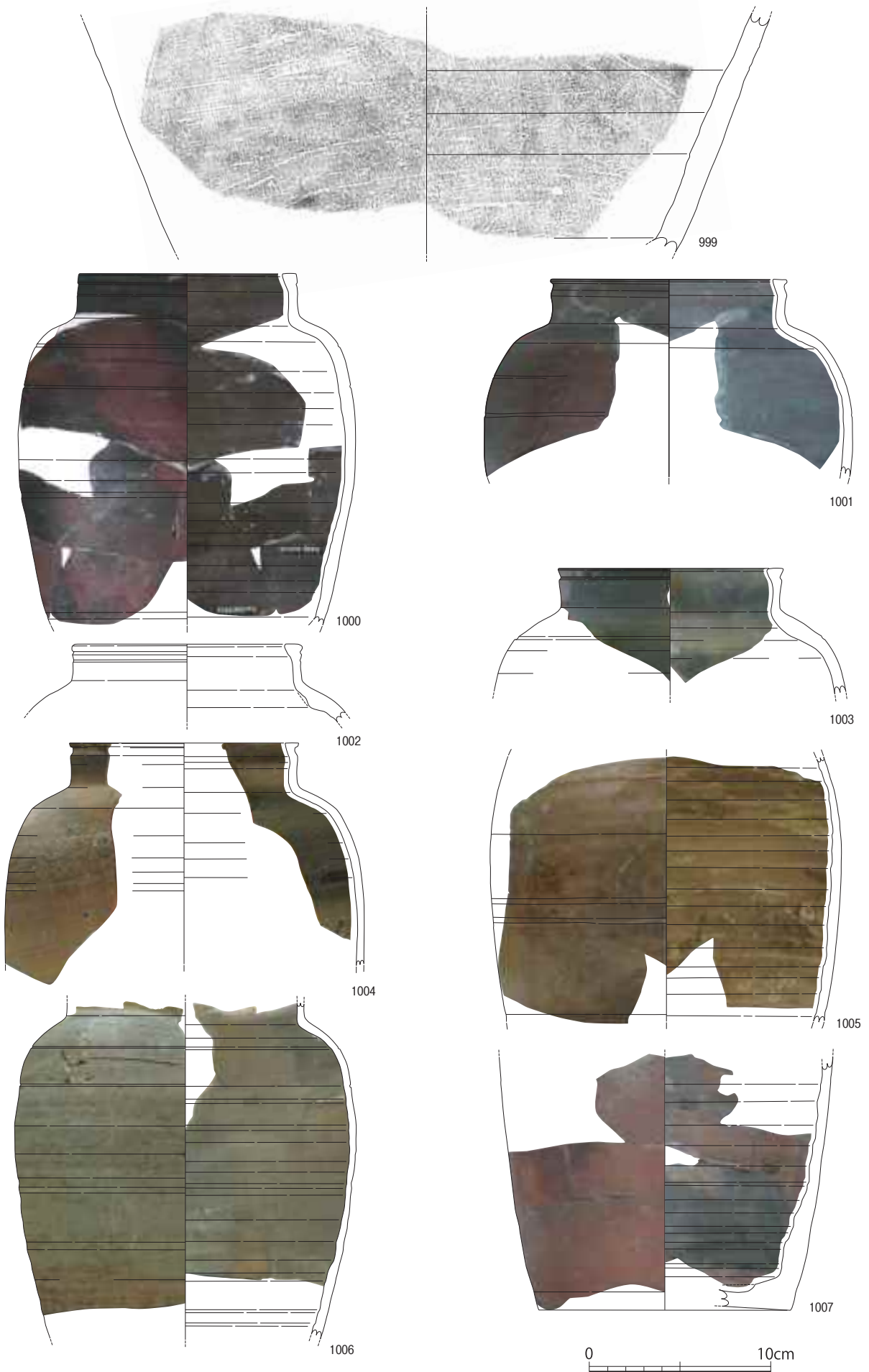
第140図 SD120出土遺物(23) (1/3)



第141図 SD120出土遺物(24) (1/3)

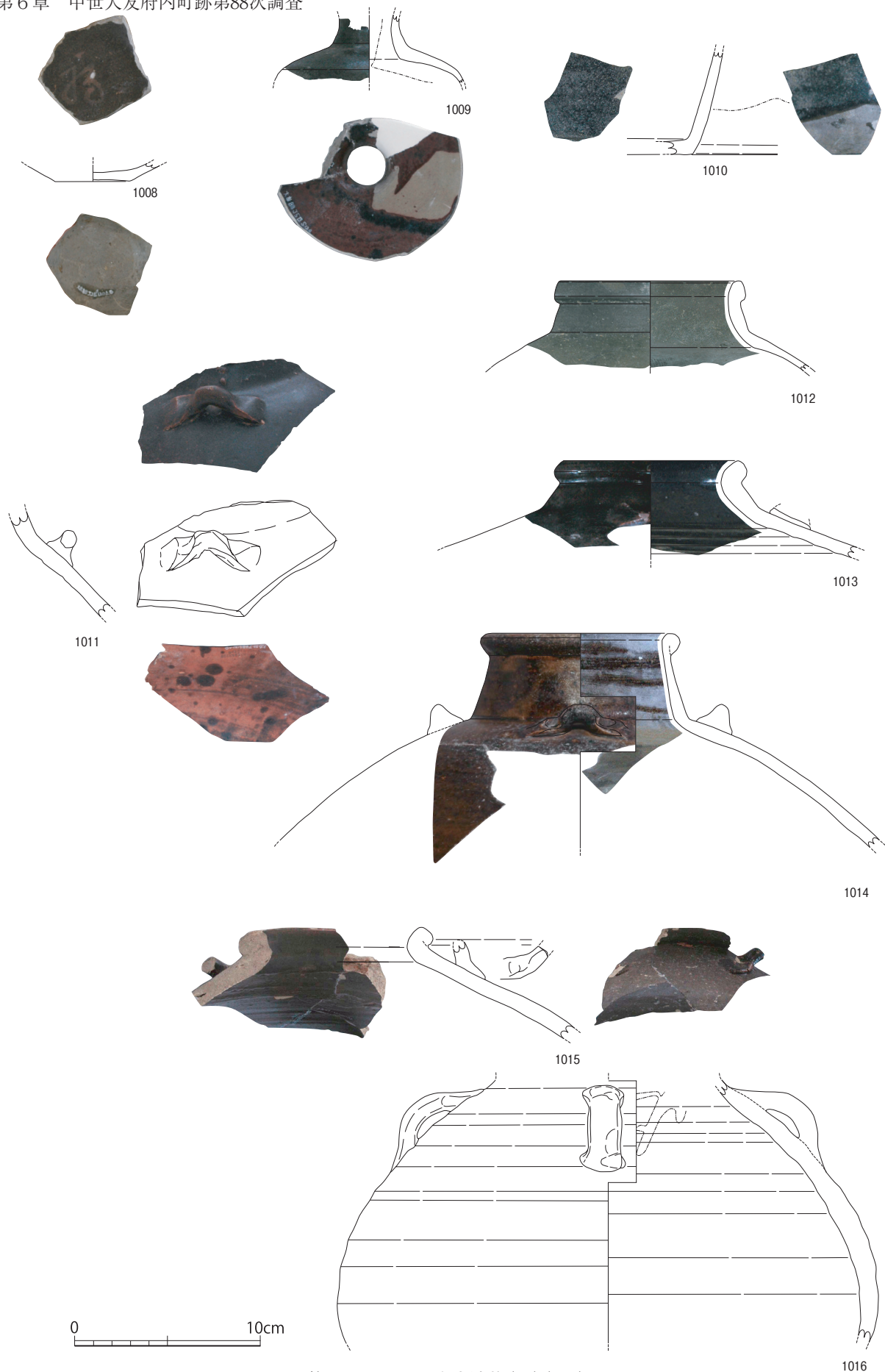


第142図 SD120出土遺物(25) (1/3)



第143図 SD120出土遺物(26) (1/3)

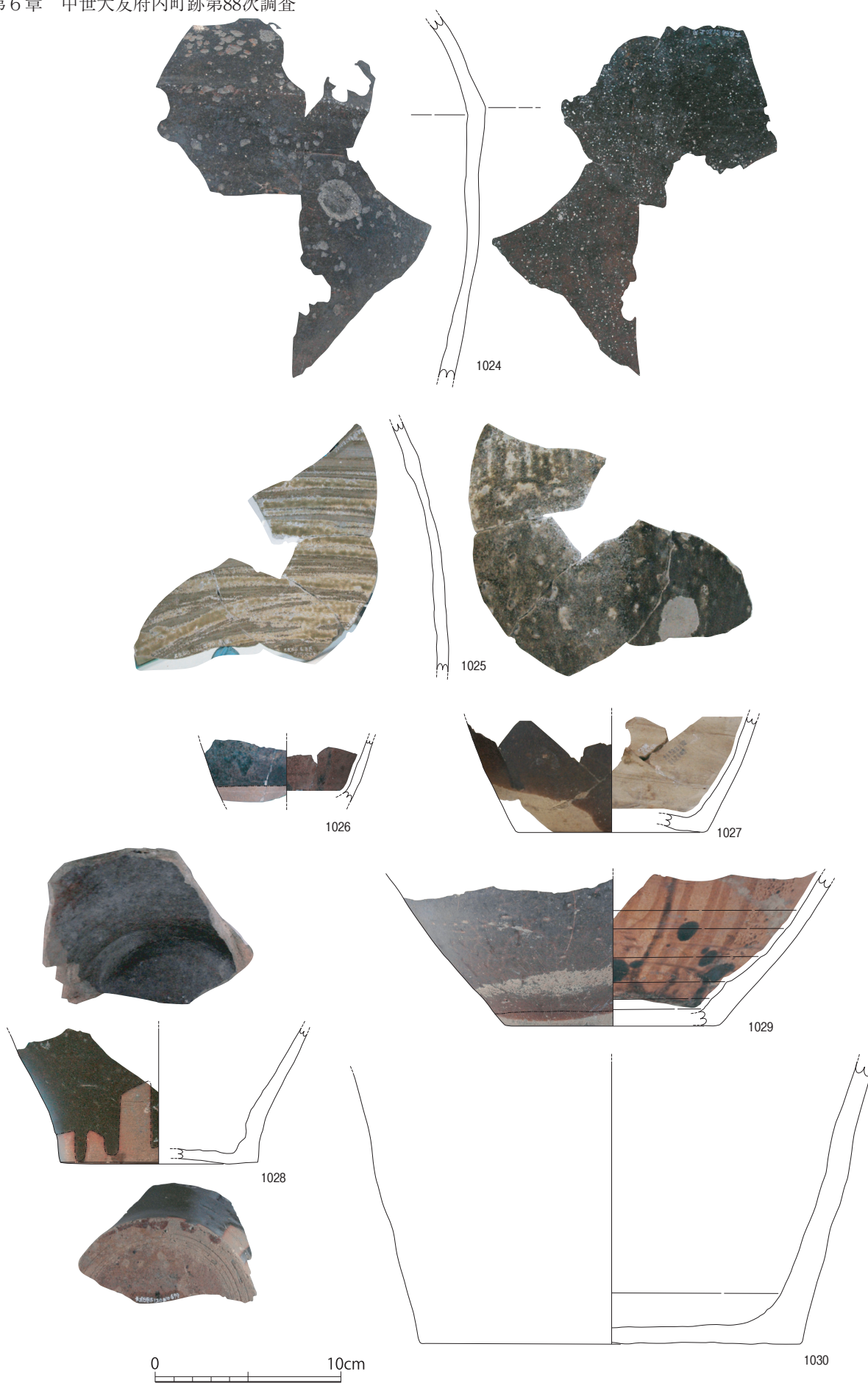
第6章 中世大友府内町跡第88次調査



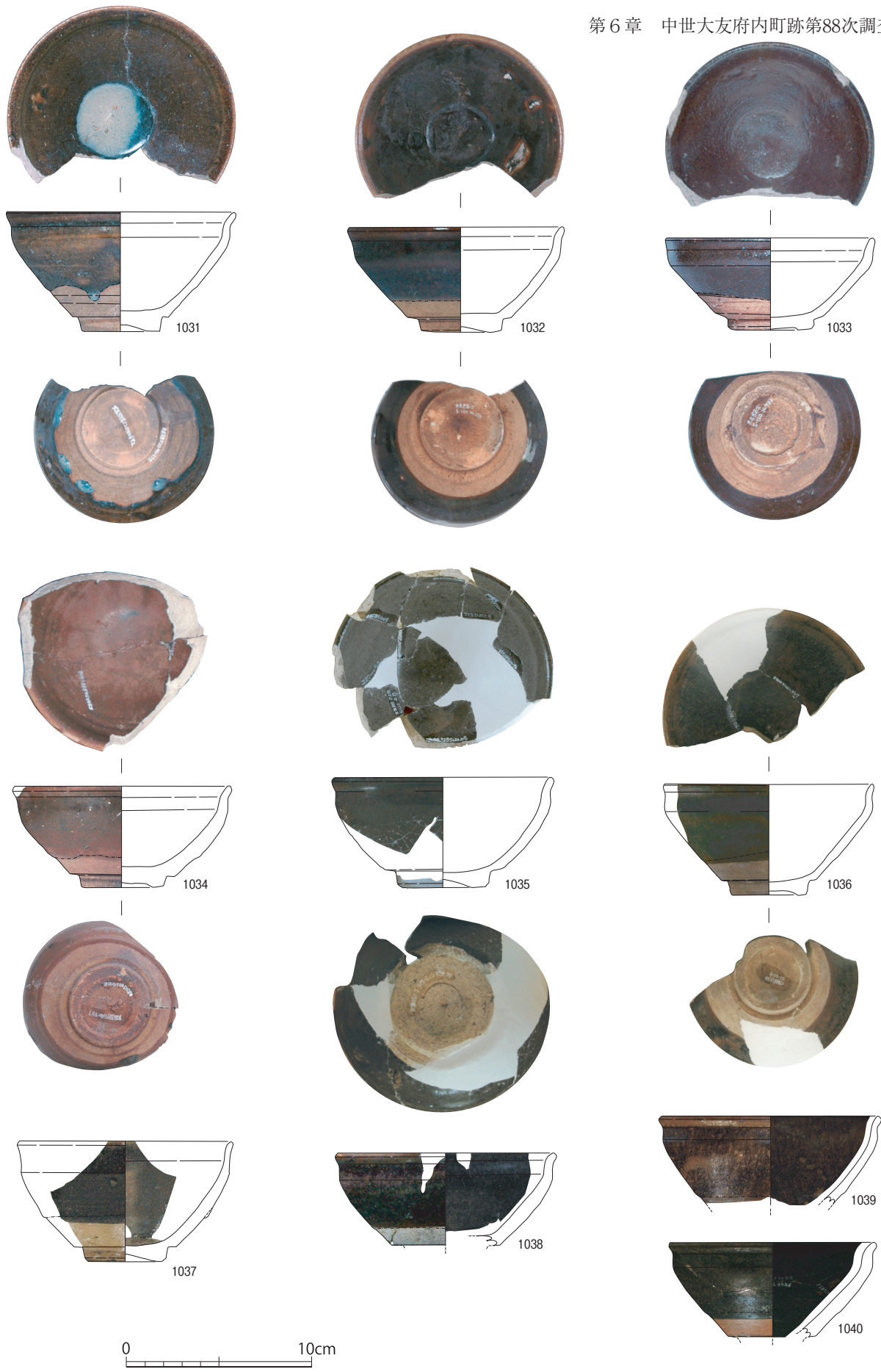
第144図 SD120出土遺物(27) (1/3)



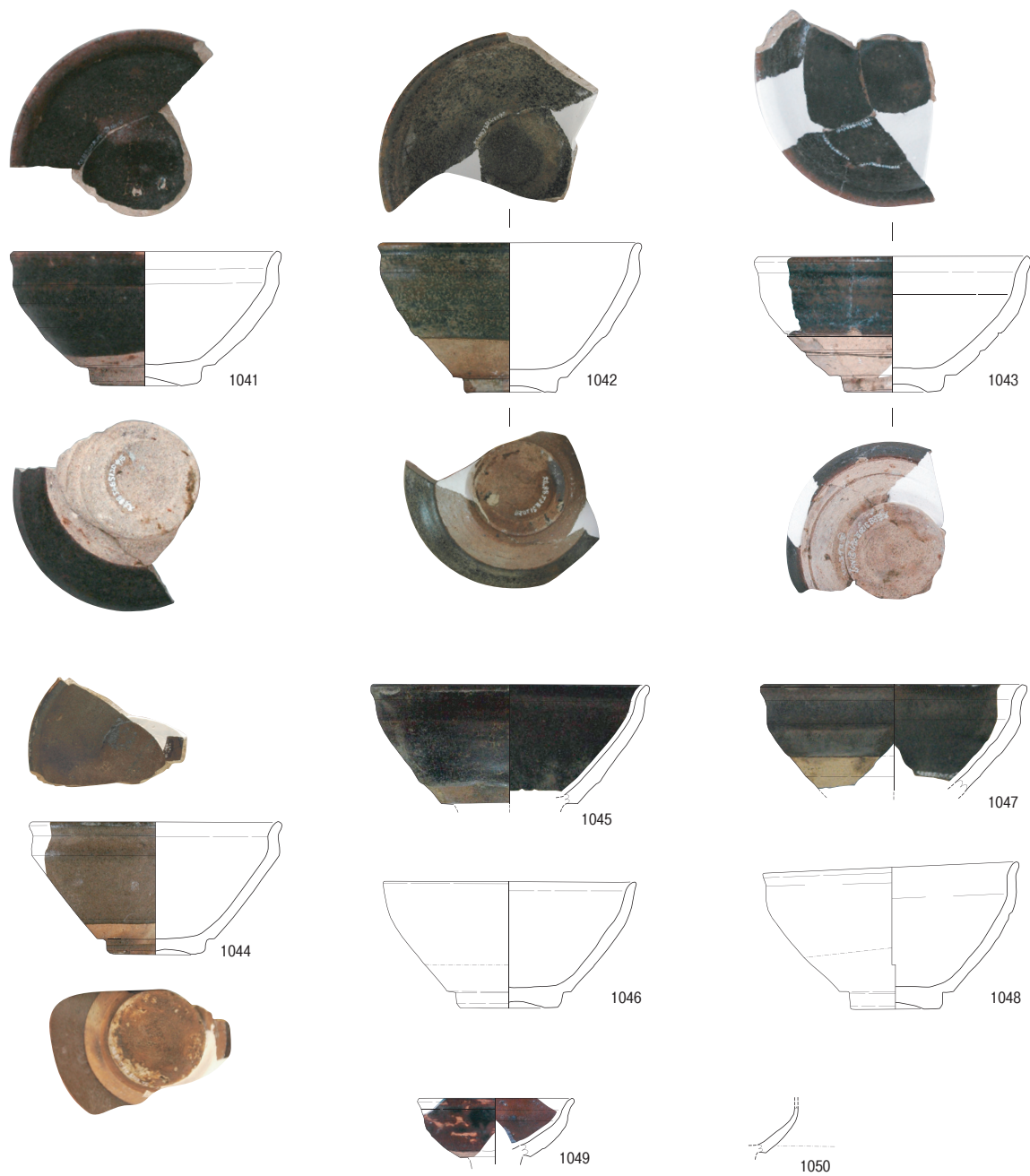
第145図 SD120出土遺物(28) (1/3)



第146図 SD120出土遺物(29) (1/3)

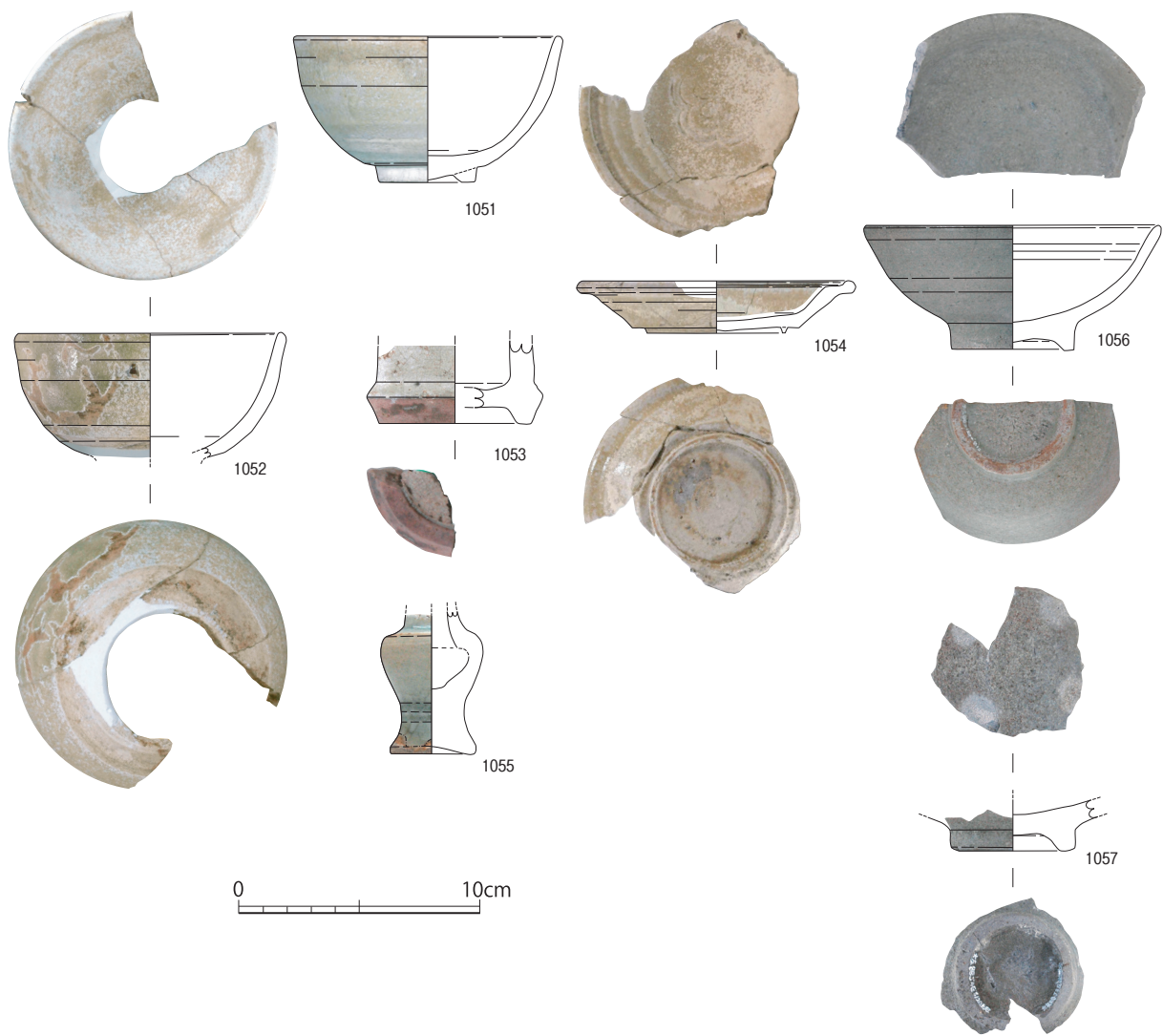


第147図 SD120出土遺物(30) (1/3)

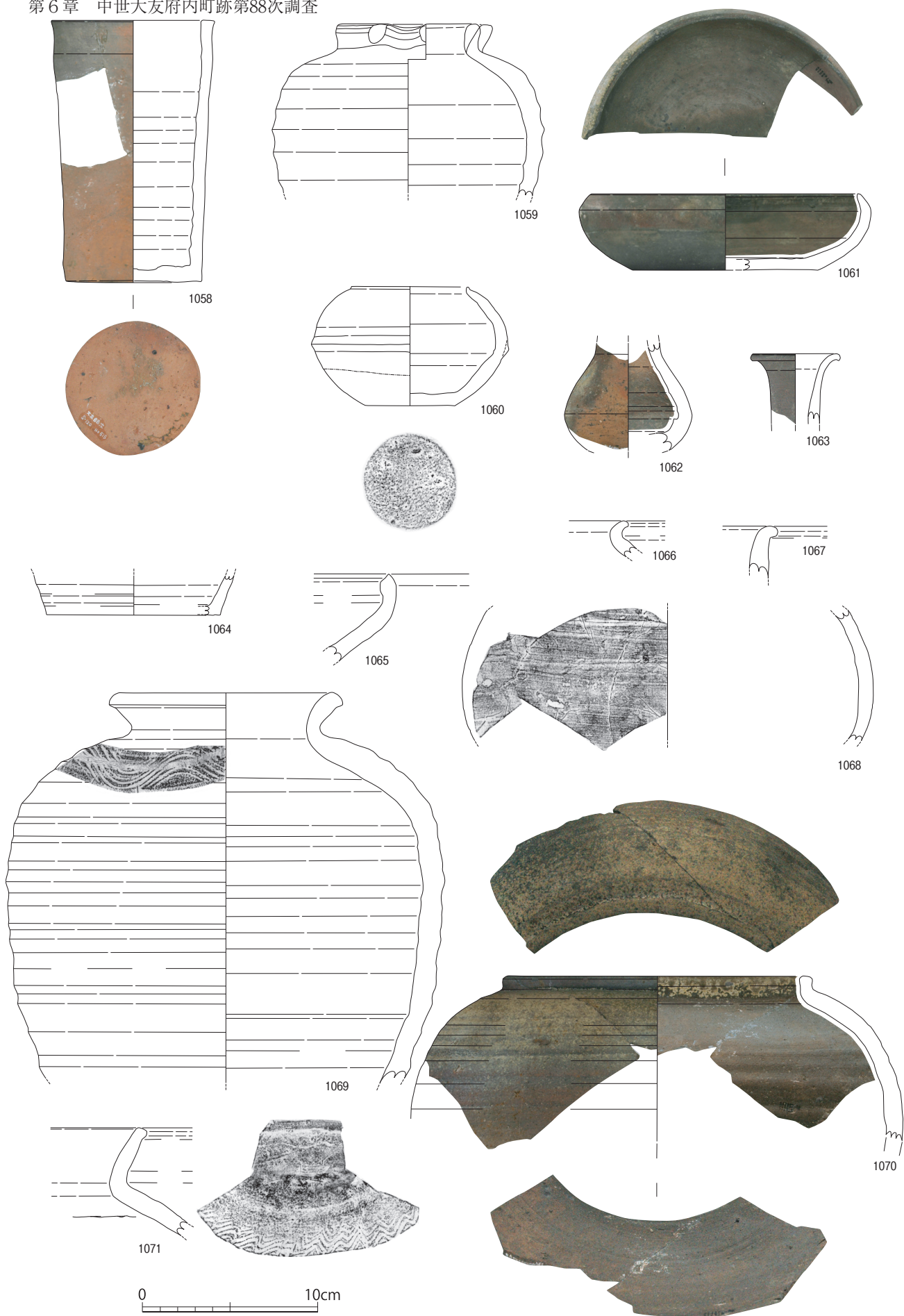


0 10cm

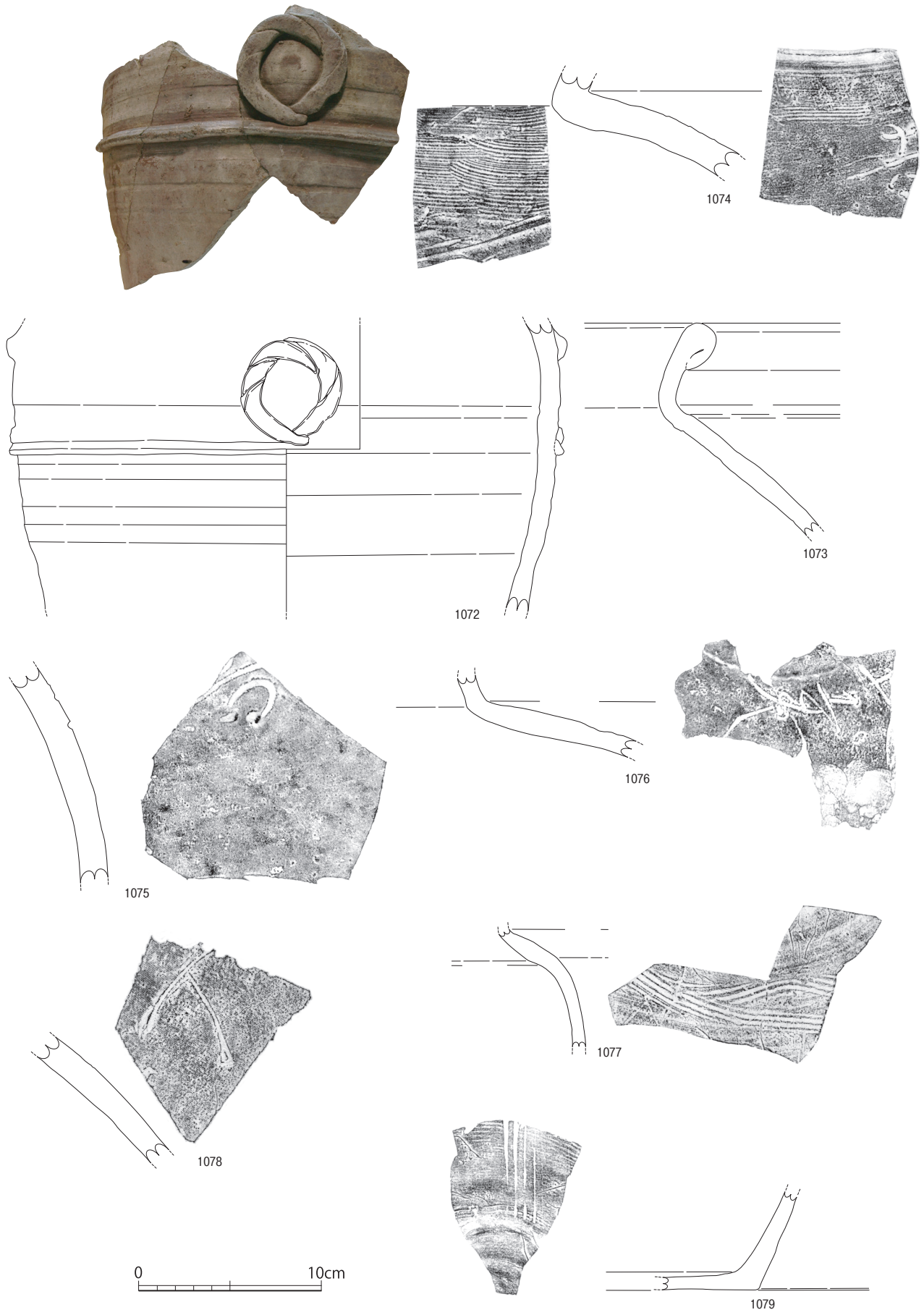
第148図 SD120出土遺物(31) (1/3)



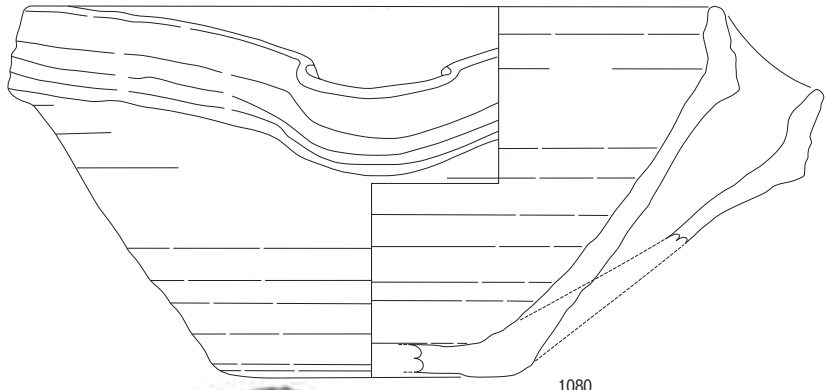
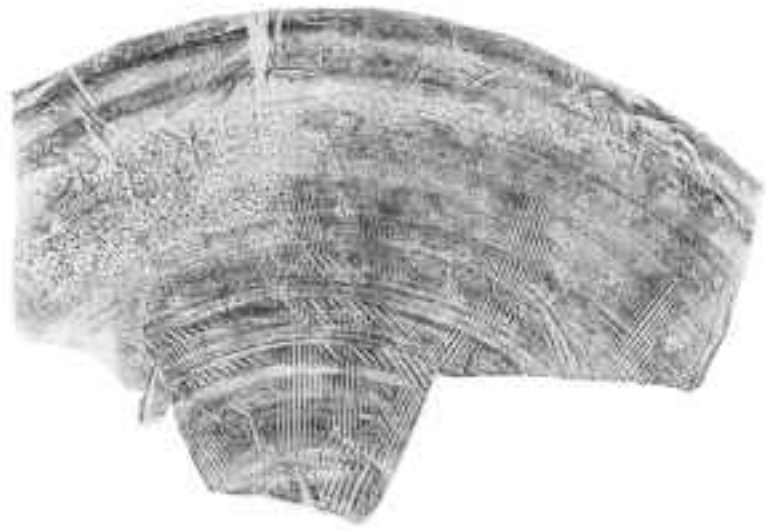
第149図 SD120出土遺物(32) (1/3)



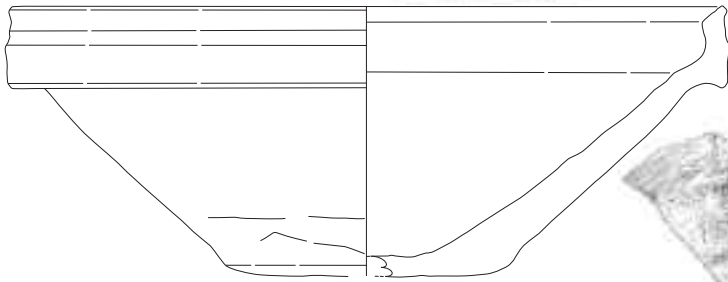
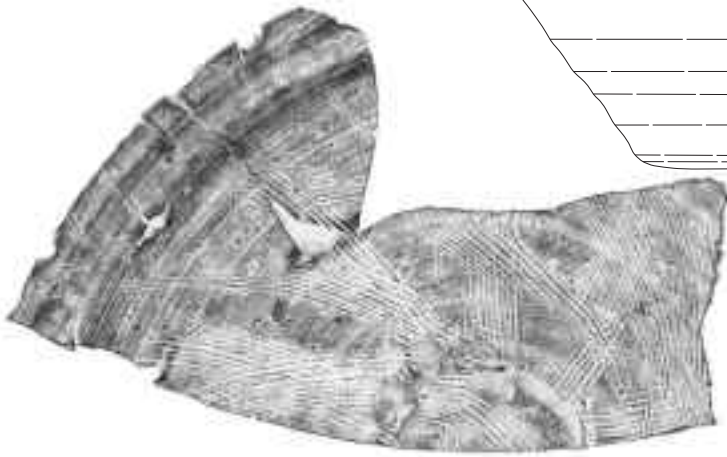
第150図 SD120出土遺物(33) (1/3)



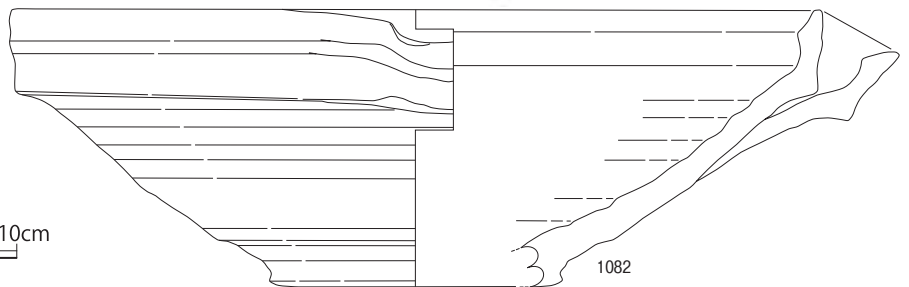
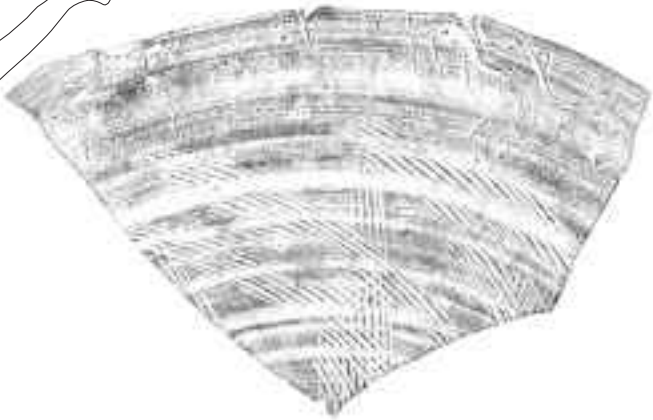
第151図 SD120出土遺物(34) (1/3)



1080



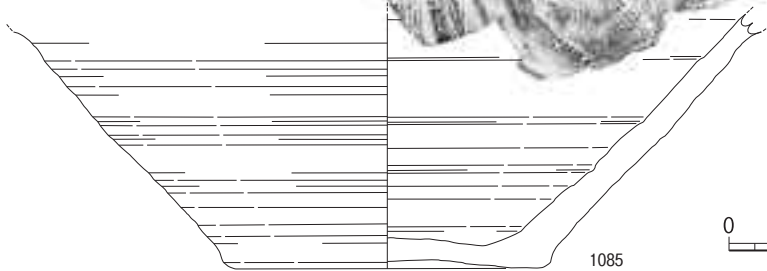
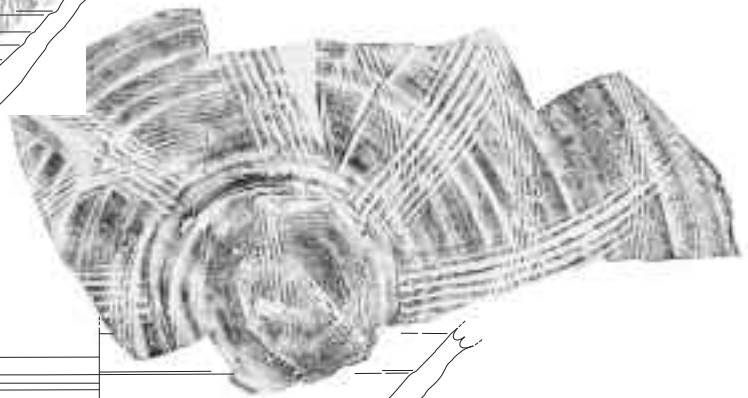
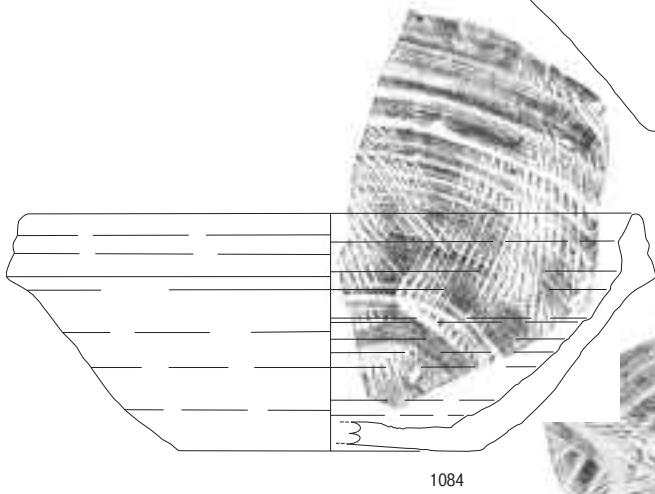
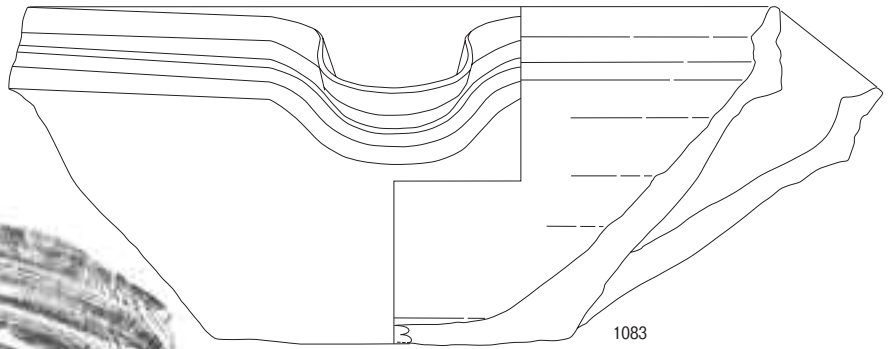
1081



1082

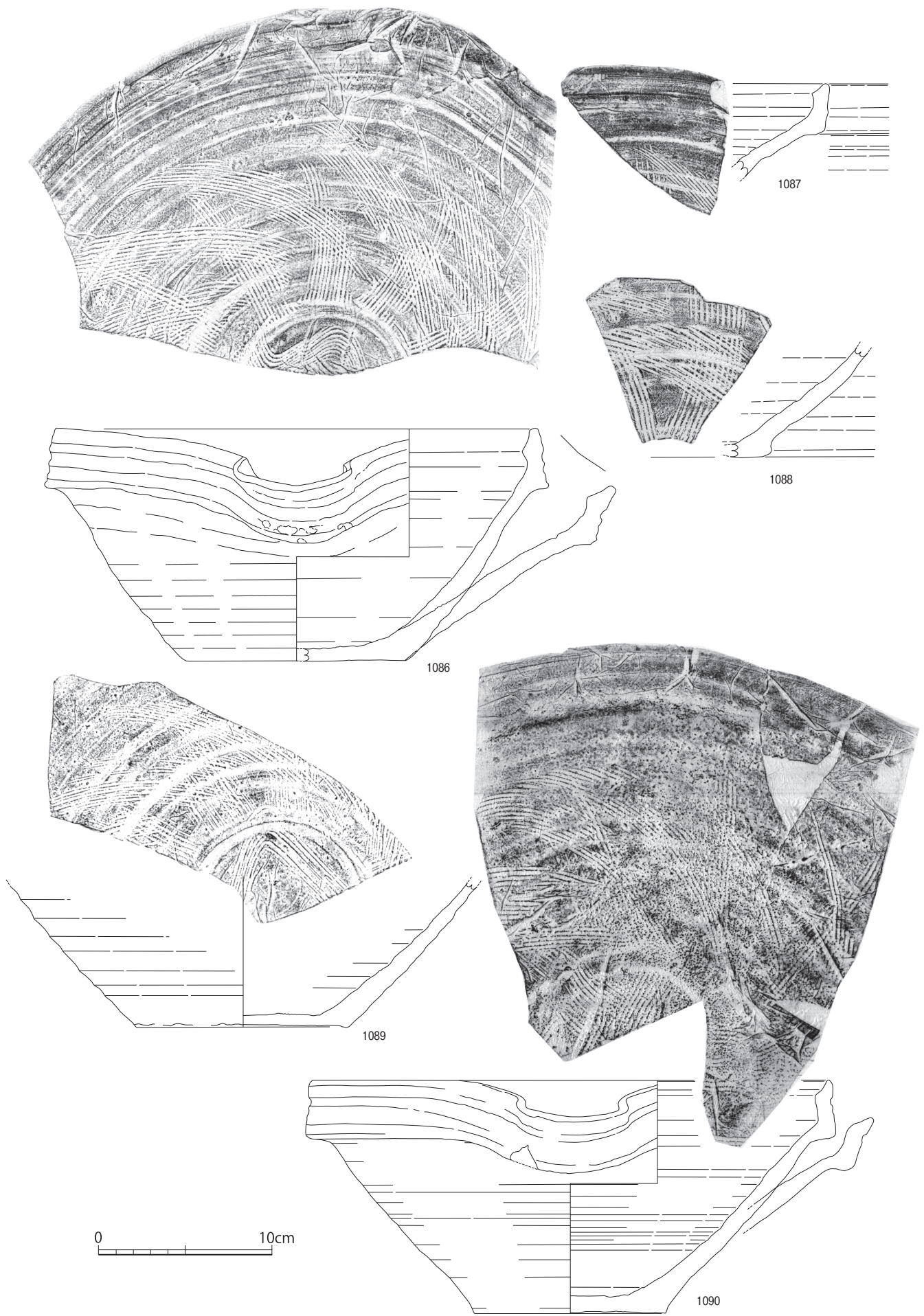


第152図 SD120出土遺物(35)(1/3)

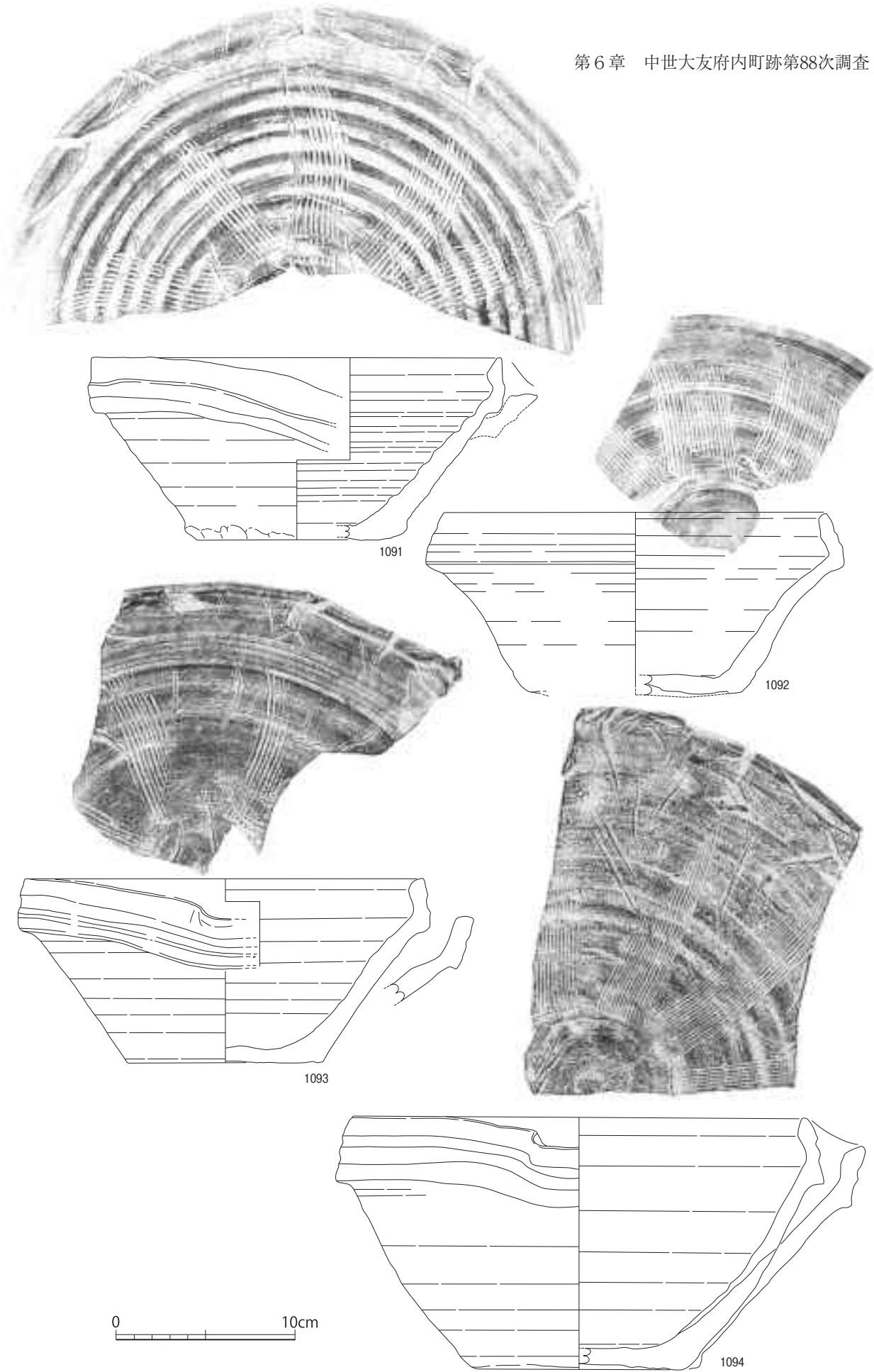


0 10cm

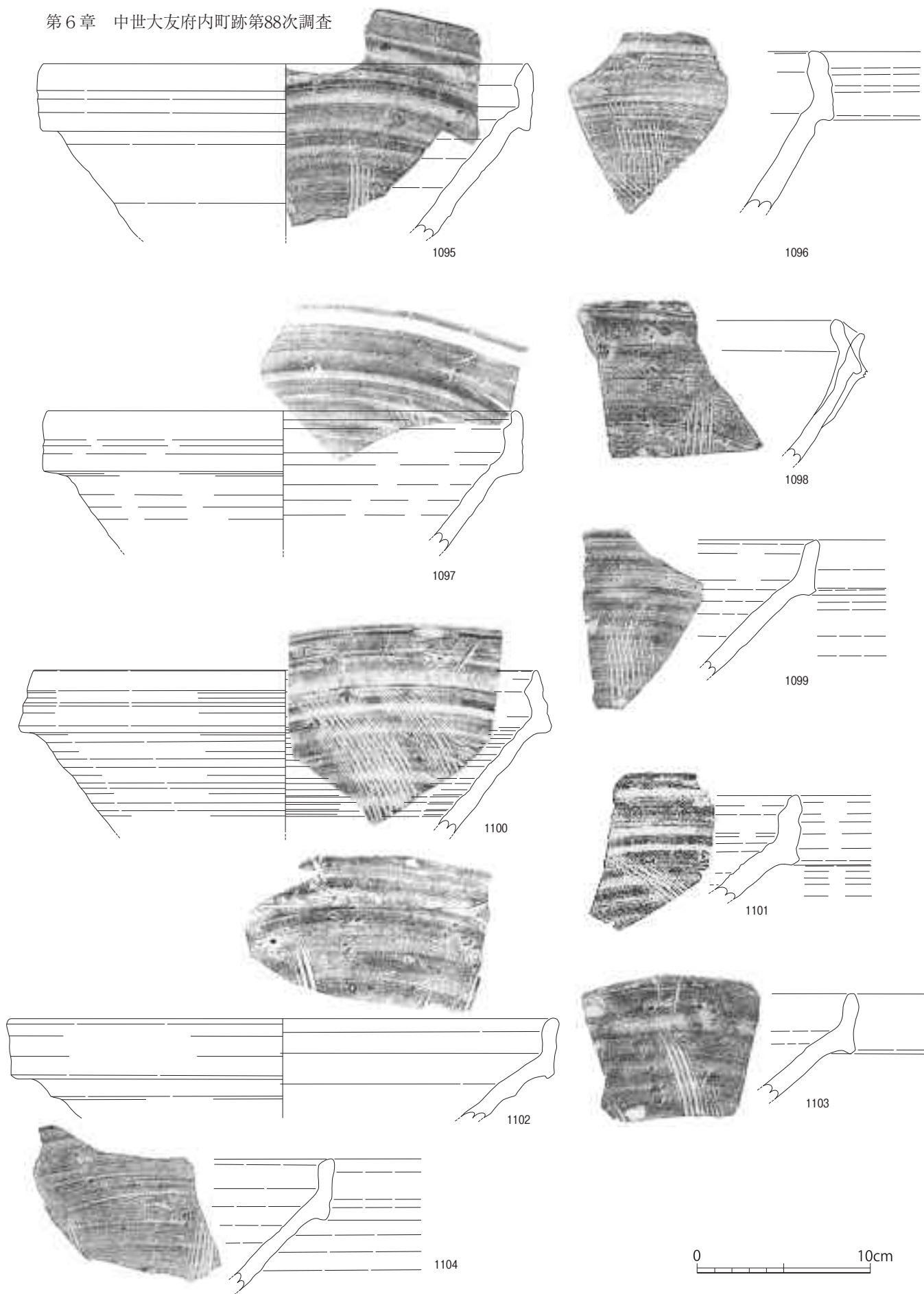
第153図 SD120出土遺物(36) (1/3)



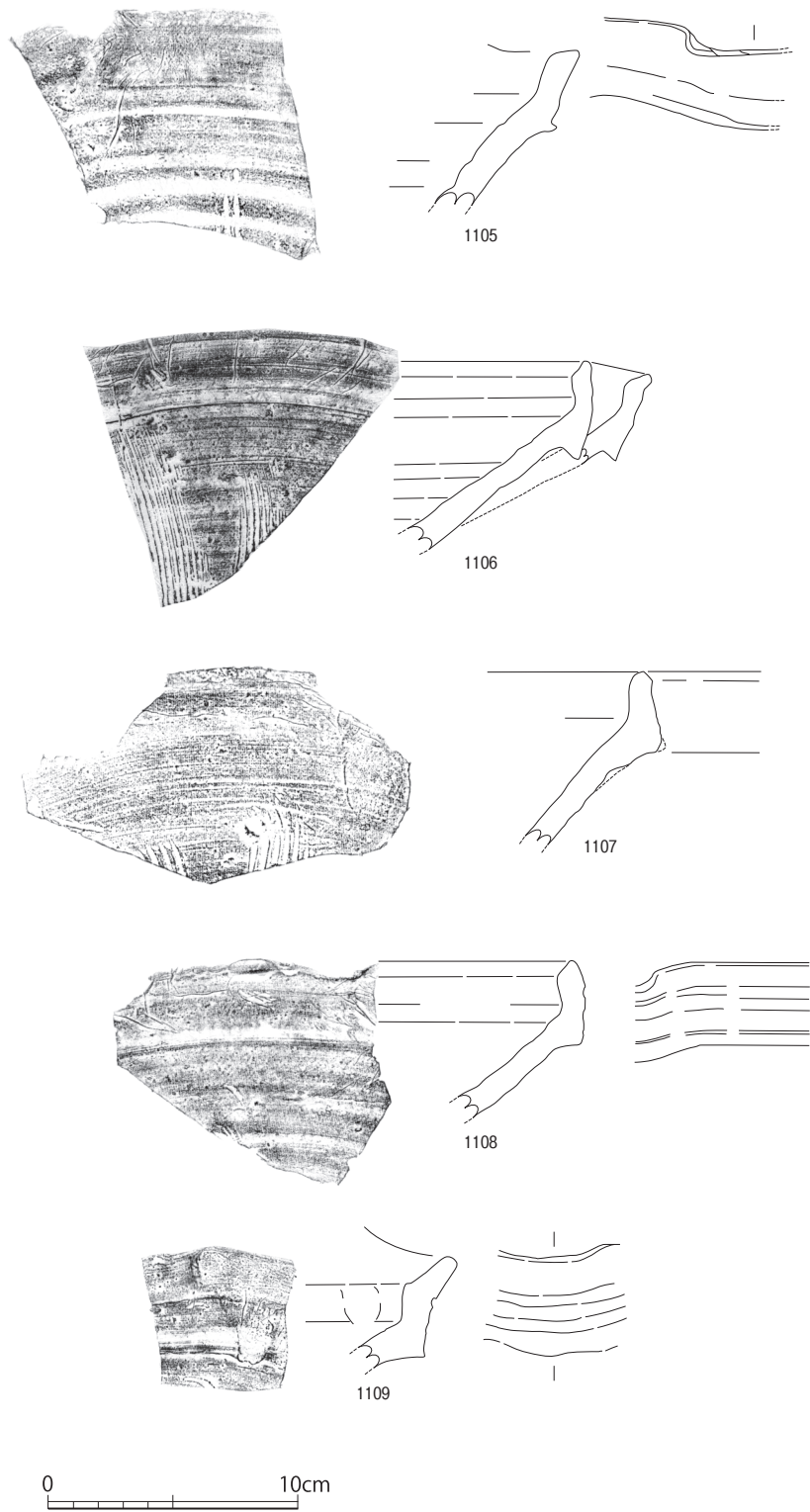
第154図 SD120出土遺物(37) (1/3)



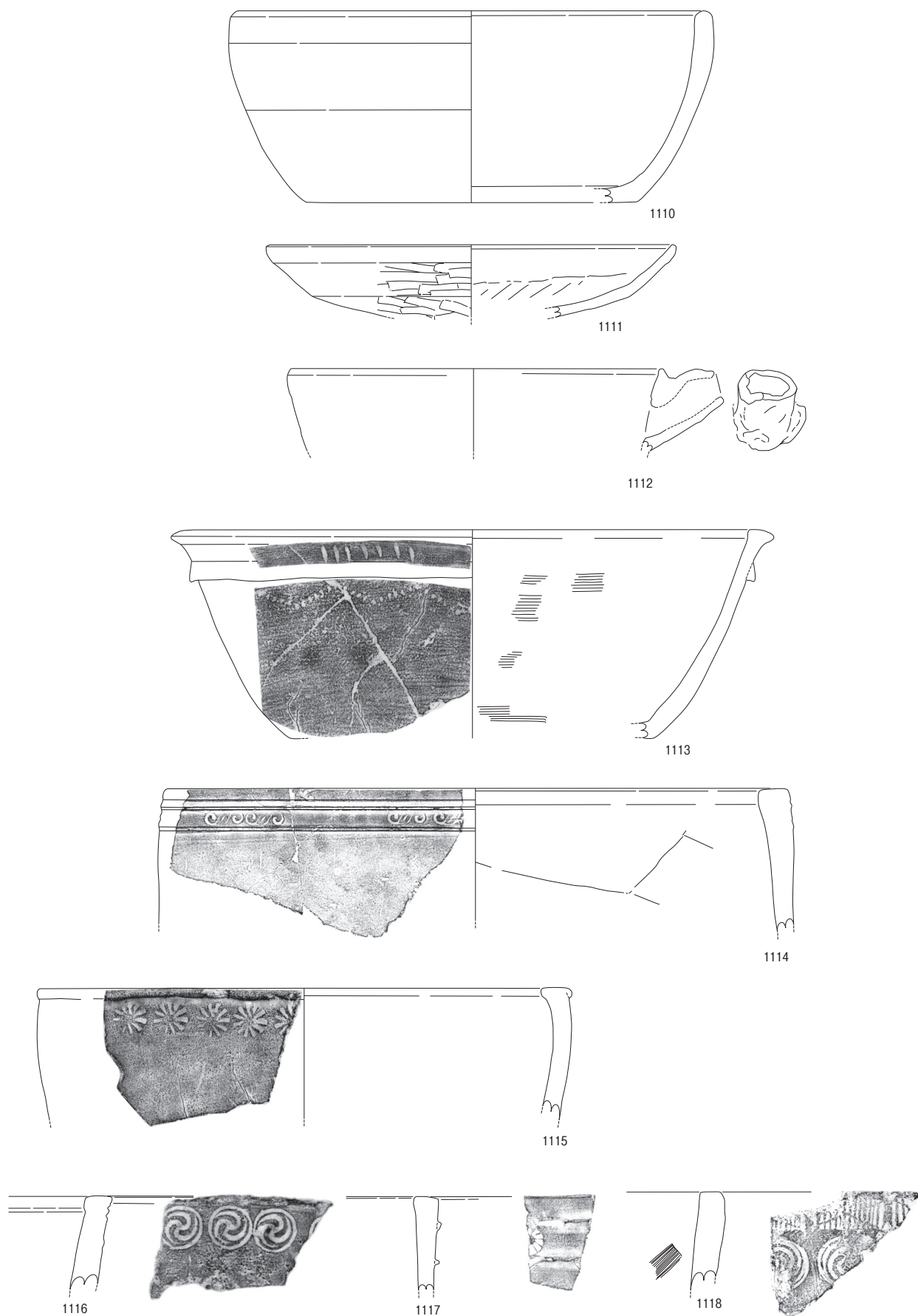
第155図 SD120出土遺物(38) (1/3)



第156図 SD120出土遺物(39) (1/3)

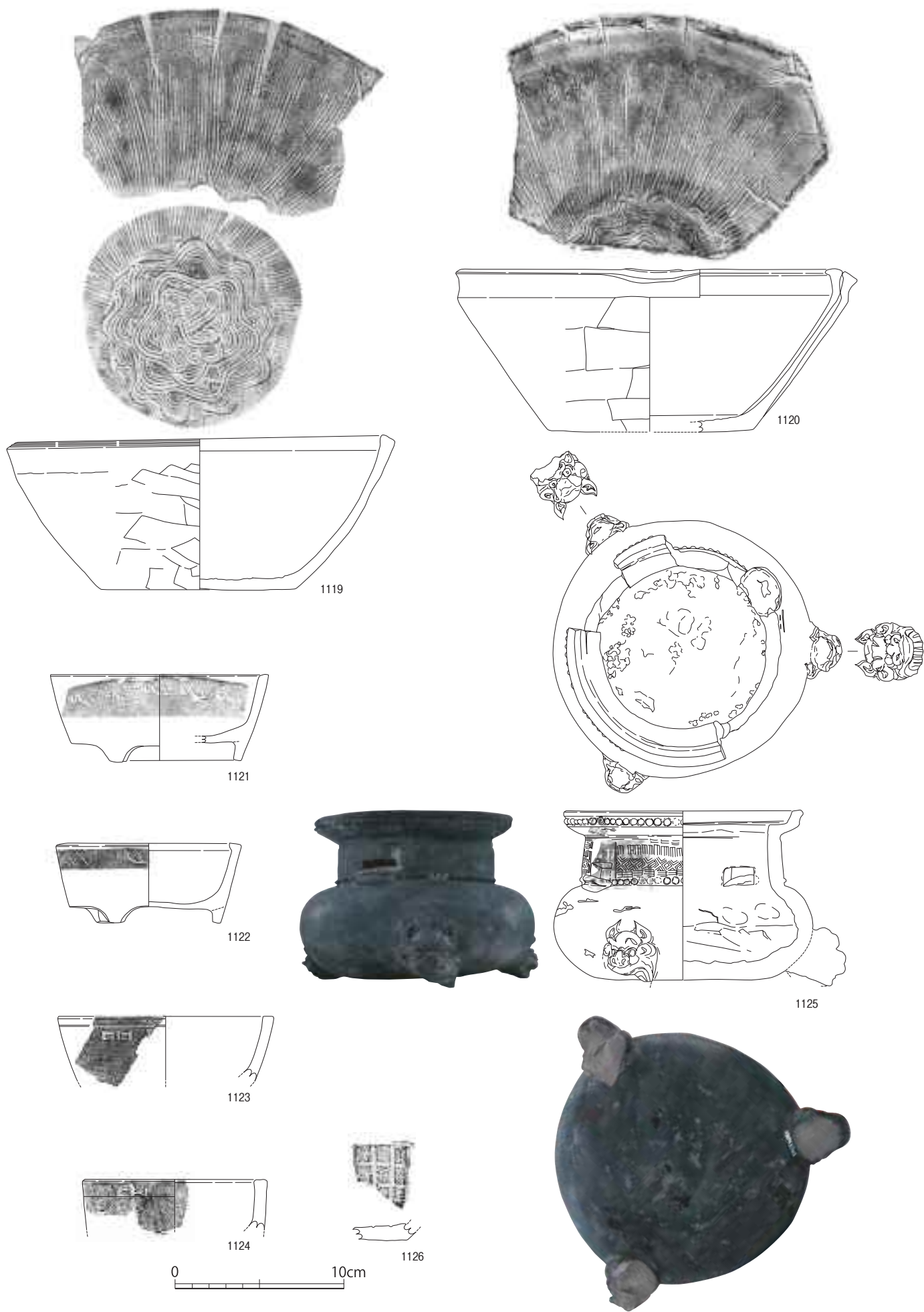


第157図 SD120出土遺物(40) (1/3)

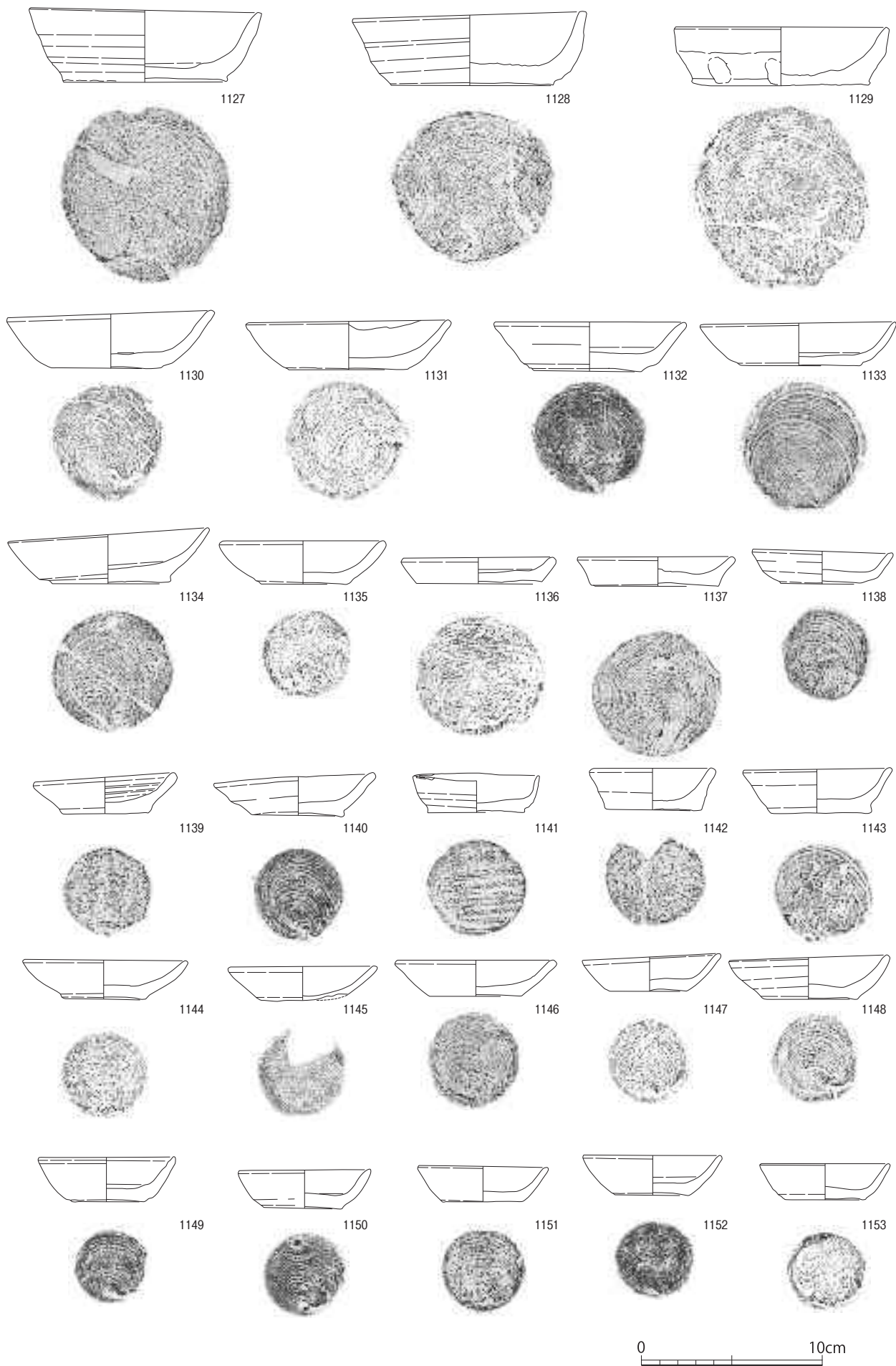


第158図 SD120出土遺物(41) (1/3)

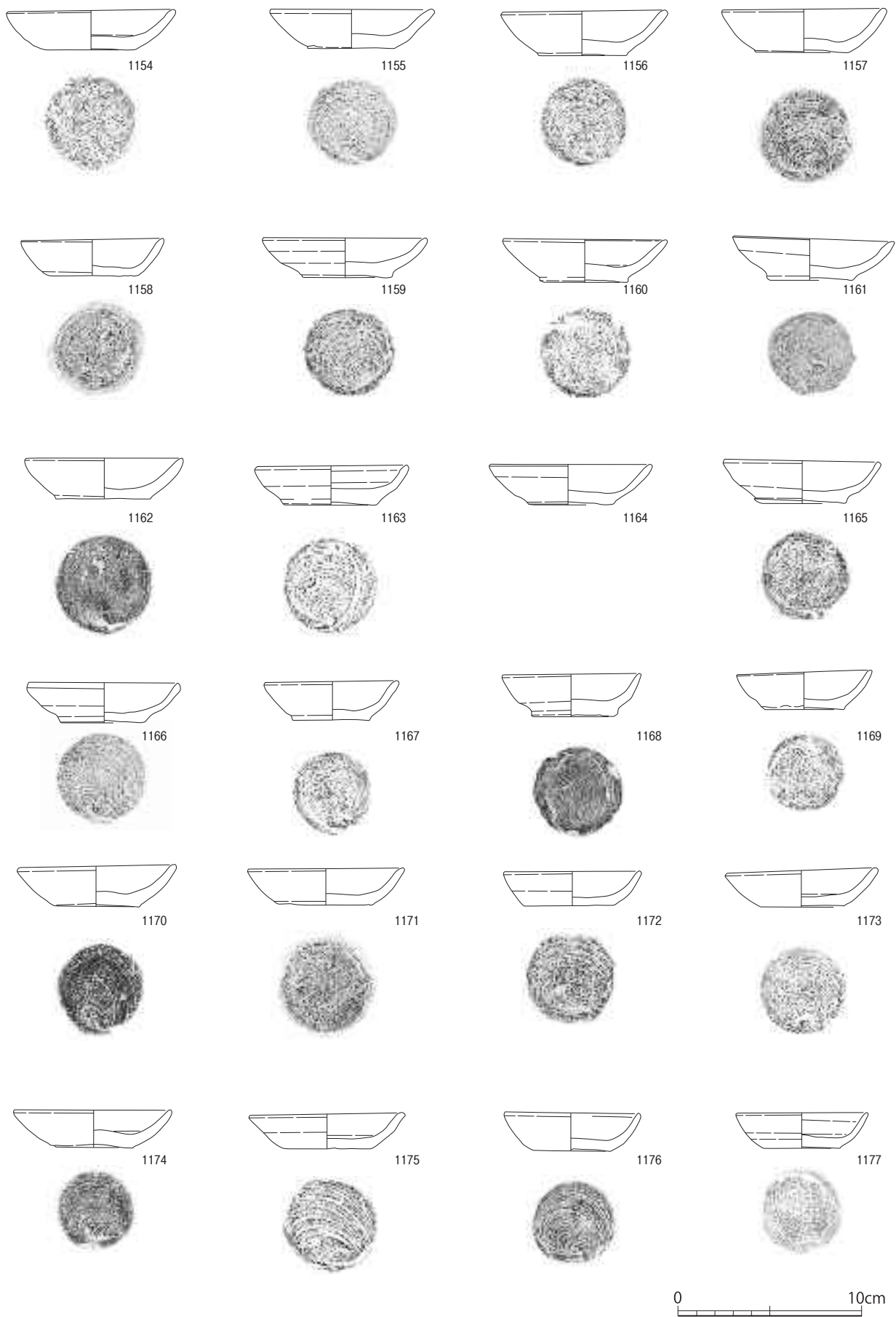
0 10cm



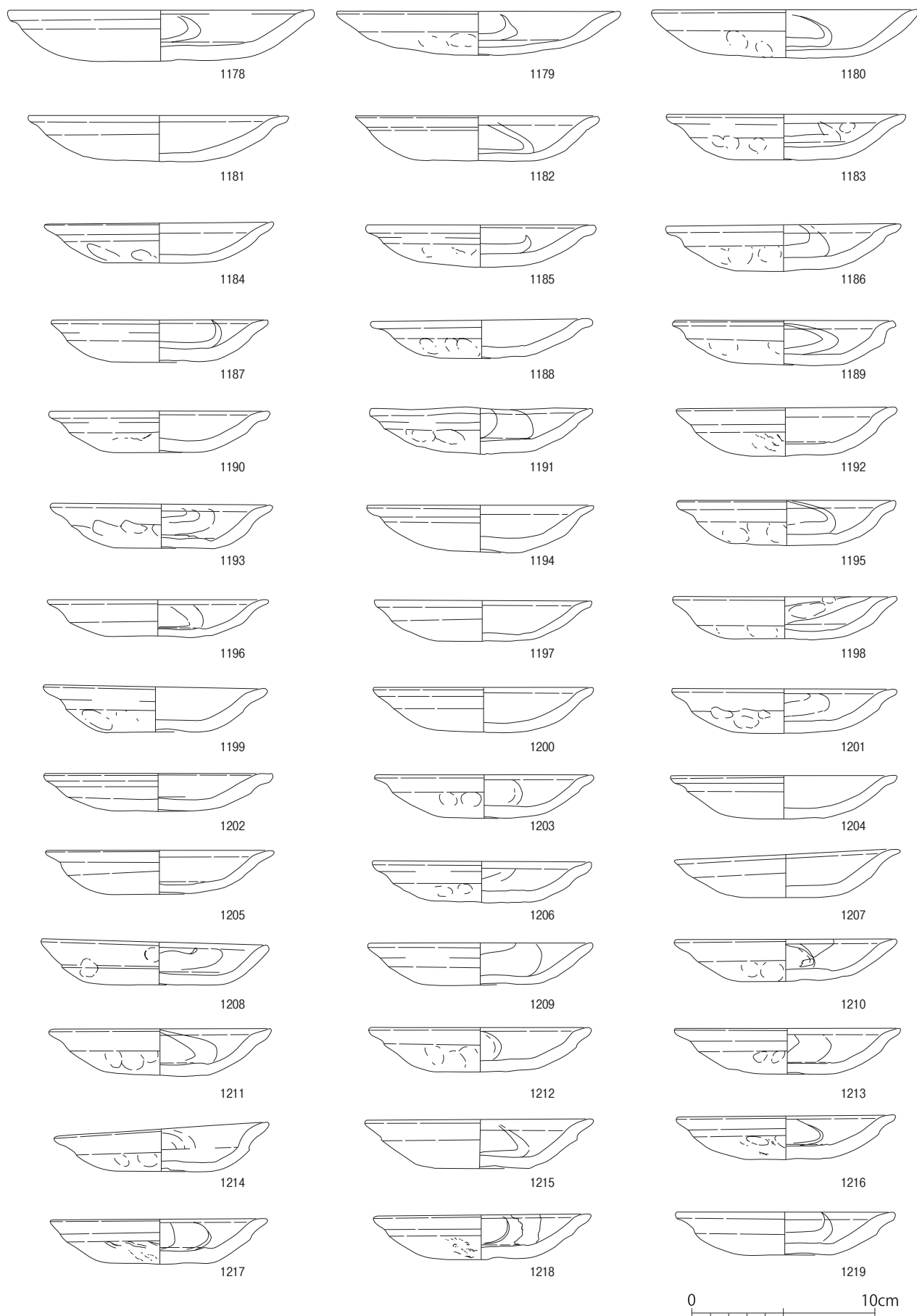
第159図 SD120出土遺物(42) (1/3)



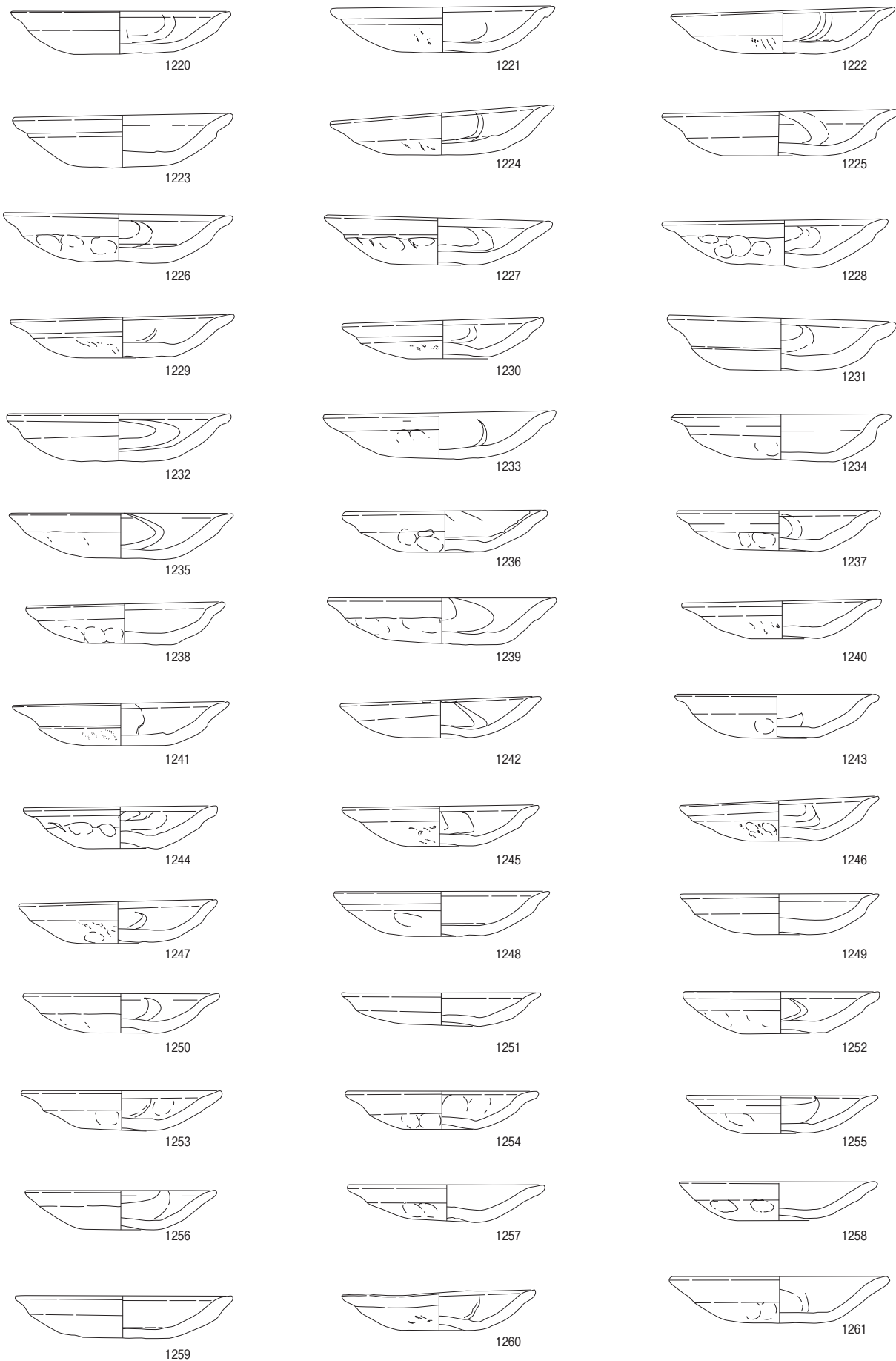
第160図 SD120出土遺物(43) (1/3)



第161図 SD120出土遺物(44) (1/3)

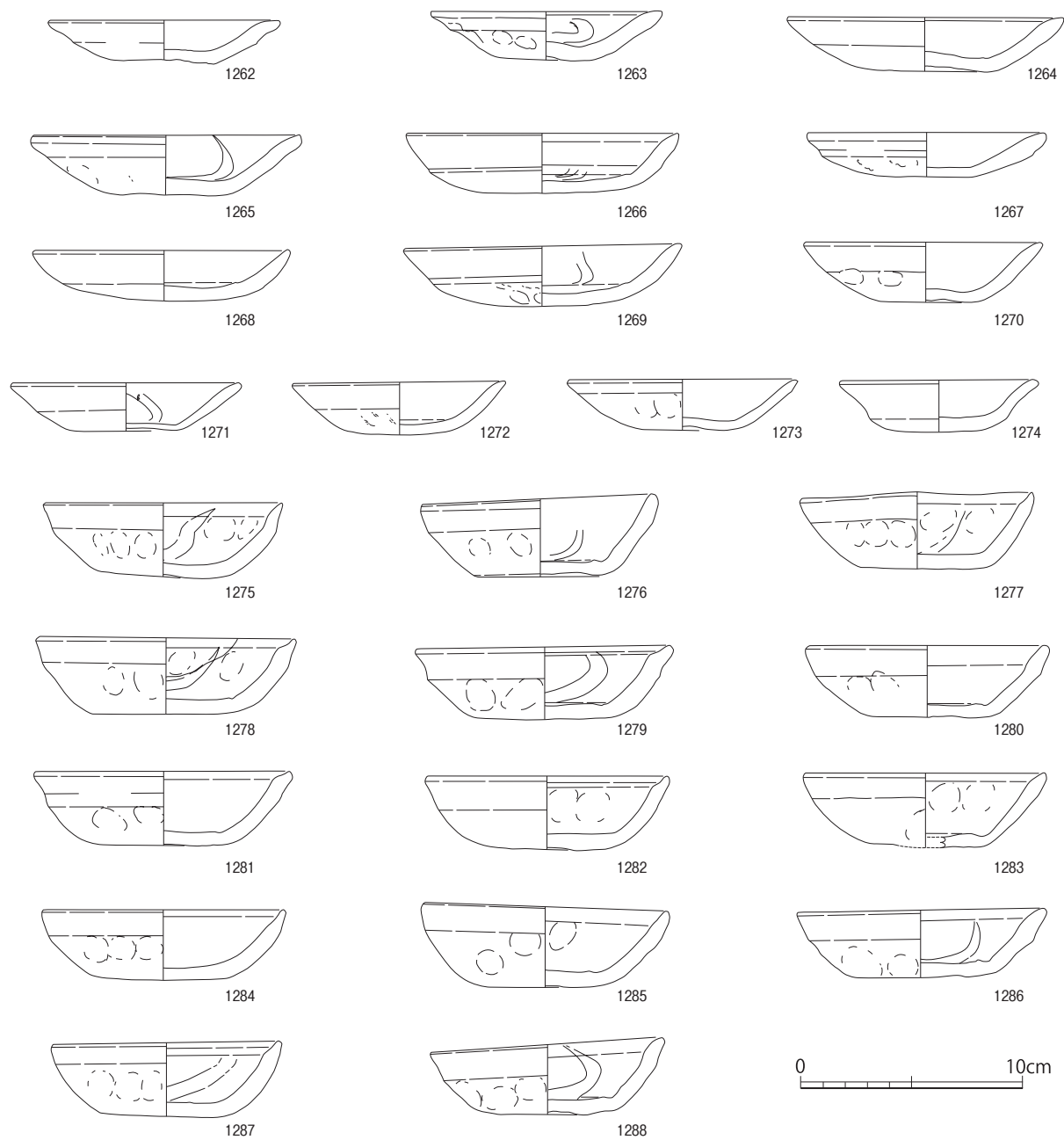


第162図 SD120出土遺物(45) (1/3)

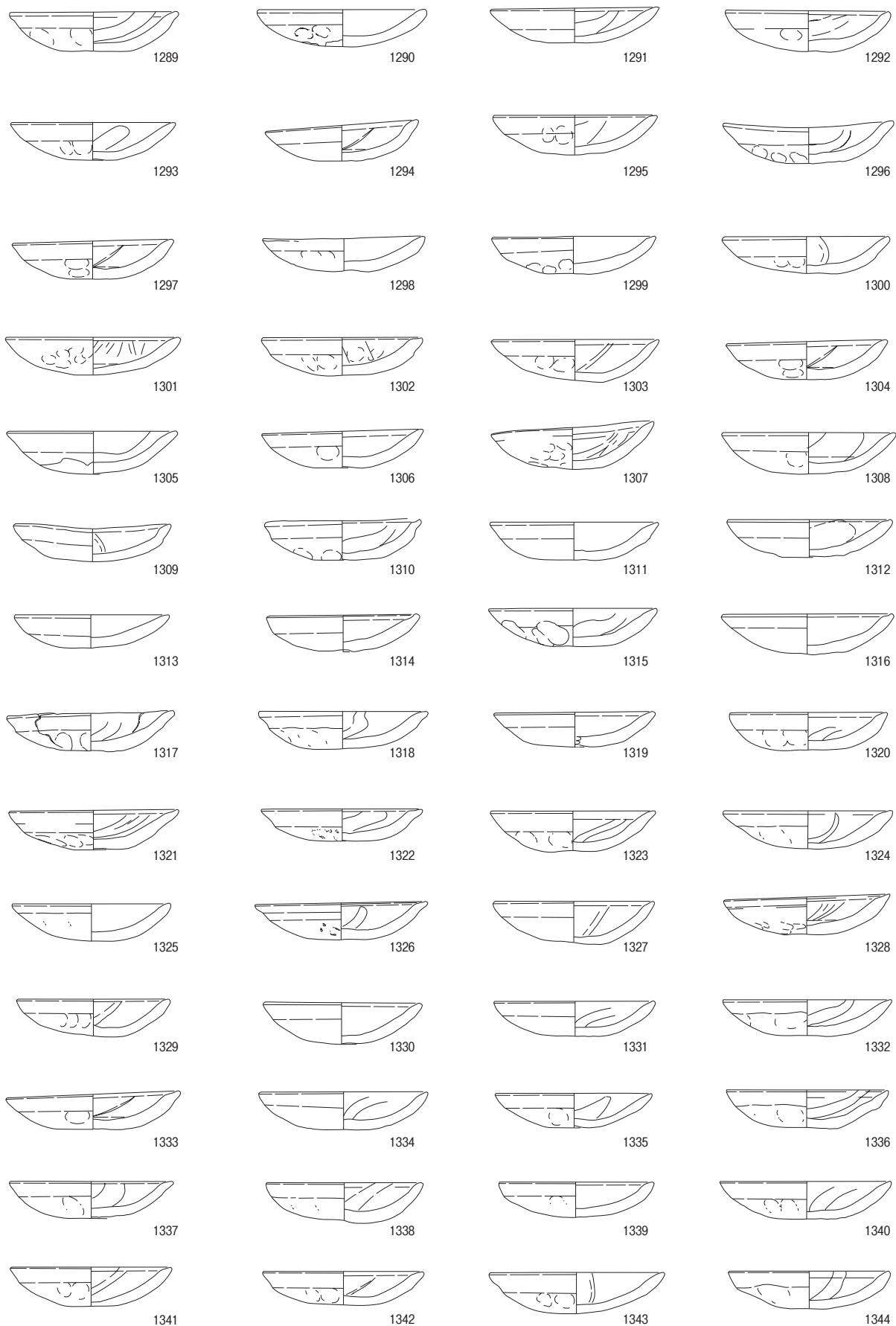


第163図 SD120出土遺物(46) (1/3)

0 10cm



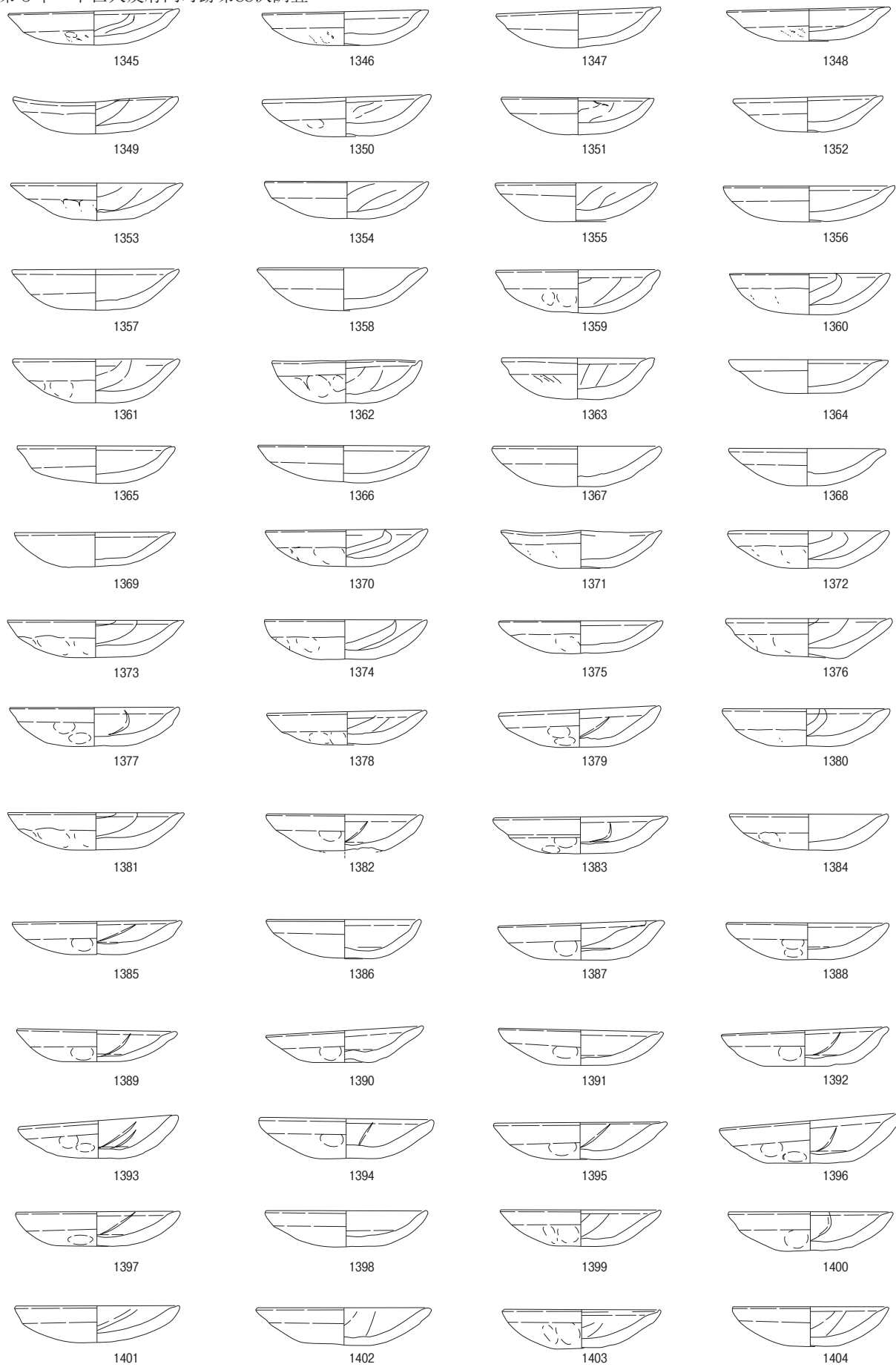
第164図 SD120出土遺物(47) (1/3)



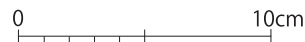
第165図 SD120出土遺物(48) (1/3)

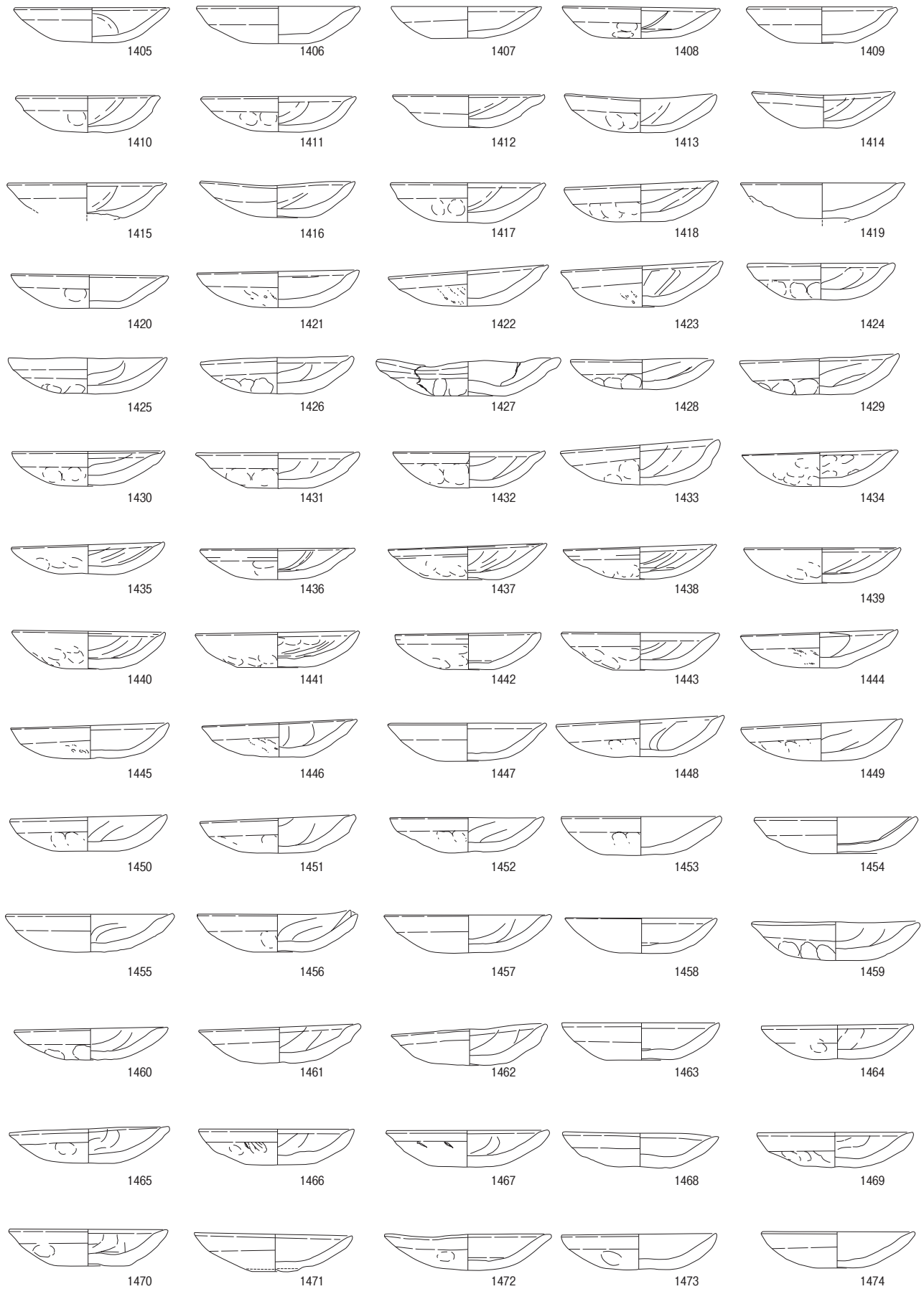
0 10cm

第6章 中世大友府内町跡第88次調査



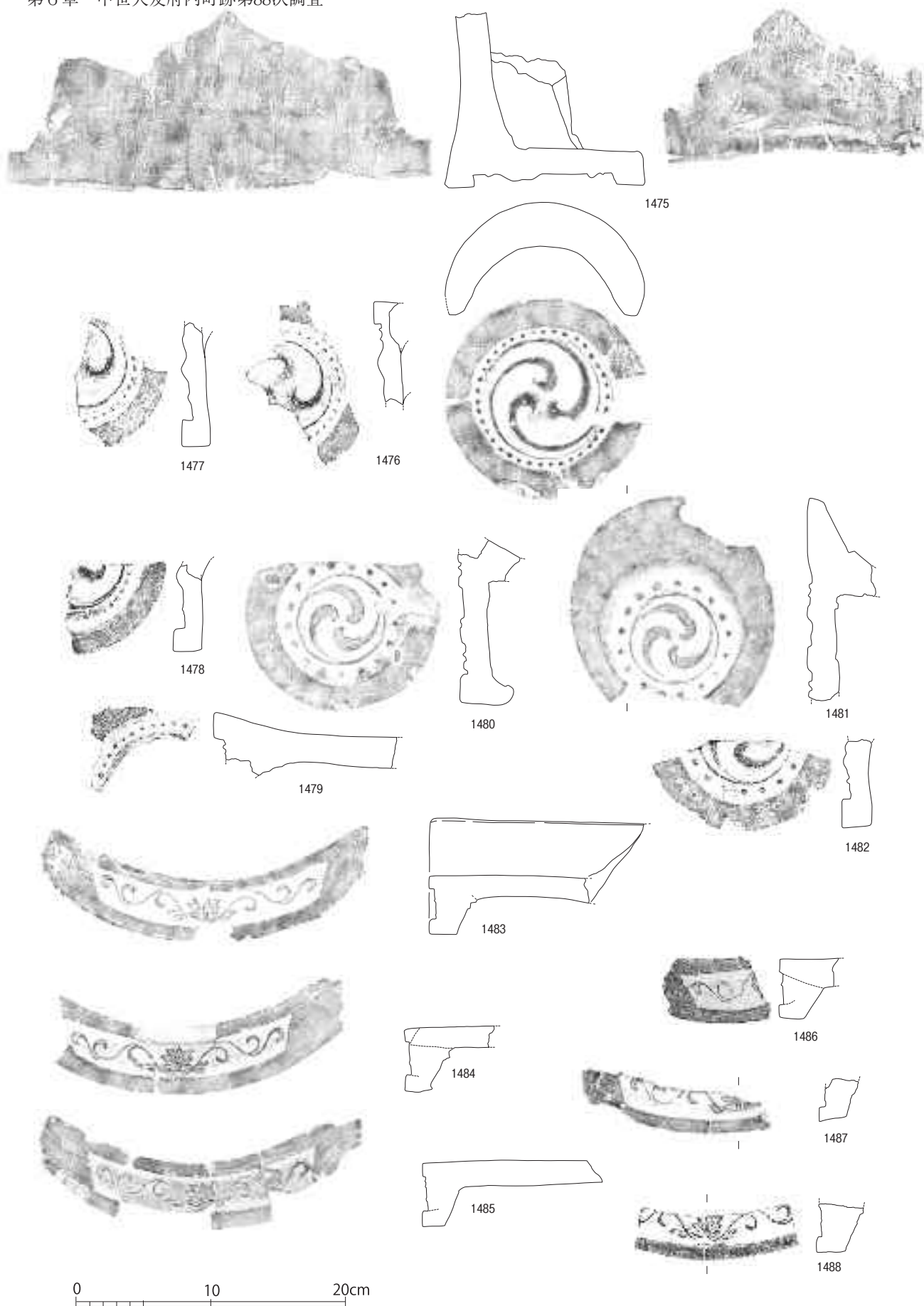
第166図 SD120出土遺物(49) (1/3)



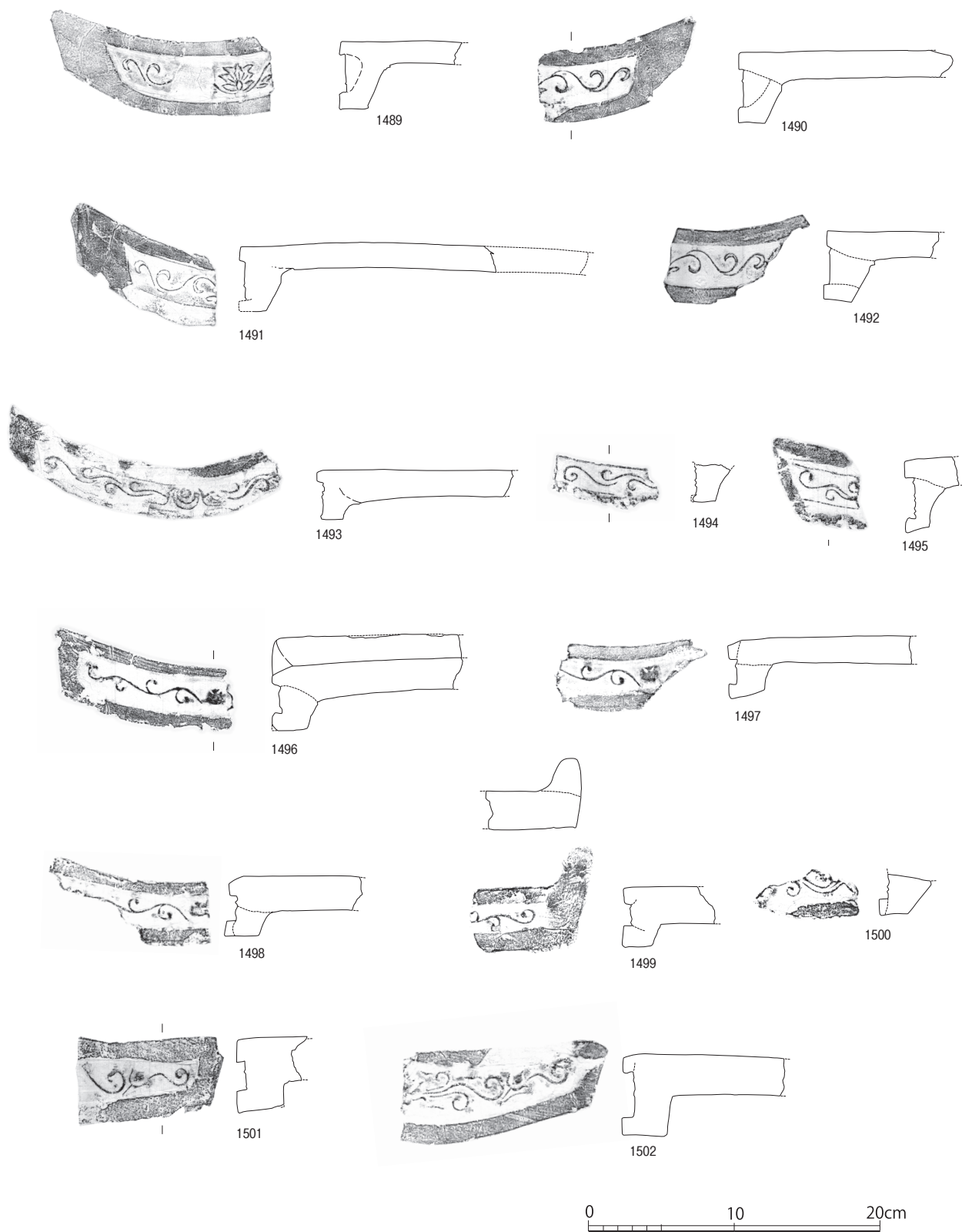


第167図 SD120出土遺物(50) (1/3)

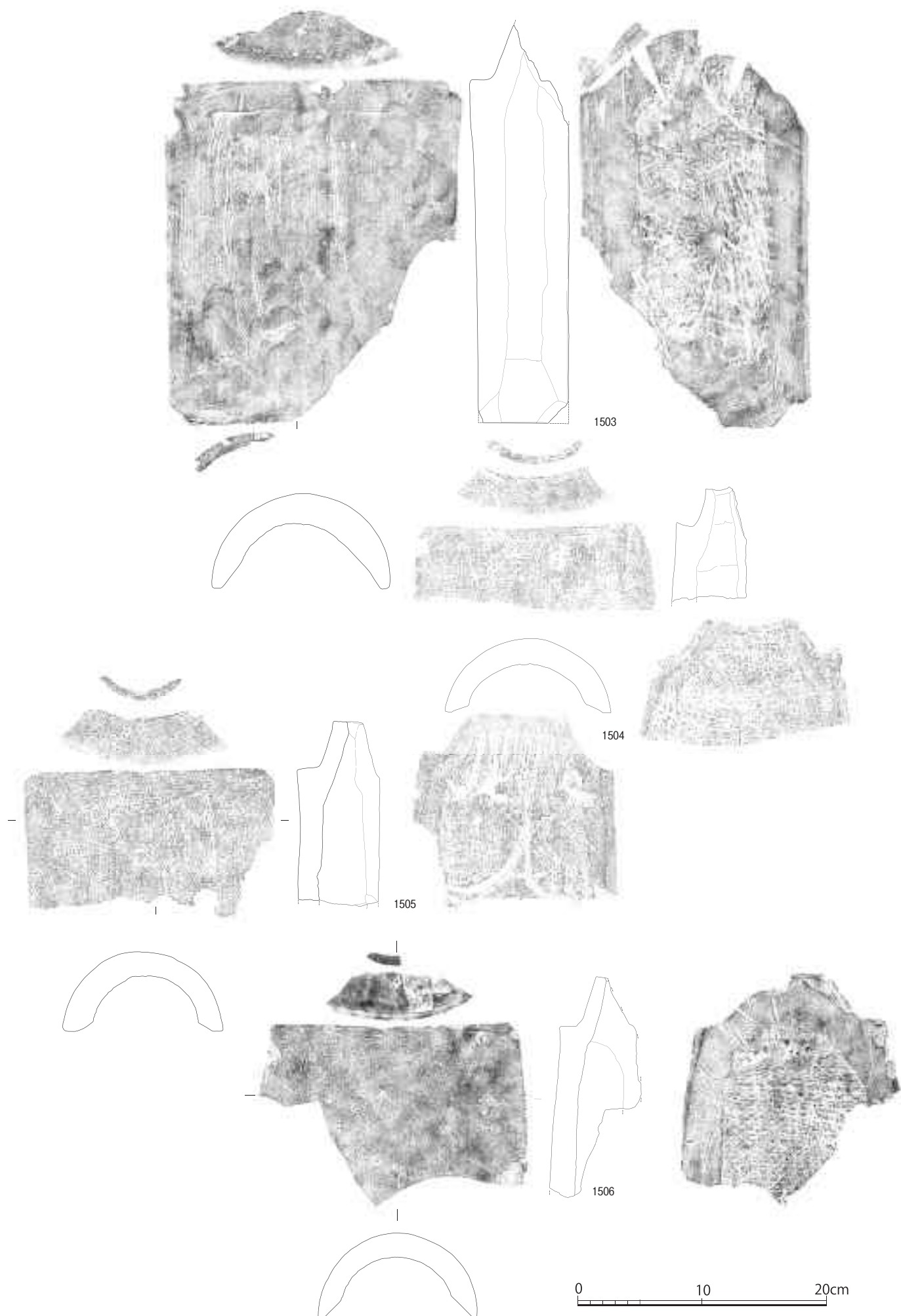




第168図 SD120出土遺物(51)(1/4)



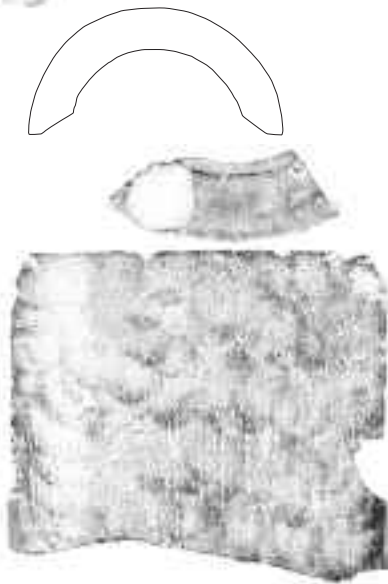
第169図 SD120出土遺物(52) (1/4)



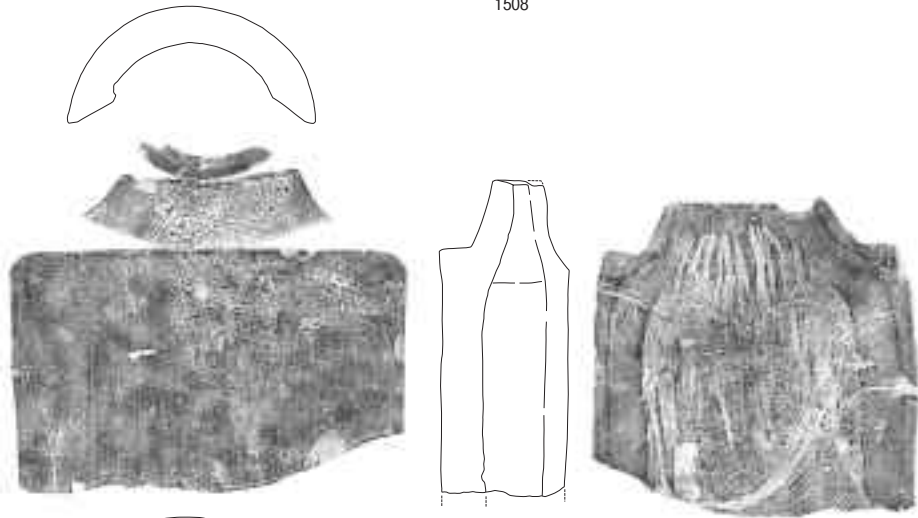
第170図 SD120出土遺物(53) (1/4)



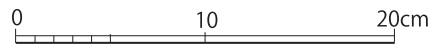
1507



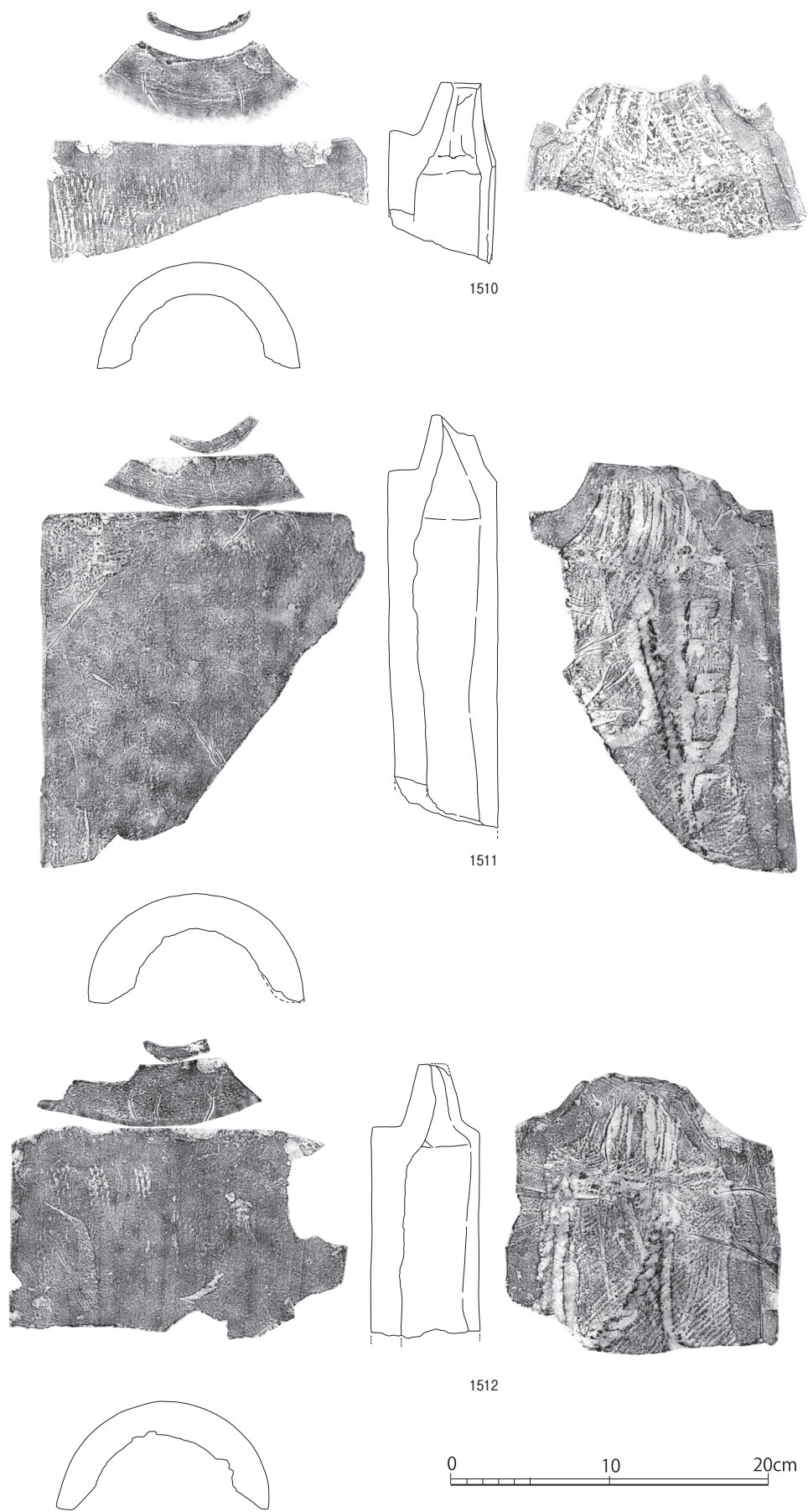
1508



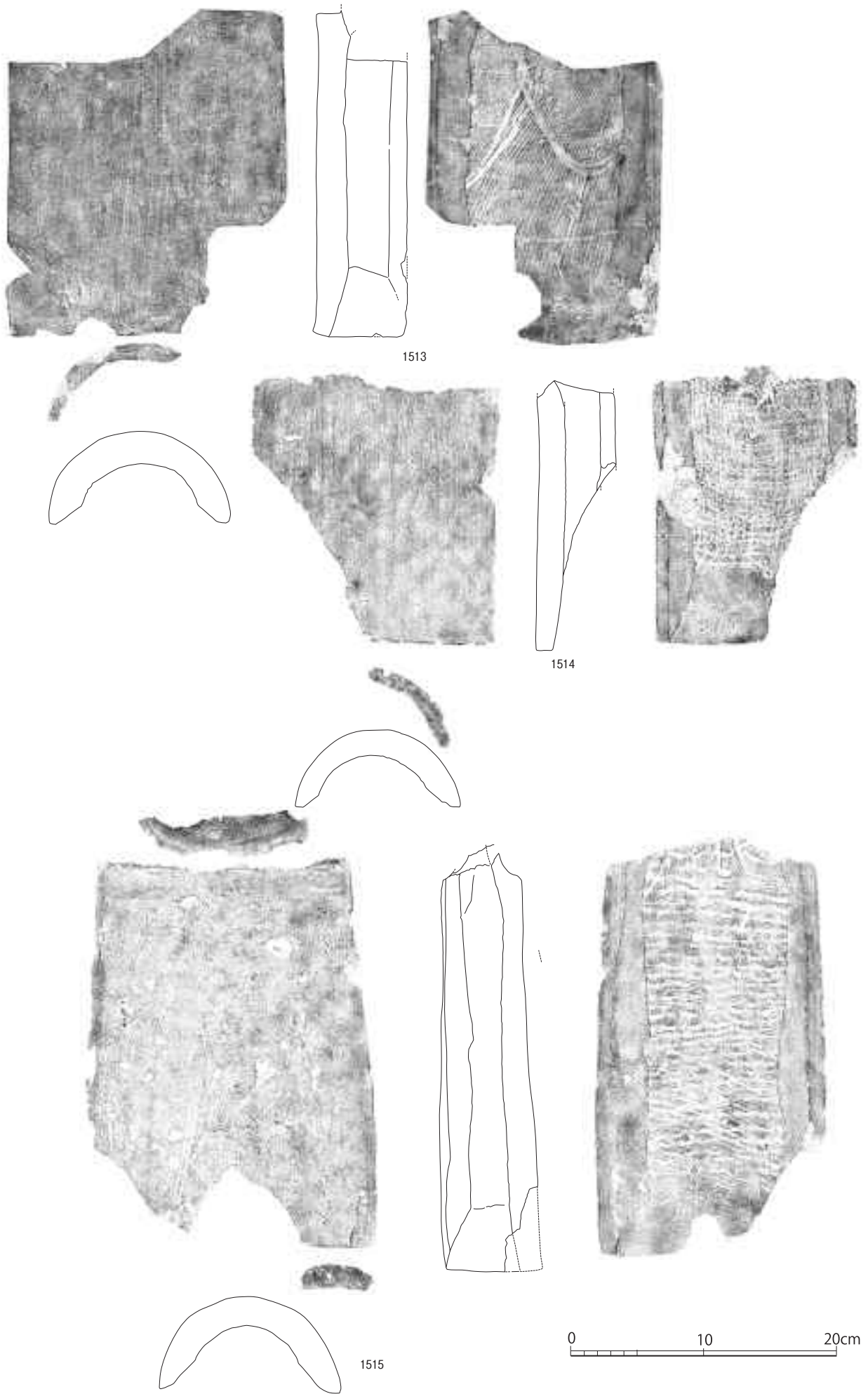
1509



第171図 SD120出土遺物(54) (1/4)



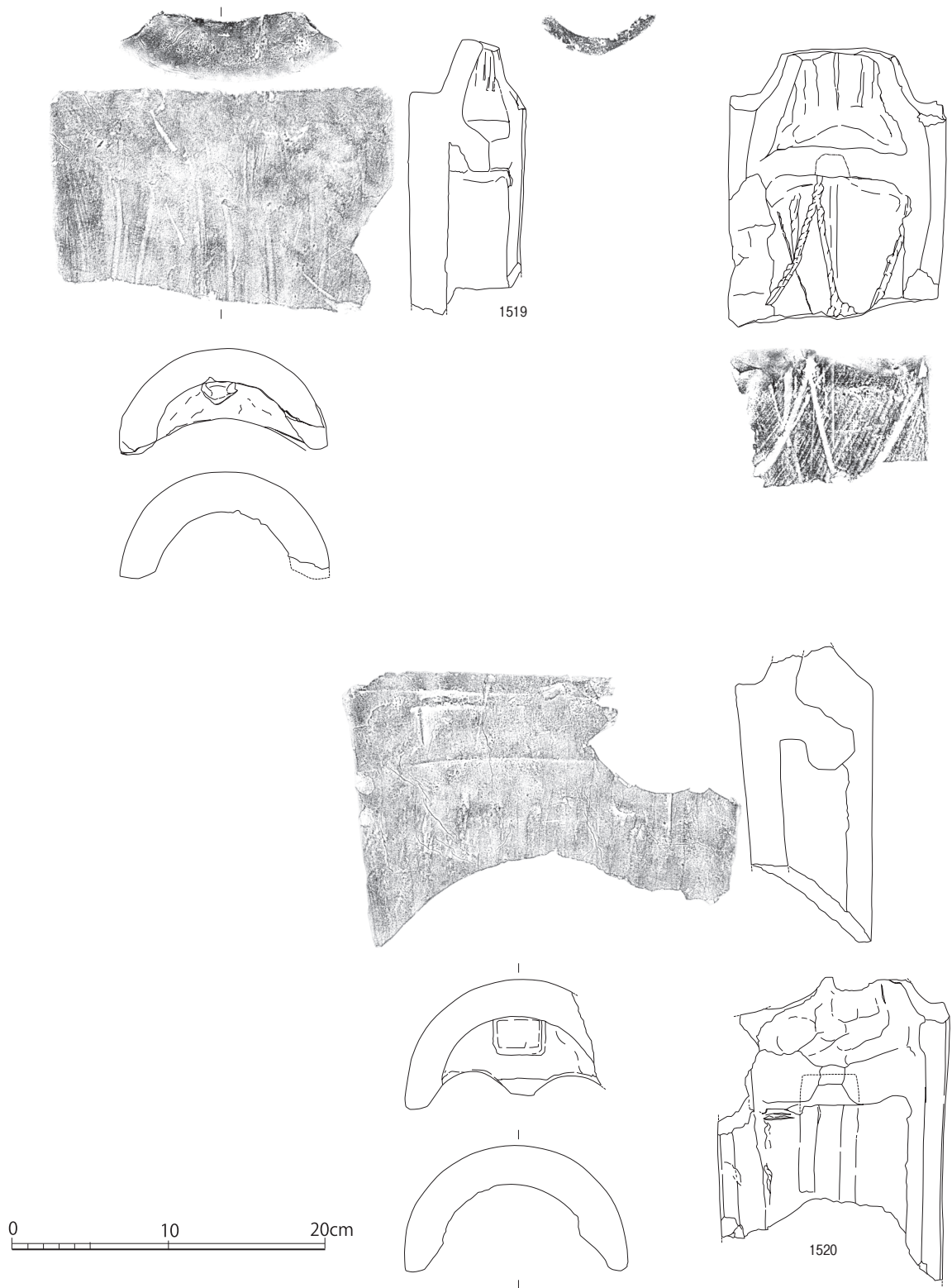
第172図 SD120出土遺物(55) (1/4)



第173図 SD120出土遺物(56) (1/4)



第174図 SD120出土遺物(57) (1/4)



第175図 SD120出土遺物(58) (1/4)